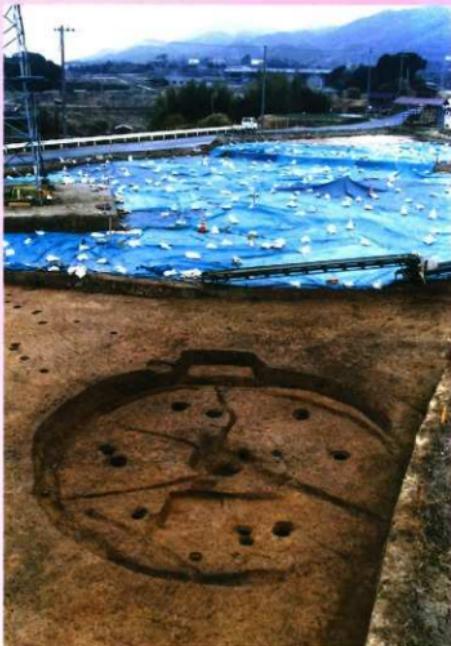


洲本市

# ニツ石戎ノ前遺跡

—ニツ石地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書—



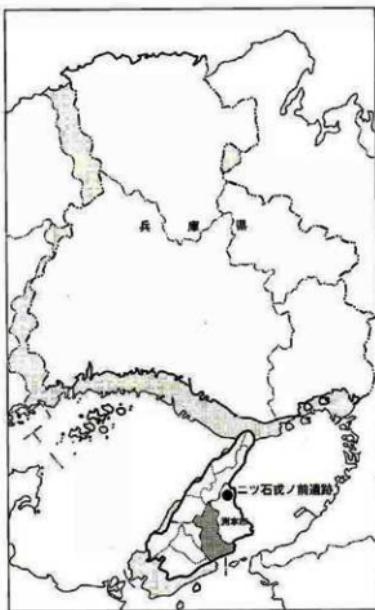
2003年3月

洲本市教育委員会  
兵庫県教育委員会

洲 本 市

# ニツ石戎ノ前遺跡

—ニツ石地区県営整備事業に伴う発掘調査報告書—





ニツ石戎ノ前遺跡遠景(南西から)



A～D地区近景(北西から)



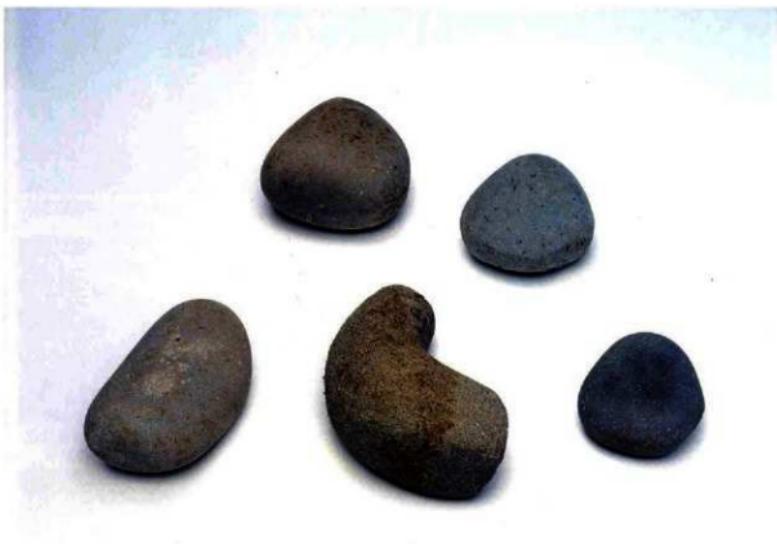
L字状石杵出土状況(南から)



A～D地区全景(南西から)



SH08(北東から)



石 杣



実体顕微鏡による朱付着土器断面写真

中国産朱(本田光子氏提供)

朱付着土器と朱

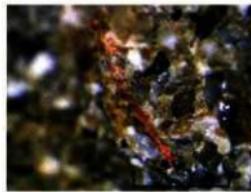


写真1 試料1赤色顔料付着状況

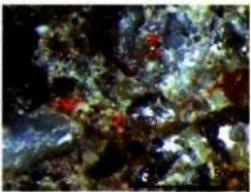


写真2 試料1赤色顔料付着状況

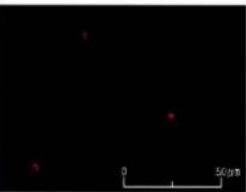


写真3 試料1赤色顔料粒子  
(光学顕微鏡)

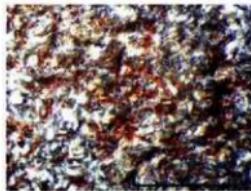


写真4 試料2赤色顔料付着状況

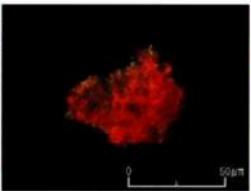


写真5 試料2赤色顔料粒子  
(光学顕微鏡)

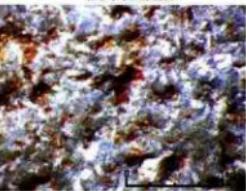


写真6 試料4赤色顔料付着状況



写真7 試料5内面



写真8 試料5赤色顔料付着状況  
①内面

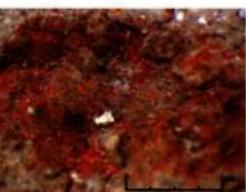


写真9 試料5赤色顔料付着状況  
②断面

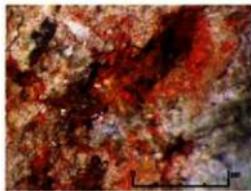


写真10 試料5赤色顔料付着状況  
③外面

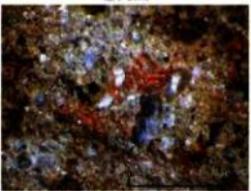


写真11 試料5赤色顔料付着状況  
④底部

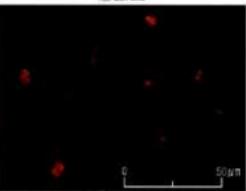


写真12 試料5赤色顔料粒子  
(光学顕微鏡)

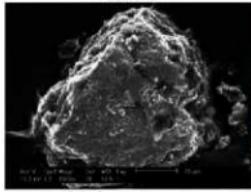


写真13 試料5赤色顔料粒子  
(電子顕微鏡)

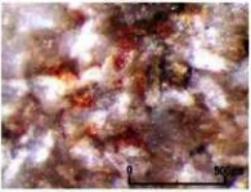


写真14 試料6赤色顔料付着状況

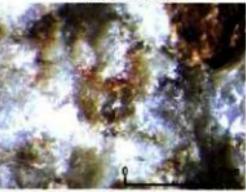


写真15 試料7赤色顔料付着状況

## 例 言

1. 本書は、兵庫県洲本市中川原町二ツ石字戎ノ前、同字蔵、同字網掛に所在する、二ツ石戎ノ前遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、二ツ石地区県営は場整備事業（担い手育成型）に伴う埋蔵文化財の事前調査である。
3. 発掘調査は、平成13年12月10日から平成14年3月22日まで実施した。
4. 発掘調査は、事業主体者の協力と地元住民の皆様の理解を得て実施された。そして、洲市教育委員会：浦上雅史・兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所：種定津介・上田健太郎が調査を担当した。
5. 発掘調査作業は、淡路土建株式会社に委託し実施した。
6. 発掘調査にかかる遺構写真の撮影は、各調査員が行った。また、空中写真撮影については、株式会社八州に委託した。なお、写真図版に掲載した遺物の写真撮影は、イーストマン株式会社に委託した。
7. 本書の執筆は各調査員が行い、文責は目次に明記した。また、本書の編集は種定が総括を行い、写真図版と挿図については岸野奈津子の協力を得て上田があつた。
8. 本書にかかわる出土遺物は、洲市教育委員会および兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所魚住分館で保管している。
9. 第5図は洲本市中川原町二ツ石出土の国指定重要文化財の横帯文銅鐸（中川原銅鐸）である。写真の掲載にあたっては、銅鐸所有者の隆泉寺（三原郡西淡町津井所在）および写真所有者の兵庫県立歴史博物館の承諾を得た。
10. 出土した石器の材質の鑑定については、兵庫県立人と自然の博物館の先山 徹氏のお手を煩わせ、示唆に富んだ教示をいただいた。記して感謝申し上げます。
11. 赤色顔料の自然科学的分析については、別府大学の本田光子氏と志賀智史氏から多大な協力をいただいた。デジタル・マイクロスコープを現地にまで運んでいただき、調査の初期段階で水銀朱の存在を指摘していただいたことは、その後の発掘調査の大きな指針となった。また、試料の分析と考察については玉穂を賜り、本書に付章として掲載することができた。心より感謝申し上げます。
12. 最後に、発掘調査および報告書作成にあたっては、以下の方々からご教示・ご指導をいただいた。記して深く感謝申し上げます。  
石井智大、伊藤宏幸、大久保徹也、岡本 稔、岡山真知子、先山 徹、定松佳重、志賀智史、田崎博之、渡毛康宏、福永伸哉、北條芳隆、本田光子、松木武彦（敬称略・順不同）

## 凡 例

1. 挿図の座標値は、平成14年4月1日の測量法改正に伴い、新たな世界測地系に基づく平面直角座標系の数値に補正している。なお、平面直角座標系は第V系を使用し、方位は座標北を示す。また、標高値は東京湾平均海水準（T.P.）を基準としている。
2. 遺物は原則として、掲載順に通し番号を付けているが、A～D地区とE地区ではそれぞれ別個の通し番号を設け、分けて掲載している。また、石器にはS、鉄器にはF、玉類にはJをそれぞれの頭に付加し、土器と区別を図っている。
3. 弥生土器および土師器については実測図の断面を白抜きにしているが、須恵器は断面を黒塗り、また黑色土器および瓦器は断面にスクリーン・トーンを貼ることによって区別している。

# 本文目次

## 第1章 発掘調査の経緯

第1節 調査にいたる経緯	(浦上)	1
第2節 調査の経過と調査組織	(種定)	2

## 第2章 遺跡の立地と歴史的環境

第1節 道路の立地と環境	(種定)	3
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境	(上田)	4

## 第3章 発掘調査の成果

第1節 調査区の設定	(種定)	7
第2節 A～D地区の調査	(種定・上田)	7
第3節 E地区的調査	(浦上・種定・上田)	43

## 第4章 まとめ

第1節 住居跡の構成と二ツ石戎ノ前集落	(種定・上田)	51
第2節 赤色顔料関連資料について	(種定・上田)	52
第3節 まとめと展望	(種定)	54

付 章 二ツ石戎ノ前遺跡出土の赤色顔料とその関連遺物 (本田・志賀) 57

## 卷首図版目次

### 卷首図版 1

上 段：二ツ石戎ノ前遺跡遠景（南西から）  
下 段：A～D地区近景（北西から）

### 卷首図版 2

上段左上：L字状石杵出土状況（南から）  
上段左下：SH06中央土坑（北西から）  
上段右：A～D地区全景（南西から）  
下段：SH08（北東から）

### 卷首図版 3

上 段：石杵  
下 段：朱付着土器と朱

### 卷首図版 4

赤色顔料付着試料の自然科学分析

## 挿図目次

第1図 事業地内における遺跡の分布	1	第33図 SB03柱穴土器出土状況	29
第2図 四国北東部-近畿西部の地形	3	第34図 SB04	29
第3図 「洲本」 国幅地域の埋谷面図	4	第35図 SB05	30
第4図 ニツ石戎ノ前遺跡と周辺の遺跡	5	第36図 SB06	31
第5図 中川原銅鐸	5	第37図 SB06柱穴石杵出土状況	32
第6図 A~D地区の設定	7	第38図 SB07	32
第7図 A~D地区遺構配置	8	第39図 SK01出土土器	33
第8図 SH01~SH03	9	第40図 SK01	33
第9図 SH01a出土土器	10	第41図 SK02	34
第10図 SH02出土土器	10	第42図 SK03	34
第11図 SH04	11	第43図 SK04・SK04出土土器	34
第12図 SH05	12	第44図 SK05・SK05出土土器	35
第13図 SH06	12	第45図 SD02~SD05	37
第14図 SH06中央土坑	13	第46図 SD01~SD03出土土器	38
第15図 SH06出土土器	14	第47図 P02	39
第16図 SH07	15	第48図 柱穴出土土器	39
第17図 SH07出土土器	15	第49図 A~D地区出土石器①	40
第18図 SH08	16	第50図 A~D地区出土石器②・鉄器・玉類	41
第19図 SH08出土土器	18	第51図 石杵頭・朱付着土器	42
第20図 SH09	20	第52図 E地区の設定	43
第21図 SH09出土土器	20	第53図 E地区遺構平面図	44
第22図 SH10・SH10出土土器	20	第54図 SD01出土製塙土器	45
第23図 SH11・SH12	21	第55図 SD01出土須恵器	45
第24図 SH11中央土坑	22	第56図 SD02出土土器①	46
第25図 SH11中央土坑出土土器	23	第57図 SD02出土土器②	48
第26図 SH12中央土坑・SK22	24	第58図 SD02出土土器③	49
第27図 SH12出土土器	24	第59図 E地区出土石器・鉄器	50
第28図 SH13	25	第60図 SD03出土土器	50
第29図 SB01	26	第61図 赤色顔料関連資料の分布状況	54
第30図 SB02・SD01	27	第62図 各試料における赤色顔料の付着箇所	60
第31図 SB01~SB03出土土器	27	第63図 電子顕微鏡写真	61
第32図 SB03	28	第64図 蛍光X線分析スペクトル	61

## 表 目 次

第1表 穴住居跡一覧	51	第2表 試料一覧と分析結果	58
------------	----	---------------	----

## 写真図版目次

### 写真図版 1

上 段：A～D地区全景（空中写真）

下 段：A～C地区全景（北東から）

### 写真図版 2

上 段：SH01（南東から）

中 段：SH01～SH03（南東から）

下 段：L字状石杵出土状況（南から）

### 写真図版 3

上 段 左：SH04（南東から）

上 段 右：SH05（南東から）

上 段 下：SH06・SH07（北東から）

中 段：SH06（東から）

下 段 左：SH06中央土坑（北西から）

下 段 右：SH07中央土坑（東から）

### 写真図版 4

上 段：SH08（北東から）

中段左上：SH08張り出し（北東から）

中段左中：SH08張り出し（東から）

中段左下：SH08床面精査状況（南西から）

中段右上：SH08中央土坑（西から）

中段右下：周縁溝土器出土状況（北西から）

下 段 左：水滴状石杵出土状況（北東から）

下 段 右：棒状石杵出土状況（北西から）

### 写真図版 5

上 段：SH10（西から）

中 段：SH11・SH12（南から）

下 段 左：SH11中央土坑（東から）

下 段 右：SH13（東から）

### 写真図版 6

上 段：SB01・SB02（北から）

中 段 左：SB04（南から）

中 段 右：SB07（南から）

中 段 下：SK04（南西から）

下 段 左：SB06柱穴水滴状石杵出土状況

（南から）

下 段 右：SB03柱穴土器出土状況（北から）

### 写真図版 7

住居跡出土土器①

### 写真図版 8

住居跡出土土器②

### 写真図版 9

掘立柱建物・溝・土坑・柱穴出土土器

### 写真図版10

出土石器・ガラス玉・鉄器

### 写真図版11

出土石杵頭・朱付着土器

### 写真図版12

上 段：E地区全景（空中写真）

下 段 左：E地区全景（北から）

下 段 右：E地区全景（南から）

### 写真図版13

上 段：SD01（北東から）

中 段：SD02・SD03（北から）

下 段 左：SD02（西から）

下 段 右：SD03（南から）

### 写真図版14

溝出土土器①

### 写真図版15

溝出土土器②

### 写真図版16

溝出土土器③・出土石器・鉄器

### 写真図版17

上 段 左：中学校生徒遺跡見学会風景

上 段 右：小学校児童遺跡見学会風景①

中 段：小学校児童遺跡見学会風景②

下 段：現地説明会風景

# 第1章 発掘調査の経緯

## 第1節 調査にいたる経緯

県営は場整備事業（狙い手育成型）ニッ石地区事業予定地はこれまで全くの未調査地区で、江戸時代の地誌「淡路草」に同地区にある琵琶川池から最古式銅鐸が出土したとの記載があるのみであった。平成10年度、兵庫県洲本土地改良事務所の依頼により事業地内における遺跡分布調査を実施し、まず大照寺周辺で、赤焼土器片、須恵器片、瓦器片等の遺物の散布が各所でみられた。分布調査の進行に伴い、事業予定地内ほぼ全域に中世を中心とした遺跡が散在することが明らかとなり、平成11年度より13年度にかけ順次、試掘・確認調査を実施した。

上記確認調査の結果に基き、遺跡の存するところでは包含層上30cm以上の保護層を確保するため、工法変更によりかなりの部分が地中で保存されているが、掘削によって遺跡が破壊される排水路部分については調査を実施し、基盤整備事業の進捗に支障のないよう努めた。しかし、ニッ石戎ノ前遺跡の存する地区は、計画では切り土面積が4,000m<sup>2</sup>以上に及ぶことから、兵庫県洲本土地改良事務所、洲本市ふるさと整備課と再三にわたって事前協議を重ね、最大限の工法変更を経て、平成13年8月28日付をもって兵庫県淡路県民局より、3,146m<sup>2</sup>を対象とした本発掘調査依頼文が洲市教育長あて提出された。ところが、本調査が大規模調査であるということ、平成13年度中に調査を終えなければいけないという時間的制約により、洲市の調査能力を超えた調査であることから兵庫県教育委員会に調査支援の可能性を打診。兵庫県教育委員会と洲市教育委員会との合同調査の可能性と調査分担等の協議を経た後、平成10年9月29日付文化庁次長通知「埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化等について」に基き、平成13年11月9日付にて兵庫県教育委員会に調査支援を文書にて依頼。履行期限を平成14年3月28日とし、洲市教育委員会は平成13年11月15日付をもって兵庫県淡路県民局ならびに兵庫県教育委員会と本発掘調査の委託契約を締結した。



第1図 事業地内における遺跡の分布

## 第2節 調査の経過と調査組織

契約に基き、本発掘調査が必要な箇所を面積によって按分し、それぞれ兵庫県教育委員会と洲本市教育委員会により分割して調査を実施した。

平成13年12月10日、調査面積の広い戎ノ前地区的調査が兵庫県教育委員会によって開始された。その後、A地区で弥生時代の住居跡が検出され、またそれに伴い淡路島では初見となった「L字状石杵」が発見されたため、朱の精製を行う集落遺跡であるとの認識を強くし、調査の精度を高める努力をはらった。その結果、内面に朱が付着した痕跡が肉眼でも確認できる土器や水滴状石杵、棒状石杵など、赤色顔料に関連する遺物が多数発見されることになった。このため、加工の有無を問わず遺構に伴うあらゆる石を探査し、事務所で洗浄したのち保管して、将来の科学分析に備えることにした。平成14年2月7日には別府大学本田光子教授を招聘し、持参されたデジタル・マイクロスコープによる調査の結果、石杵と土器に付着した顔料は水銀朱の可能性がきわめて高いことが指摘された。これを踏まえて、3月5日には大阪大学福永伸哉助教授、3月7日には徳島大学北條芳隆助教授（当時）をお招きして、朱をとりまく弥生社会の構造と淡路の位置づけなどについて教示をいただき、調査と今後の資料整理の参考とした。

また、地元小・中学校に遺跡の見学を勧誘し、2月25日には中川原小学校4・5・6年生37名、3月1日には安乎小学校5・6年生42名、同じく中川原中学校1・2・3年生58名、3月18日には中川原小学校1・2年23名の児童・生徒が見学を行った。現地説明会は3月16日に実施し、105名の参加が得られた。当日は遺構・遺物の説明だけではなく、SH08に川原石で石臼を再現し、貫頭衣をまとった「弥生人」が朱色のボスタークーラーをすって水銀朱精製過程を再現し、好評を博した。

一方、洲本市教育委員会による発掘調査も2月12日から開始された。住居跡の検出が期待されたが、結果的には平安時代の溝状遺構、弥生時代の自然流路が検出された。弥生時代の自然流路には大量の弥生土器が投棄された状態で出土するなど後期弥生土器の良好な資料を得た。

3月14日には、すべての調査区の空中写真測量と斜め写真撮影を行い、遺構平面図を作成した。そして、3月21日にはすべての現地作業を終了し、翌22日は現場事務所と資材を撤収し、平成13年度の二ツ石戎ノ前遺跡の発掘調査を完了した。

発掘調査の体制は、以下のとおりである。

- ・調査主体 洲本市教育委員会、兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所
- ・調査担当者 洲本市教育委員会 社会教育課 文化振興係長 浦上雅史、兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所 調査第4班 主査 種定淳介・技術職員 上田健太郎
- ・調査補助員 小谷義男、河合章行、柴田妃三光、仲矢咲紀、宮谷淳一郎
- ・現場事務員 北園かすみ

出土品の整理作業および報告書作成は、洲本市教育委員会と兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において平成14年度に実施した。

なお、赤色顔料の科学分析については、兵庫県教育委員会が別府大学と委託契約を行い、本田研究室に依頼した。また、石器石材の鑑定は県立人と自然の博物館の崎山徹教授の手を煩わせた。本書の第3章での石器石材に関する記載は、氏の肉眼観察から教示いただいていることを明らかにしておく。

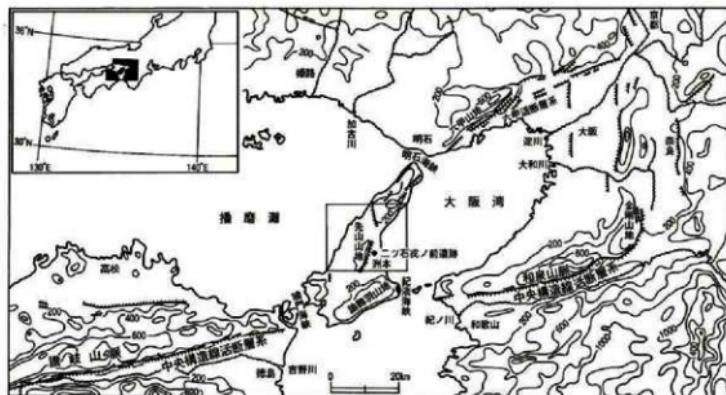
## 第2章 遺跡の立地と歴史的環境

### 第1節 遺跡の立地と環境

淡路島は、瀬戸内海東部に浮かぶ面積約596km<sup>2</sup>の瀬戸内海最大の島嶼である。北は明石海峡、東は紀淡海峡によって本州と分かたれ、西は鳴門海峡によって四国と分かたれている。地形的には、北部の北淡山地、中央部の先山山地と周辺の丘陵部、西部の西淡山地、南部の和泉層群を主体とする論鶴羽山地および三原地溝低地に大別される。そして、島の最高峰論鶴羽山（標高608.3m）を中心とする論鶴羽山地の南縁は和泉山脈から讃岐山脈にかけて東西に連なる中央構造線によって切られており、急峻な斜面を下って太平洋へといたる。

山頂に千光寺を擁し、淡路富士と称される標高448mの先山を中心として南北に延びる山並みが、先山山地である。幅約4km、長さ約15kmにわたり、淡路の中央部を南北に貫いている。この山地の形成に大きく関与した先山断層が、山地の東縁に北北東～南南西方向に約7kmにわたって認められる。そして、標高250～450mで花崗岩からなる先山山地と、標高100m以下に分布する大阪層群の丘陵との境には顕著な断層崖が発達している。この断層崖の前縁には、花崗岩由来の疊層を大量に供給して、扇状地状の河成段丘が広く分布している。そして、この扇状地段丘面を形成する小河川の水系は、遺跡の南の市原付近を境界として二分される。すなわち、二ツ石夜ノ前遺跡を含めてその北部では、小河川はすべて岩戸川に合流し、東の平安浦から大阪湾へと注ぐ。一方これより南では、洲本平野を貫流する洲本川に流れを集めながら大阪湾に到達している。

さて、この扇状地段丘面は大半は中位段丘面に属している。遺跡はこの先山山地東麓中部の段丘面の東端にあたり、段丘面がさらに東に派生した、低平な尾根状の最低位段丘の東先端部に立地している。標高は、A、B、C、D地区は65～68m前後、そこから500m東にあたるE地区は約51mである。遺跡の北は大照寺を挟んで谷が形成されているが、SH02の北半が大きく削平されていることから判明するよう



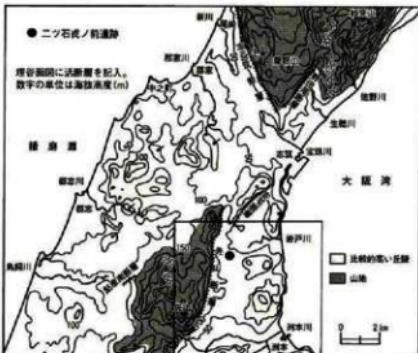
第2図 四国北東部～近畿西部の地形  
〔高橋・室川・水野・服部1992より 一部改変〕

に、本来は南北の幅が100mを超える広い段丘であったと考えられる。しかし、自然的要因によって大規模な削平を被り、遺跡の北半が流失した可能性が高い。遺跡の北に開析された谷が形成された時期を明らかにする根拠は持ち合わせないが、それは少なくとも弥生時代以降のことであって、現在の景観は往時の姿をとどめてはいない。

遺跡の南は、大歳神社を挟んで又川が東流し、700m下流で岩戸川に合流して大阪湾にいたる。東は、標高100m前後の比較的高い丘陵が、海へと張り出している。ただ、平安浦の岩戸川の河口部分が眺望を開けており、遺跡からは東北東方向に大阪湾を見通すことが可能である。さらに大気が澄んでいれば、その先に対岸の泉州地方の明かりが明滅する状況を確認できることもある。

なお、遺跡からは南西方向に先山山頂を仰ぎ見ることが可能である。

また遺跡は淡路島の東部の洲本市にあるが、島のほぼ中央部に位置し、洲本市の北部の津名町との境界に近い。地名の二ツ石（旧武ツ石村）は、古来は津名郡に属した。北の安乎町中田との境近くに、弘法大師踏割石の伝説をもち、地名の由来にもなる石がある。その前には「右先山千光寺 左すもとふくら」と刻まれた道標が残されており、古来より岩屋街道と千光寺への巡礼道との分岐点であった。遺跡が所在する先山山地と海辺の丘陵に挟まれた南北に延びる扇状地盤面は、重要な自然の通路であったことは、想像に難くない。



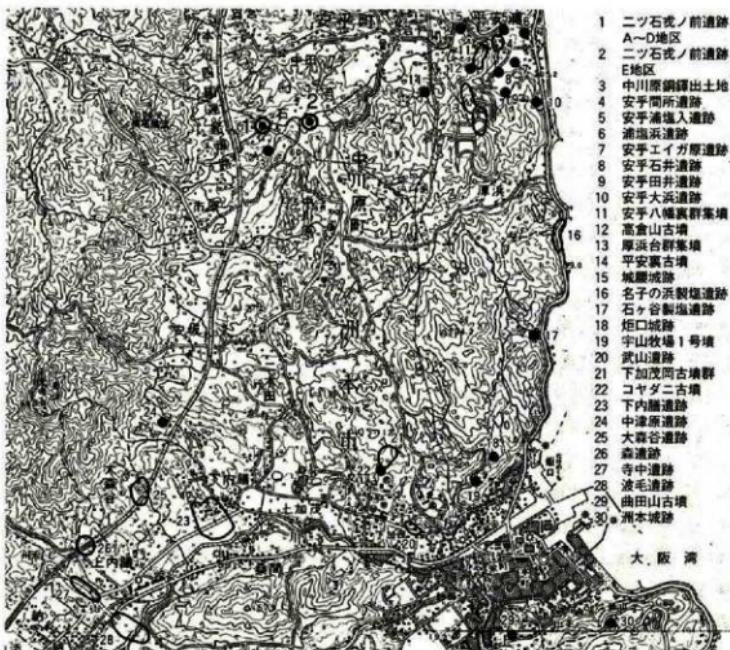
第3図 「洲本」図幅地域の埋谷図面  
(高橋・塞川・水野・服部1992より一部改変)

## 第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

旧石器時代～縄文時代 淡路島内における旧石器の発見例は少なく、発掘調査によるものでは淡路町まるやま遺跡や南淡町曾根遺跡で国府型ナイフ形石器や二次加工のある剥片が出土している。その他では、三原町浦整池遺跡でナイフ形石器が採集されているのみである。なお、有舌尖頭器は現在島内14箇所の出土が知られており、近年淡路町まるやま遺跡の調査成果によって縄文時代草創期開始直後のものとされる。洲本市域では、武山遺跡、真野谷遺跡で出土例がある。

縄文時代になると、岩戸川の河口付近に、安乎間所、安乎石井、安乎エイガ原、安乎田井、安乎浦塙入の各遺跡が点在する。三方を丘陵で囲まれたこの平安浦一帯は標高3～5m程度の小平野であり、縄文海進により入り江状に湾が入り込んでいたことが想定される。

安乎間所遺跡では、前期末の大歳山式土器から晩期後半の刻目突帯文土器まで各時期の土器が出土し、連綿と遺跡が形成・展開されていたことを窺い知ることができる。一方、洲本川の河口付近に武山遺跡でも前期の土坑と前期各期にわたる土器群が確認されている。



第4図 ニツ石伐ノ前遺跡と周辺の遺跡 (1:50,000)

**弥生時代** 前期では、武山遺跡や安乎間所遺跡が縄文時代晩期から引き続いて展開する。武山遺跡では、突帯文土器と混在する形で前期前半期の壺が確認されている。波毛遺跡の土坑からも中段階墳とみられる壺が出土している。前期後半（新段階古相）になると、安乎間所遺跡に溝2条が出現し、環濠集落であった可能性が指摘されている。下内膳遺跡でも前期末（新段階新相）の溝が検出され、多条沈線化した壺や甕が多数出土している。その他安乎田井、安乎石井の各遺跡においても前期土器の出土が確認されている。

**中期になると**、武山遺跡で中期初頭（Ⅱ様式）に方形周溝墓が出現するが、前半期の集落の発見例は少ない。宝珠川流域の津名町天神遺跡ではⅡ～Ⅲ様式の集落が確認されている。中期後半になると下内膳遺跡では最盛期を迎え、寺中遺跡や森遺跡、波毛遺跡でも集落が展開する。

淡路島の青銅器出土量は注目に値し、三原郡域では大阪湾型銅戈が三原町幡多遺跡行當地地区で、14本もの中広形銅剣が西淡町古津路遺跡で出土している。銅鐸の出土も卓越する地域であり、ニツ石伐ノ前遺跡の南側約300mには中川原銅鐸を出土した琵琶池（批地川池）が存在する。中川原銅鐸は菱環紐式2区横蒂文銅鐸



第5図 中川原銅鐸

であり、現在西淡町津井の隆泉寺に所蔵されている。菱環証式の銅鐸は県内では他に夢前町神種銅鐸が知られるが、残念ながら現存しない。

後期は淡路島内の遺跡の激増が指摘されているものの、意外に前半期の遺跡の出現は散発的である。各期連続と続く下内膳遺跡においても小康状態にある。初頭の大森谷遺跡や絵画土器を出土した五色町飛谷遺跡のほか、中津原遺跡、西淡町軒田遺跡等が知られる。いずれも丘陵上や狭い尾根筋上に立地する山間地のいわゆる高地性集落であり、中には段状遺構をもつものもある。

後期後半になると、遺跡数が激増するが、後期前半から存続する遺跡は少ない。下内膳遺跡では小区画水田および用・排水路、川状遺構が居住域と関連する形で発見されている。一方寺中遺跡や津名町林遺跡、北淡町久野々遺跡では方形周溝墓が確認されている。

**古墳時代** 前期古墳は、島内でも洲本川下流域北岸の丘陵上に立地するコヤダニ古墳および宇山牧場古墳のみである。コヤダニ古墳からは三角縁三神五獣鏡が出土しており、堅穴式石棺の存在が想定されている。宇山牧場1号墳は大正年間に五朱銭数枚と素文鏡1枚が出土している。なお、現在までに明確な中期古墳は確認されていない。

後期になると、洲本川流域では曲田山古墳など単独の古墳がみられ、群集墳では下加茂岡古墳群が知られるのみである。この時期岩戸川下流域にも安乎八幡表群集墳や厚浜台群集墳といった群集墳が認められる。安乎八幡表群集墳は古くから知られていた高倉山古墳と9基の古墳を総称しており、厚浜台群集墳は12基からなる。

また安乎大浜遺跡は大阪湾岸の砂堆上に立地し、奈良時代にかけて存続する一大製塙遺跡である。古墳時代の集落は市域では、前期の集落が下内膳遺跡で、中期から後期の集落が森遺跡で確認されている。

**奈良・平安時代** 律令期に入ると、淡路島は「淡路國」として南海道に編入される。遺跡の周辺や洲本平野は津名郡の南部に属し、「和名類聚抄」には「安乎郷」の記載が認められる。下内膳遺跡の掘立柱建物跡は、官人的性格のある豪族居館跡とされている。

**中世** 市域では炬口や由良・洲本は中世を通じて港湾が栄え、城郭が築かれ諸勢力による争奪が繰返された。遺跡周辺では貞応二(1223)年の淡路國大田文に皇室領莊園の安楽寿院領安乎庄の記載がある。

#### (引用・参考文献)

- 伊藤宏幸 2000 「天神遺跡－第2次調査－」 大石雅一(編)『津名郡埋蔵文化財発掘調査年報』 II 津名郡町村会  
伊藤宏幸 2000 「林遺跡－第2調査－」 大石雅一(編)『津名郡埋蔵文化財発掘調査年報』 II 津名郡町村会  
浦上雅史(編) 1985 『安乎郷所遺跡発掘調査概報』 洲本市文化財調査報告第4集 洲本市教育委員会  
浦上雅史 1972 「下内膳遺跡」 兵庫県史編集専門委員会(編)『兵庫県史』考古資料編 兵庫県  
大石雅一 1996 「飛谷遺跡」 足立啓介(編)『津名郡埋蔵文化財発掘調査年報』 I 津名郡町村会  
岡本徳・丹羽佑一(編) 1975 「武山遺跡発掘調査報告書」 洲本市教育委員会  
坂口弘資 2001 「楠谷遺跡」 定松住佳(編)『三原郡埋蔵文化財発掘調査年報』 I 三原郡広域事務組合  
定松住佳 2001 「幡多遺跡Ⅱ地當地区－第2次調査－」 同(編)『三原郡埋蔵文化財発掘調査年報』 I 三原郡広域事務組合  
高橋浩・寒川旭・水野清秀・服部仁 1992 「洲本地域の地図」 地質調査所  
中川透(編) 2000 「波多遺跡」 川添謙勝・兵庫県文化財調査報告第199冊 兵庫県教育委員会  
春成秀輔 1984 「最古の銅鐸」『考古学雑誌』第70巻1号 日本国考古学会  
兵庫県教育委員会 2000 「兵庫県遺跡地図」 兵庫県教育委員会  
深井明比古(編) 2003 「中津原遺跡」 洲本市教育委員会・兵庫県教育委員会  
別府洋二郎(編) 1985 「大森谷遺跡」 兵庫県文化財調査報告第27冊 兵庫県教育委員会  
三木文雄 1969 「三原郡西淡町古津路出土の石劍」 尾馬悦蔵他(編)『神戸市桜ヶ丘銅鐸・銅戈調査報告書』 兵庫県文化財調査報告第1冊 兵庫県教育委員会  
三原慎吾(編) 1996 「まるや遺跡」 兵庫県文化財調査報告第178冊 兵庫県教育委員会  
山田清朝(編) 1996 「下内膳遺跡」 兵庫県文化財調査報告第155冊 兵庫県教育委員会  
の平凡社地方資料センター(編) 1999 「兵庫県の地名」 I 日本国史地名系29 平凡社  
吉誠雅仁(編) 1988 「森遺跡」 兵庫県文化財調査報告第55冊 兵庫県教育委員会  
吉誠雅仁(編) 1989 「寺中遺跡」 兵庫県文化財調査報告第64冊 兵庫県教育委員会  
吉誠雅仁(編) 1989 「鉢田遺跡」 兵庫県文化財調査報告第78冊 兵庫県教育委員会

## 第3章 発掘調査の成果

### 第1節 調査区の設定

確認調査の結果、遺構・遺物が検出され、本発掘調査が必要となった地区は、中川原町二ツ石字戸ノ前および字蔭と、その500m東にあたる字網掛の2箇所になる。

前者は、西から東に標高が下がる4面の水田であり、それぞれを西からA、B、C、D地区と呼称する。字名はA、B、Cの3地区は字戸ノ前、D地区が字蔭となる。標高はA地区が68.5m、一番低いD地区との現況の比高差は、約3mである。この4地区の調査面積は、2,911m<sup>2</sup>である。

後者の字網掛をE地区とする。標高は50.8m、調査面積は243m<sup>2</sup>である。



第6図 A~D地区の設定

### 第2節 A~D地区の調査

#### 1 積穴住居跡

A、B、Cの3地区から、計13軒検出した。円形ないし隅円方形をなし、直径7~9mの規模である。床面の残存する6軒にはすべて周壁溝が存在した。建て替え・拡張を行っているものが認められた。

時期の判断しうる土器が出土した住居跡は、いずれも弥生時代後期前半に帰属する。

#### SH01~03 (第8図・写真図版2)

検出状況 調査区西端において近接して切り合いの認められた3軒の積穴住居跡をSH01~SH03とした。切り合いからSH02・SH03・SH01の変遷が考えられるが、SH02とSH03の先後関係は不明である。

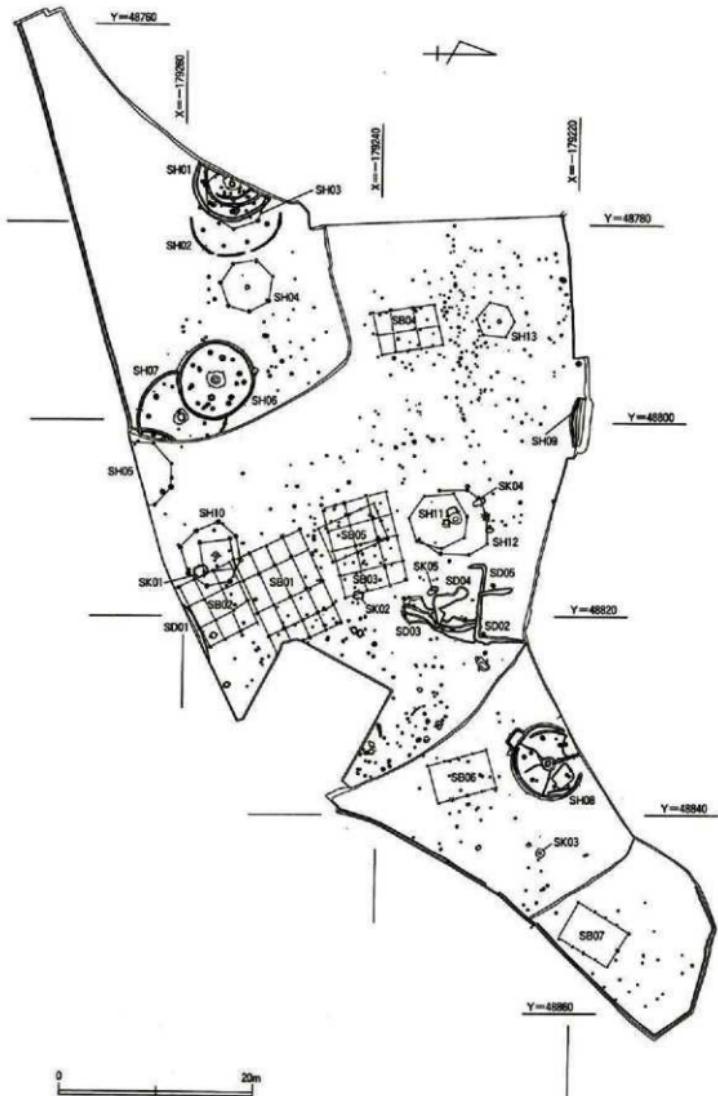
#### SH01 (写真図版2)

検出状況・形態 検出した箇所の北西側は急激な崖状地形を呈し、住居跡範囲の北西側約半分が調査区外に及ぶ。検出範囲内で全周する2重の溝と半周する溝の合計3条の溝が確認され、全周する2本の溝は平行しない。2つの溝の弧の中心は近接するが、両者に対応すると考えられる中央土坑がそれぞれ存在する。ここでは両者が建て替えによる変遷と考え、内側の周壁溝で囲まれるものとSH01a、外側を周壁溝とするSH01bとし、古いほうからSH01a→SH01bと変遷とする。

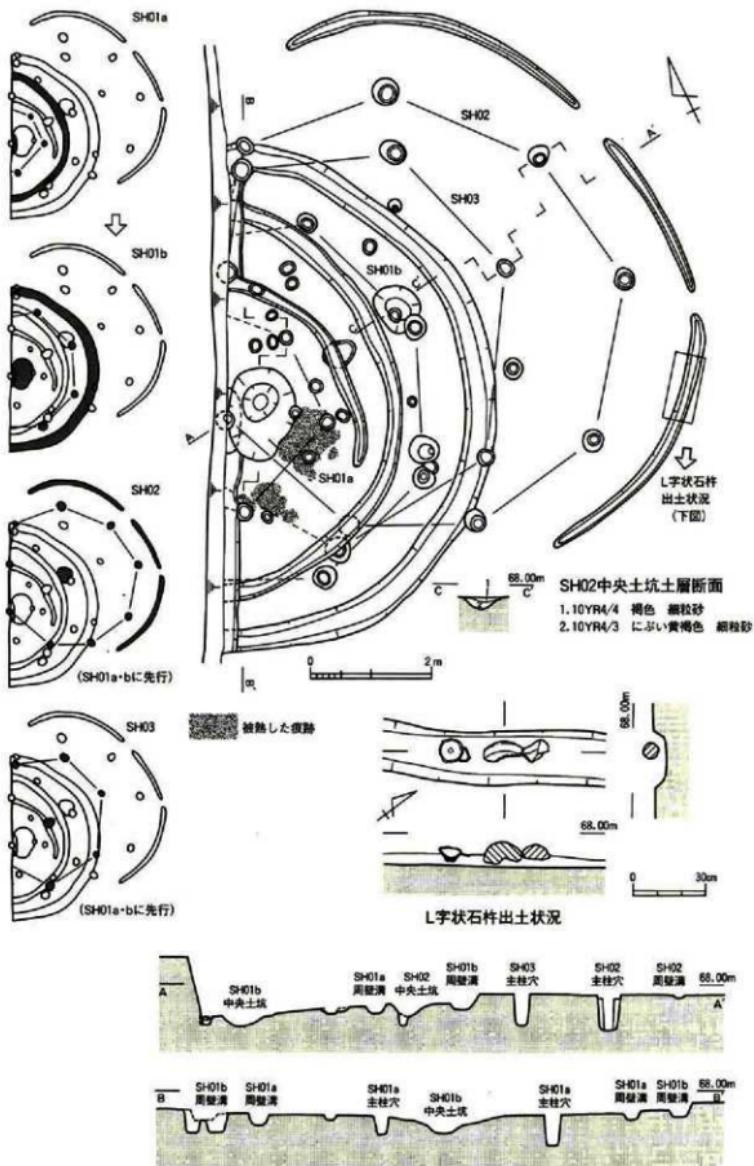
SH01a 直径6.5mの円形住居跡である。床面から約5cmの厚さで埋土が残存するが、その上方はSH01bに切られる。検出面から床面までの深さは最大で約23cmを測る。検出した範囲の床面積は13.5m<sup>2</sup>。床面積全体を復元すると33.4m<sup>2</sup>となり、検出範囲はその40%である。

屋内施設 周壁溝と主柱穴、中央土坑を検出した。

周壁溝 幅は36~54cmと幅広で、床面から底部までの深さは8~12cmを測る。



第7図 A~D地区造構配置



第8図 SH01～SH03

**主柱穴** 3本検出した。合計6本に復元され、調査区外に3本存在することが推定される。

**中央土坑** SH01bの中央土坑付近にわずかに浅く痕跡が認められた。詳細は不明である。

**SH01b** 直径8.2mの円形住居跡である。検出した範囲の床面積は28.3m<sup>2</sup>。床面積全体を復元すると52.5m<sup>2</sup>で、検出範囲はその54%である。床面のレベルは標高67.7m前後であり、SH01aとの床面レベルの差は約5cmである。SH01bに拡張後はSH01aの157%の床面積となる。

**屋内施設** 周壁溝と主柱穴、中央土坑を検出した。

**周壁溝** 幅は22~34cm、床面から底部までの深さは7~12cmを測る。

**主柱穴** 4本検出した。合計8本に復元され、調査区外に4本存在することが推定される。みな直径35cm程度で、深さは43~68cmである。

**中央土坑** 長軸約150cm、短軸120cm前後の橢円形をなし、底部の床面からの深さは28cmを測る。中央土坑の南側の周囲一帯には、焼土痕跡が認められる。

#### 出土遺物

**土器** (第9図・写真図版7) 周壁溝から出土した土器。1は端面に2条の凹線を施す壺である。2はわずかに上げ底の底部。内外面ともにナデで調整する。底径は4.1cm。3は脚端部で、外面はヘラミガキ。端部外面には甘い四線を巡らせていている。

**石器** (第50図・写真図版10) S19は188.1gと重量に富むが、平坦面が形成されやや粗めの擦痕が認められる。S20は投弾であろうか、103g。S22・S25は台石で、平坦面に目の細かい擦痕が認められる。床面より露出した部分が赤化する。いずれも花崗斑岩製で、SH01a床面出土。S26はSH01bの主柱穴出土の砥石で、細粒砂岩製。表正面と裏正面に砥面を形成し、裏正面側の下端を欠損する。両正面ともに長軸方向と交わる方向の目の細かい擦痕が多く認められる。

**鉄器** (第50図・写真図版10) F1はSH01a床面出土。長さは3.8cm、側面形は正面側に強く反っている。

#### SH02 (写真図版2)

**検出状況・屋内施設** 造構検出面において、すでに床面付近まで削平されていた。しかし、周壁溝は残存し、主柱穴、中央土坑も確認できた。SH01に切られるために、検出面のレベルで確認できた範囲は、SH01の範囲を除く全体の約半分にとどめる。

**形状と規模** 直径9.3mの、隅九方形に近い円形プランをもつ。全体の床面積は69.8m<sup>2</sup>に復元される。

**周壁溝** 検出面のレベルでは全周せず、削平のためか本来途切れていたのかは不明である。

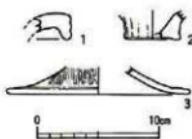
**主柱穴** 調査区壁間に検出された2本を含めて、9本すべてが検出されている。

**中央土坑** SH01の床面検出時に、底部付近の残存が認められた。検出面から底面までの深さは40cm。

#### 出土遺物

**土器** (第10図・写真図版7) 周壁溝からL字状石杵に共伴して出土した、上げ底気味の底部である。径は4.1cm。内外面ともに磨滅が著しく、調整は不明である。

**石器** (第49・51図・写真図版11) 周壁溝から砥石(S16)とL字状石杵(S27)が出土している。砥石は砂岩製で、正面になだらかな面を形成するが使用により中央付近がくぼむ。重量は189.4gである。



第9図 SH01a出土土器



第10図 SH02出土土器

L字状石杵は細かい敲打や入念な研磨により、丸みを帯びたL字形に成形されている。砂岩製で、検出時上に向いていた屈曲部を中心に約半分の範囲に風化を受ける。下端のすり面は、屈曲部に向けて漸移的にカーブを描きながらも平滑な面が形成される。すり面の長軸方向には平行な向きの擦痕と、斜めに直交する向きの擦痕が認められ、いずれもかなり目が細かい。肉眼では赤色顔料の識別は困難であるが、デジタル・マイクロスコープの観察により、すり面の鉛物の隙間において水銀朱の付着が確認された。図示した石器の天地長を全長とすれば、14.1cmを測る。同じく幅は、欠損するすり面先端を復元すれば11.4cm、すり面の幅は6.5cm、また重量は1077.4gである。

#### SH03 (写真図版2)

**検出状況・屋内施設** 床面は完全に削平されている。遺構検出面においてSH01の粗土との判別は困難で当初認識できなかった。SH01a床面検出後に主柱穴と中央土坑を確認した。

**主柱穴** 5本検出した。7本に復元され、調査区外に2本存在すると推定される。

**中央土坑** 埋土は炭を一定量含み、底部は柱穴底部より5~18cm上のレベルであった。

**出土遺物** (第49図・写真図版10) 主柱穴から弥生土器の細片がわずかに出土しているほか、主柱穴の一つから柳葉形の打製石鎌(S4)が出土している。長さ4.1cm、重さは2.2gである。

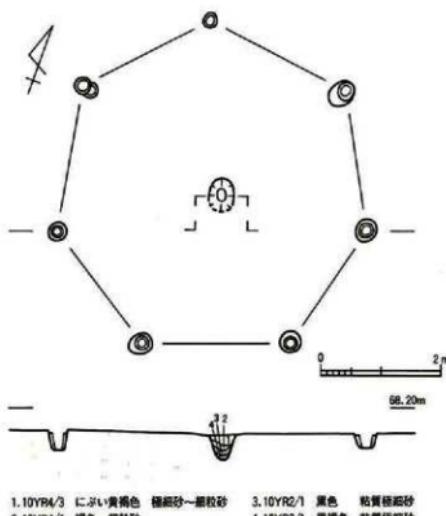
#### SH04 (第11図・写真図版3)

**検出状況・屋内施設** 床面はすでに削平されており、主柱穴および中央土坑のみ検出した。

**主柱穴** 7本検出した。ほぼ等間隔に並んでおり、みな深さ30cm前後と平均的な深さである。7本の主柱穴の描く円弧は、後述するSH06の主柱穴の描く円弧とほとんど同規模であり、本来住居跡の直径8.2m前後であったと考えられる。

**中央土坑** 床面から底部までの深さは約40cmを測り、主柱穴よりもやや深い。埋土4層のうち下2層は、炭を多く含む。

**出土遺物** 主柱穴や中央土坑から弥生土器の細片が出土している。



第11図 SH04

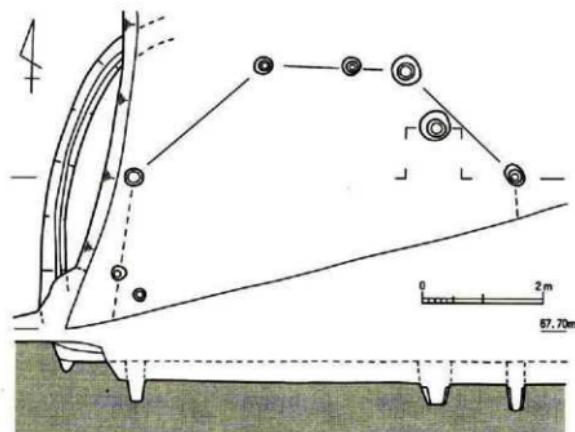
#### SH05 (第12図・写真図版3)

**検出状況・屋内施設** 検出した範囲の大部分は、床面のレベルから深さ約50cmほど削平されており、床面および周壁溝は東側にわずかに残るのみである。主柱穴4本を確認したものの中央土坑は検出できなかった。恐らく中央土坑は本来深さの浅いタイプであったと考えられる。

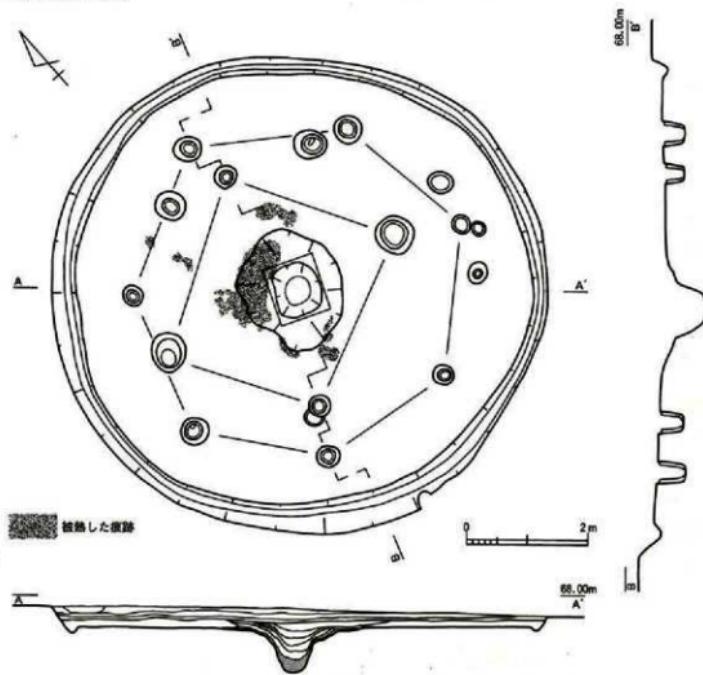
**主柱穴 挖り方**  
の直径25~45cm、  
深さ30cm程度の柱  
穴4本を検出した。  
ほぼ等間隔に  
並んでおり、本来  
の主柱穴は、合計  
8本に復元される。

**出土遺物** 主柱穴  
や中央土坑から弦  
生土器の細片が若  
干出土している。

ただし、固化し  
て提示しうる資料  
は存在しなかった。



第12図 SH05



第13図 SH06

### SH06 (第13図・写真図版3)

検出状況 A地区の東側に位置し、平面プラン全体を検出した。最も残りのよい部分では、検出面から床面までの深さ32cmを測る。床面のレベルは標高67.4m前後を測る。南側のSH07を切る。

形状と規模 直径8.2mの円形のプランである。床面積は50.8m<sup>2</sup>を測る。

屋内施設 周壁溝・主柱穴・中央土坑がある。

周壁溝 全周する。周壁溝の幅は24~28cm、床面から底部までの深さは6~10cmを測る。

主柱穴 合計11本を検出した。内側に4本が並ぶ構造から、外側に環状に7本並ぶ構造への変遷が考えられる。外周する7本の主柱穴間は2.3m~2.7mを測り、みな直径40cm、深さ32~60cmである。内周する4本の主柱穴間は2.6m~3.2mを測る。このうちの2本の掘り方は直径・深さとともに60cm前後で、他の2本の直径や深さから突出した規模である。なお、4本主柱穴の北側を除く3本と、7本主柱穴の描く弧の北側に近接する2本の柱穴を含めた5本が、5本主柱穴として存在していた可能性がある。

中央土坑 (第13図) 長辺85cm、

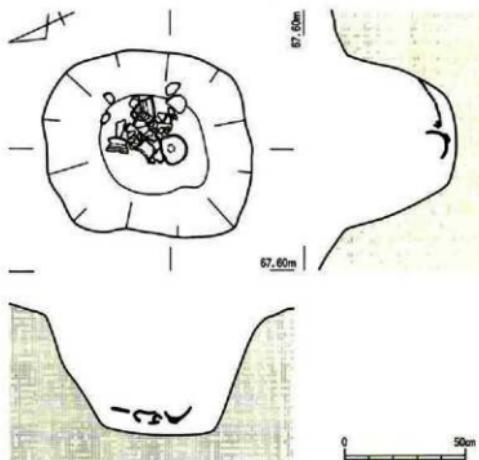
短辺74cmの隅丸長方形をなし、

床面から底面までの深さ72cmを測る。周囲が浅く、中央が深い二段掘り状である。最下層では炭を多く含む灰で満たされ、上半部に土器群が、さらにその直下に水滴状石片が存在した。

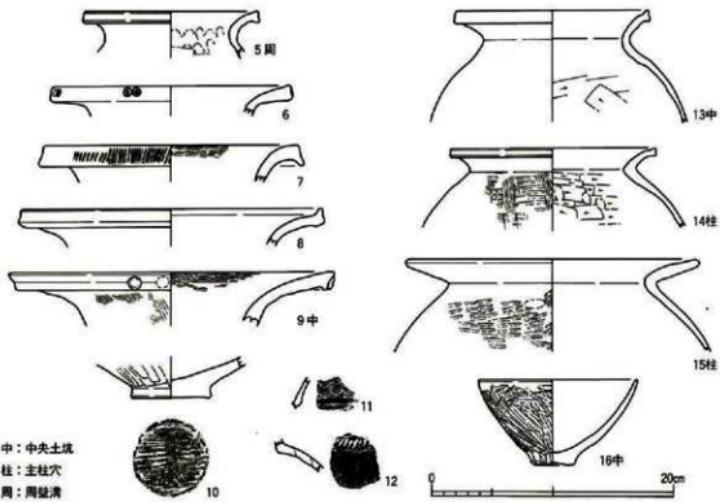
中央土坑の北西側を中心とする周囲の床面に、被熱した痕跡が顕著に認められる。そして図示できなかったが、さらに外側には炭を多く含む厚さ数cmの黒褐色土層が環状に土手状にまわっていた可能性が高い。

出土遺物

土器(第15図・写真図版7・8) 5~9は外方に開く口頭部をつける壺である。5は口縁端部をわずかに肥厚させ、体部内面は横方向のヘラケズリと頭部にはユビオサエが認められる。口径は14.1cmである。6は口縁外端面に、竹管文を施した円形浮文を2個1対で巡らせる。7は口縁端部を下方へ拡張し、外端面に斜線文を飾り、8は端部を上方につまみ上げるように拡張させる。9は口縁外端面に円形浮文を施し、口径は25.8cmである。10は径6.6cmの平底で、板状工具の痕跡をとどめる。11は屈曲する口縁に波状文、12は胴部の上端に刺突文をもつが、小片のため詳細は不明。13は口縁端部を上下に拡張し、内面はヘラ削りで仕上げる。14、15は「く」字状の屈曲が強い壺である。14は体部外表面を横方向の平行タタキののち、部分的に縱方向の板ナデで仕上げ、内面は横方向のヘラケズリを施す。また15は、体部外表面を横方向の平行タタキで仕上げている。16は外表面をヘラミガキで仕上げた直口鉢である。口径13.0cm、器高7.0cm。これらのうち中央土坑から石杵と共にした土器は、9、13、16である。



第14図 SH06中央土坑



第15図 SH06出土土器

埋土からは水銀朱が付着した底部（第51図・巻首写真図版3・4・写真図版11）が出土した。平底で、径は4.3cmを測る。内面の水銀朱は肉眼でも観察可能であるが、デジタル・マイクロスコープでは底面と断面にも付着していることが判明した。

**石器**（第49-51図・写真図版10・11）打製石器が2点、S2は周壁溝から、S6は床面上から出土している。S29は隅円の二等辺三角形をなす水滴状石片である。下端に明確な鏽をもつり面が形成され、すり面の長軸方向と交わる方向の擦痕が認められる。鏽の部分を中心に肉眼でベンガラの付着が確認できる。上端にも端面を形成し、側縁には磨耗しながらもわずかに成形時の線状の敲打痕跡が認められる。花崗岩中に含まれる安山岩質の黒色含有物を用いており、長さ8.4cm、幅7.2cm、厚さ3.3cm、重さ294.1gを測る。他に図示しなかったが、床面近くから頁岩製の砥石の小片が出土している。

#### SH07（第16図・写真図版3）

**検出状況** 東端において全体の約5分の1の範囲が削平されていた。検出面から床面までの深さは、残りのよい西側でも10cm程度で、崖段面に近い東側では検出面がほぼ床面のレベルに達していた。床面は西から東にかけてわずかに傾斜し、標高67.5~67.6mを測る。SH05を切り、SH06に切られる。

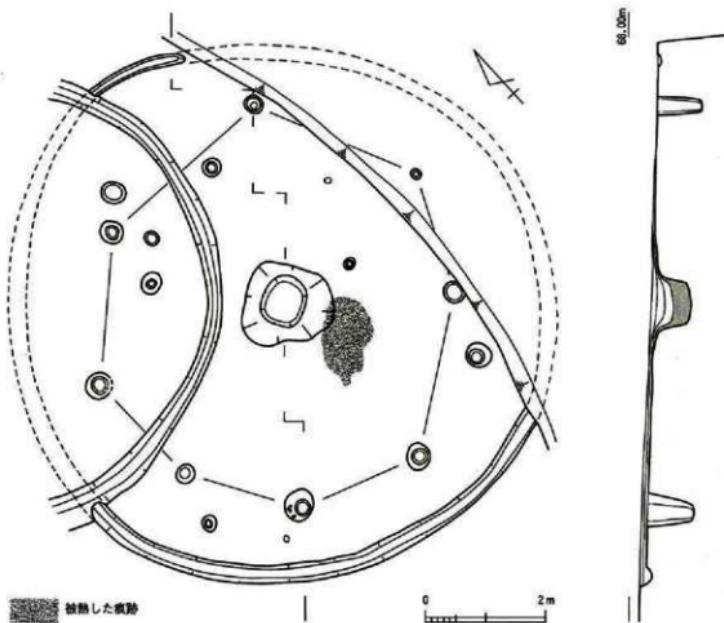
**規模・形態** 直径9.0mの円形に近いプランをもつ。床面積は64.0m<sup>2</sup>に復元される。

**屋内施設** 周壁溝・主柱穴・中央土坑がある。

**周壁溝** 床面の検出した範囲では全周する。幅約30cm、床面から底部までの深さは8~12cmを測る。

**主柱穴** 8本検出した。深さ56~73cmを測り、後述する中央土坑に近いレベルである。

**中央土坑** 周囲が浅く、中央が深い二段掘り状で、中央部の断面は円筒形状をなす。平面形は長辺74cm、短辺55cmの隅丸長方形をなし、床面から底面までの深さ約60cmを測る。埋土には炭や灰が多く含まれていた。また、中央土坑の南東側の床面に被熱による焼土の広がりが認められた。

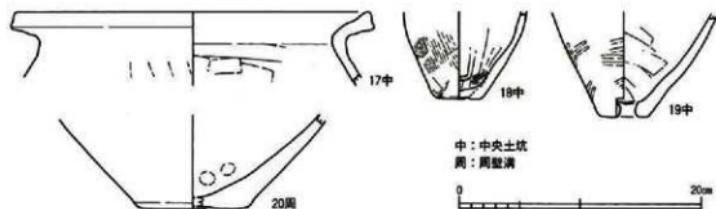


第16図 SH07

#### 出土遺物

**土器**（第17図・写真図版7） 17は口径28.8cmの大型の口縁部である。磨滅のため調整などは不明。18、19は甕底部。18は外表面をハケ調整し、内面を板状工具でナデ調整する。19は外表面はタタキを一部ナデで消し、底部を穿孔している。20は平底の底部であるが、外表面は磨滅のため調整などは不明。底径は9.6cmである。

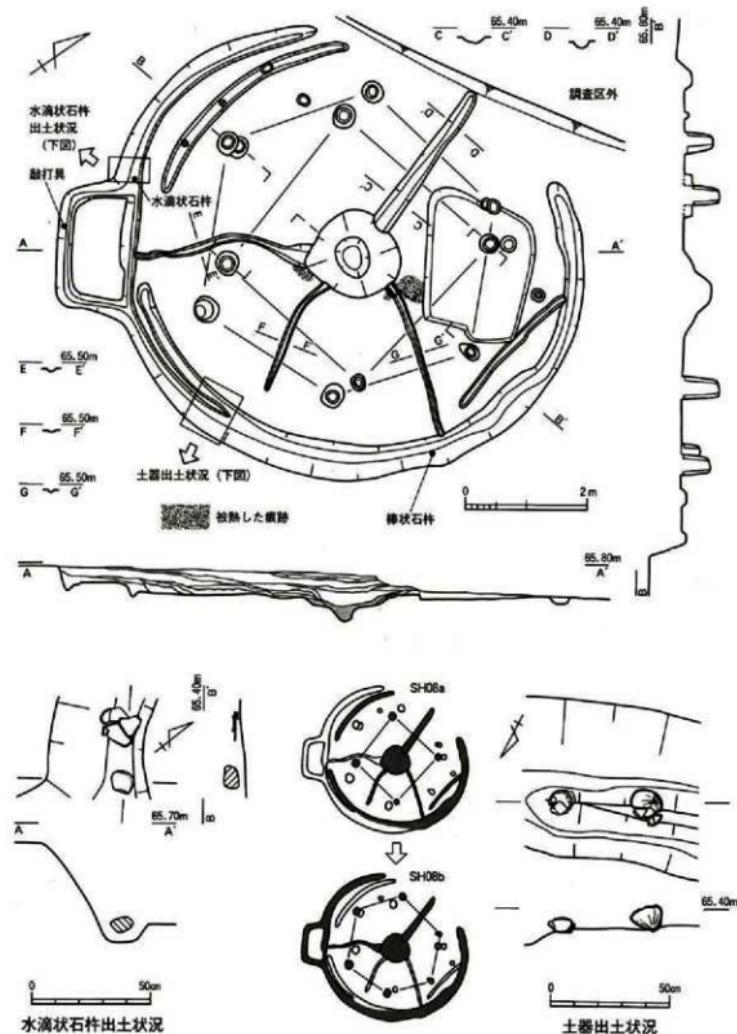
**石器**（第49図・写真図版10） S 5 は厚みのある柳葉形の打製石鎌である。基部を欠損するが長さ4.1cm、幅1.5cm。S 7 は凹基式の打製石鎌である。長さ2.8cm、幅2.6cm、重量は1.8g。いずれもサヌカイト製である。



第17図 SH07出土土器

SH08 (第18図・写真図版4)

検出状況 C地区の北側に位置する。検出した範囲の東側（調査区壁側）では、調査区外への傾斜に準じて削平を受ける。床面のレベルは標高65.2~65.3mで、最も残りのよい部分では、検出面から床面までの深さ42cmを測る。周壁溝・主柱穴の状況から2時期の変遷 (SH08a→SH08b) が考えられる。



第18図 SH08

### SH08a

**規模・形態** 直径7mの円形に近いプランをもつ。床面積は43.0m<sup>2</sup>に復元される。

**屋内施設** 周壁溝と4条の屋内溝、主柱穴4本と中央土坑が該当すると考えられる。

**周壁溝** SH08bの周壁溝と重複しない箇所で、残りのいいところでも現状で幅25cm、深さ8cmである。SH08bの張り出し部に近いところで途切れている。

**屋内溝** 中央土坑から放射状に熊手形に3条、周壁溝に沿って弦状に1条検出した。SH08bのものに比して浅く、SH08bの床面設営時に削平された可能性が高い。細い3条は幅10cm程度で、周壁溝から中央土坑に向かって傾斜する。太い1条は中央土坑から周壁溝に向かって傾斜しており、中央土坑に最も近いところで幅34cm、深さ14cmを測る。

**主柱穴** 主柱穴は4本がSH08aのものに該当すると考えられる。主柱穴の間隔は北から時計まわりに、3.18m、3.16m、2.94m、3.06mであり、一辺3m前後の正方形を構成する。

**中央土坑** 一辺約137cmの隅丸方形に近い形状をなし、方形プランを意識した可能性がある。2段に掘り込まれており、中央に向かって緩く下がるすり鉢形の断面形をなす。床面から底面までの深さ約40cmとやや浅いタイプである。中央土坑の周囲には、東側と南西側の床面に被熱の痕跡が認められる。

### SH08b

**規模・形態** 直径7.5m前後のやや楕円形気味のプランをもつ住居跡で、床面積は47.8m<sup>2</sup>に復元される。

**屋内施設** 周壁溝と2条の屋内溝、主柱穴6本、中央土坑、さらに張り出しが該当すると考えられる。

中央土坑および周壁溝や屋内溝の一部はSH08aと重複する。

**周壁溝** 検出範囲の東側はSH08aの周壁溝と重複する。重複しない部分で幅26~43cm、深さ8cm程度を測る。張り出し周囲にも通り、その底部と床面部分の周壁溝底部とのレベル差は約10cmである。

**屋内溝** 中央土坑から放射状に2条の溝が設けられる。細い1条は幅10cm程度で、周壁溝から中央土坑に向かって傾斜する。太い1条はSH08aから存続したものと考えられる。

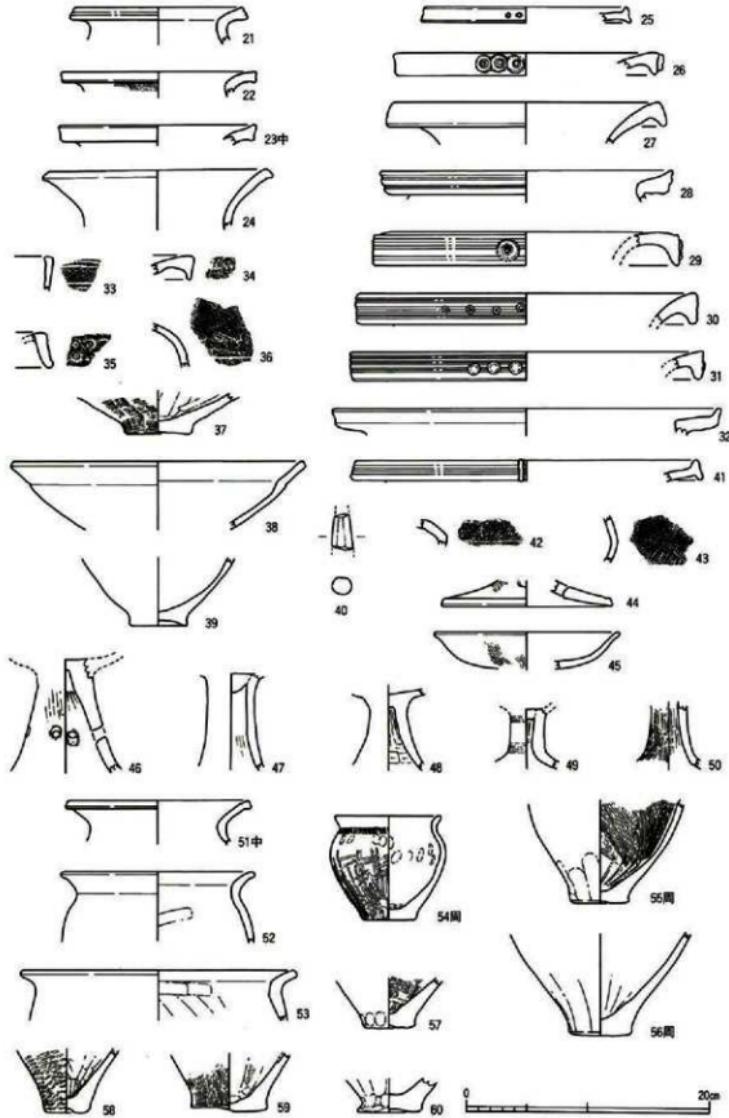
**主柱穴** 周壁溝に沿った外側の6本が該当する。床面からの深さ44~67cmとみな50cm前後であり、中央土坑の底部と近い深さである。

**中央土坑** SH08aから存続したものと考えられる。

**張り出し** 北西側に長辺2m、短辺1mの規模で設けられている。床面とのレベル差は約20cmである。

**出土遺物**

土器(第19図・写真図版7・8) 21~32は壺である。頸部から屈曲する口縁となる21は、端面に凹線を施す。22は口縁端部をわずかに肥厚させて、外面はハケで仕上げる。23は口縁端部を上方につまみ上げる。24は外側して開く口部で、口縁端部は下方に引き出される。内外面ともに磨滅が進行しているため、調整は不明。口径は17.9cmである。25は口縁端部を上下に拡張し、わずかにくぼむ外端面に竹管文を施す。26、27は口縁端部を下方に大きく拡張させる壺である。26は端面に竹管文を施した円形浮文を2個1対施すが、27は無文となる。口径はそれぞれ20.8cmと21.7cmである。28は厚めの口縁端部を上方につまみ上げ、端面には凹線を巡らせる。29、30、31も口縁端部を下方に大きく拡張させる壺である。端面には3、4条の凹線を施し、さらに円形浮文を加えるが、29と30は浮文の上に竹管文を施す。口径は、21.8cm、27.4cm、28.7cmである。特に30と31は、胎土に角閃石を含み、色調も暗茶褐色で他の土器と異なっている。32は、頸部から直角に屈曲し水平に伸びる口縁の端部をつまみ上げる。33から36は、施文を拓本で図示している。33は直立する口縁外面を上下2条単位の凹線を巡らせ、その間に波状



中：中央土坑 周：周壁溝

第19図 SH08出土土器

文を充填する。34は口縁外端面に波状文、35は二段の竹管文を施す。また胴部外面に横方向「Z」の連續渦巻きスタンプ文を飾る36は、ヘラミガキで調整をしている。37は外面タタキ、内面ケズリで調整を加えた底部で、径は5.4cmである。なお図示していないが、金雲母を胎土に含有した壺の胴部破片も埋土から出土している。38は内面に鈍い棱をつくり、内壁気味に開く口縁の鉢である。端部は面をなし、口径は23.8cm。39は上げ底の底部。40は棒状の土製品である。現存長は3.0cm、断面は梢円形で、面とりをしている。41は口径27.8cmの器台である。ほぼ水平に開く口頭部から、上下に拡張した口縁部が継ぎ、外端面には凹縞を施した後に部分的に縦の棒状浮文を飾る。42と43は体部外面に鋸歯文が刻まれている。細片のため天地も定かではないが、鋸歯文の中を42は斜格子文で、43は「L」の斜線文で充填する。44は脚部である。外面はヘラミガキで、円孔を穿つ。45は高壺の壺部か。外面はヘラミガキ、口径は14.9cmだが、深さは3.0cmと浅い。46から50は脚部であるが、脚端部は残存せず、また49以外は「ハ」字形に開く特徴をもつ。46は円孔が4箇所に巡ると考えられる。48は内面を横方向のヘラケズリ、50は外面を縦方向のヘラミガキで調整している。49は柱状部の上下にヘラ描きの直線文を配し、下端から屈曲して、捲部にいたる。51から60は壺であり、このうち51、52、53は「く」字形に外反する口頭部のみが残存している。51は口縁端部がわずかに肥厚し、口径は14.7cmを測る。52と53は口縁端部を丸く收め、後者は内面を横と斜め方向のヘラケズリで調整している。口径は15.3cmと22.2cmである。54は口径8.5cm、器高8.6cmの小型の壺である。胴部最大径は9.5cmで、中心より上位にある。底径は4.5cmで器壁は厚い。口縁部は緩やかに屈曲し、端部は丸く收める。体部外面下半は斜め方向のナデの後、縦方向のヘラミガキ、上半は斜め方向のタタキの後、縦と斜め方向のヘラミガキを行い、内面はユビオサエとナデを行う。口頭部の屈曲部外面には、縦方向の刺突文を巡らせてある。55から60は底部である。56はわずかに凸状になるが、その他はごく浅くくぼむ。外側調整は、55、56、60は板状工具によるナデ、58は横方向のタタキ、59は縦方向のハケであり、内面調整は板状工具によるナデとハケが多い。

石器（第49・51図・写真図版10・11）S3は凹基式の、S8は凸基式の打製石器である。S10は翼状剥片をとった後の石核。S11はスクリイバー。両側縁に調整を施すが、正面右側が特に精緻である。S12は横長剥片に二次加工を施す。石小刀のような用途か。S13は石匙。摘み部は表裏両側から調整し、刃部は片側から重点的に調整する。S14は柱状片刃石斧の後主面側の破片である。面の下半は側面との鎌が鋭利であり、側面からみても彎曲が次第に強まっていることからも刃部に近い箇所であることがうかがわれる。緑色片岩製。S24は下端につぶれ状の痕跡をもつ敲打具。砂岩製で重量は1800gを測る。

住居跡南東側周壁溝中から棒状石杵（S28）が、また張り出し基部の北側コーナー付近周壁溝中から水滴状石杵（S31）が出土した。S28はディサイトの長円形の点縛を利用している棒状石杵である。下端にすり面が設けられ、面中央がくほんでいるが、くほみの周囲には面の長軸方向と交わる方向の擦痕が認められる。なお、このくほみの周辺にかすかに赤色顔料の痕跡が確認できる。一方、両側面には小さなくほみ状の敲打痕が密集して、大きな皿状のくほみをつくっている。また、上端にもつぶれ状の敲打痕跡が認められる。下端のすり面が赤色顔料の精製に用いられ、さらに側面や上端の部分も赤色顔料の粉砕に使用されたのであろうか。デジタル・マイクロスコープによる観察の結果、上下および側面にベンガラの付着が確認された。長さ13.0cm、幅7.3cm、厚さ5.0cm、重さ724.5g。

S31は厚みのある円礫を「おむすび」形に加工した水滴状石杵である。下端にすり面が形成されるものの明確な鎌を形成しない。両側面には、両平坦面側から敲打により整形した線状の痕跡が顕著に残る。上部は両平坦面側からの作用で剥離しているが、石杵を掌握しやすいように意図的に打削された可

能性がある。正面からすり面にいたる部分で肉眼でベンガラの付着が確認できる。石材はデイサイトで、長さ8.8cm、幅9.9cm、厚さ6.0cm、重さ764.9g。

**ガラス玉**（第50図・写真団版10） 埋土中から2点出土した。いずれもカリガラスとみられ、孔の方向と平行方向に延びる気泡が認められる。

SH09（第20図）

検出状況・屋内施設

B地区の北端に位置

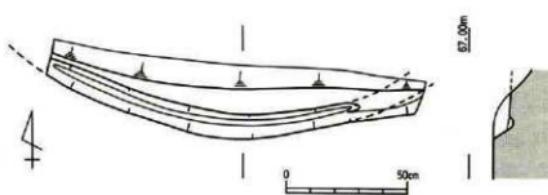
し、大半がすでに破

壊されすぐ北の崖面

に移行している。65

cm幅のわずかな検出

範囲であるが、床面



第20図 SH09

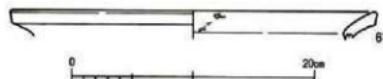
および周壁溝を検出した。床面のレベルは標高66.3mを測る。

**周壁溝** 検出した範囲内で最大幅35cm、

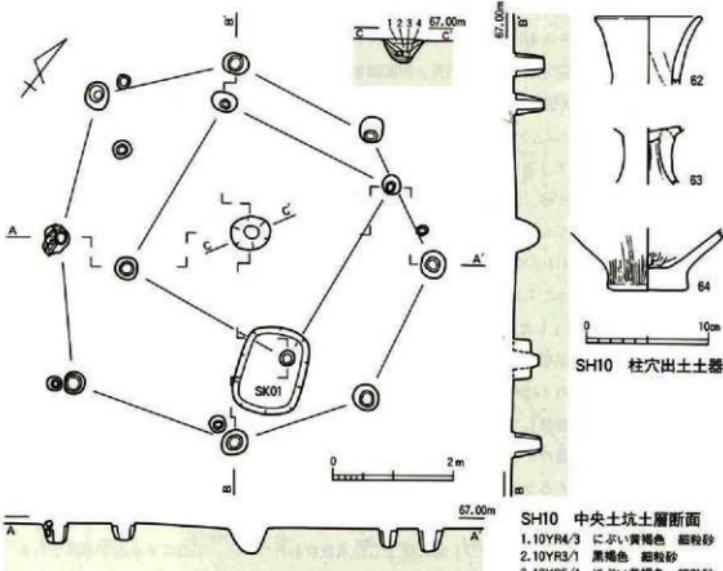
床面からの深さ13cm程度を測る。

**出土遺物** 周壁溝から出土した1点を図示

した（第21図）。



第21図 SH09出土土器



第22図 SH10・SH10出土土器

SH10 中央土坑土層断面

1.10YR4/3 にぼい黄褐色 細粒砂

2.10YR3/1 黒褐色 細粒砂

3.10YR5/4 にぼい黄褐色 細粒砂

4.10YR4/2 灰黄褐色 粘質細粒砂

SH10 (第22図・写真図版5)

検出状況・屋内施設 B地区の南で検出された。すでに床面が削平されている状況で、主柱穴および中央土坑のみ確認できた。

**主柱穴** 合計11本を検出した。当初内側の4本が並ぶ構造であったのが、環状に7本並ぶ構造に建て替えが行われた可能性が高い。両者の底面は多少ばらつきはあるもののほぼ一定のレベルである。

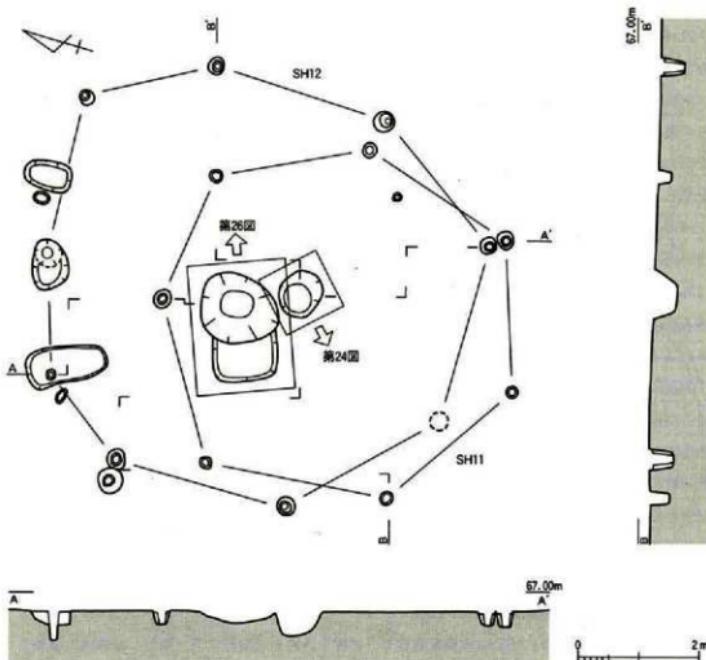
**中央土坑** 長軸方向を東西にもつ梢円形で、断面は逆台形を呈す。埋土最下層は炭を一定量含む。検出面から底面まで深さ36cmを測り、11本の主柱穴底面とほぼ同レベルである。

**出土遺物** 柱穴や中央土坑から弥生土器の小片が出土している。柱穴から出土した3点を図示した。

**土器 (第22図・写真図版8)** すべて主柱穴から出土した。62は口径8.3cmの直口壺である。不整方向のナデで仕上げる。63は高坏脚部、64は壺底部である。

SH11・SH12 (第23図・写真図版5)

検出状況・屋内施設 B地区の北で検出された。すでに床面が削平されており、主柱穴および中央土坑のみ確認できた。検出面上面ではSH11中央土坑がSH12中央土坑を切る状況が確認されたため、SH12→SH11の変遷が考えられる。



第23図 SH11・SH12

## SH11

**主柱穴** 7本を検出した。ほぼ等間隔に環状に並ぶが、底面のレベルにはばらつきがある。

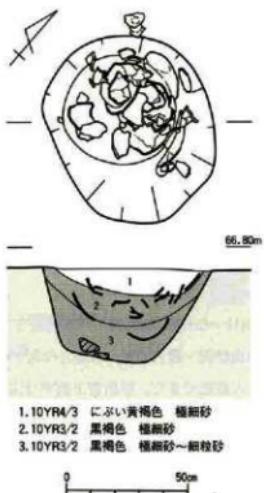
**中央土坑** 主柱穴を環状に結ぶ円弧の中心からかなり北側に偏って存在する。現況で長軸80cm、短軸66cmの梢円形をなし、検出面から底面までの深さは38cmを測る。残存していた埋土には炭が多く含まれ、底面に近い2層ではほぼ炭で満たされていた。埋土に含まれる土器量は著しい。

**出土遺物** 柱穴や中央土坑から弥生土器が出土している。

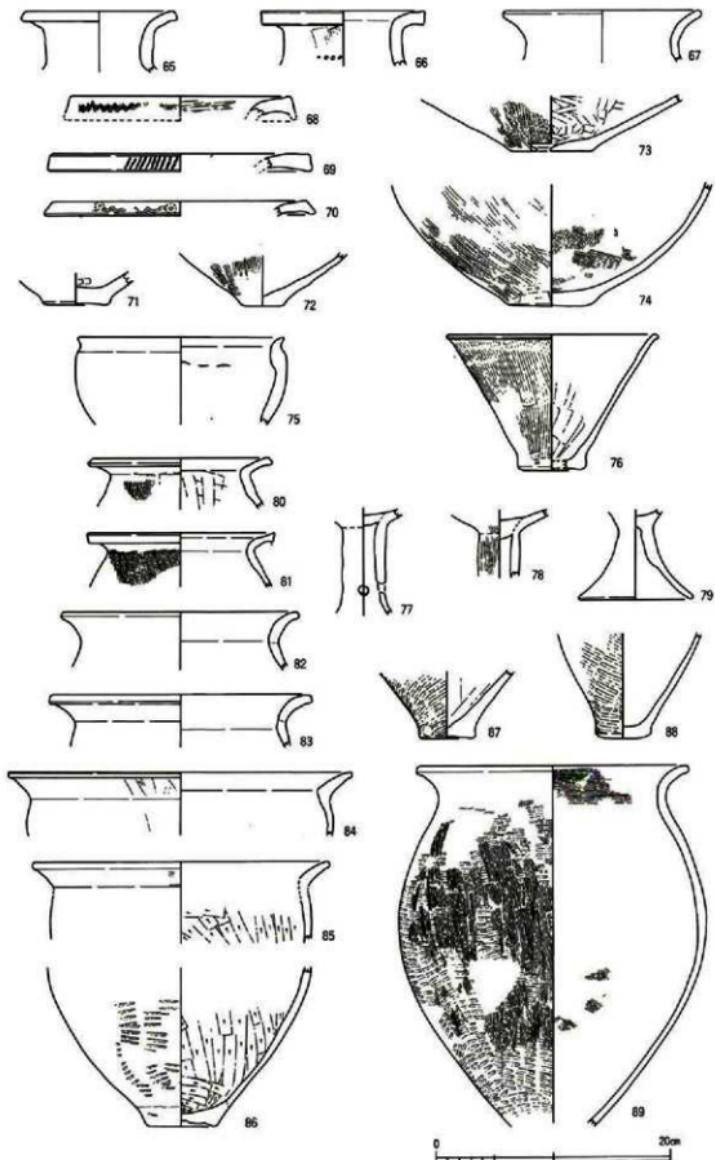
**土器** (第23図・写真図版8) 65から67は壺口頭部である。

65、66は筒状の頭部から屈曲して口縁となり、端部はわずかに肥厚する。66は頭部をハケで仕上げ、下端に刺突文が認められる。67は口頭部が大きく外反して、丸く収まる口縁端部になる。口径は16.2cm。68、69、70は口縁端部が下に肥厚もしくは拡張される口縁部である。端面を68は波状文、69は刺突文、70は波状文の後に竹管文を加えた円形浮文で飾る。口径は18.4cm、21.6cm、21.2cmである。71から74は底部。径7.2cmの底部から直線的に聞く胴部に続く73は、ヘラケズリの後ヘラミガキ、内面は板状工具によるナデで仕上げる。74は外面をヘラケズリの後ヘラミガキ、内面はハケで仕上げる。75は楕円形の体部から口縁部が外反し、端部をナデでつまみ上げた鉢である。76は平らな底部から直線的に体部が立ち上がる鉢である。口縁端部は外方にわずかに肥厚し、丸く收める。外面は縱方向のハケ、内面は板状工具によるナデ、口縁端部は強いヨコナデで仕上げる。口径は17.5cm、器高は11.3cmである。77から79は脚部。77と78は柱状部が残存し、前者は4箇所の円孔を穿ち、後者は外面へラミガキで仕上げる。79は「ハ」字形に開き、端部は丸く收める。直径は9.8cmである。80から89は壺である。口頭部を残す80から85は屈曲は弱く、内面にわずかに後が確認できる程度である。80は口縁端部下方が拡張され、外面は縱方向のハケを一部ナデで消し、内面は板状工具によるナデで仕上げる。口径は14.7cm。81は口縁端部を上下に拡張させ、外面は縱斜め方向のハケ、内面は板状工具によるナデで仕上げる。口径は15.6cm。82と83は口縁端部は丸く收める。調整は不明で、口径は19.5cmと21.7cmを測る。84と85は胴部最大径が口径を超えないものである。84は口縁端部が面をなし、外面はハケとナデ、内面は板状工具によるナデで仕上げる。口径は29.0cm。85は口縁端部は丸く收め、外面の調整は不明であるが、内面は縱方向のヘラケズリを行う。底部を欠損する89は、最大径が中位に位置する無花果形の体部が、緩やかに外反する口縁部となる。体部下半外面は横斜め方向タタキの後一部縦方向のハケ、内面は磨減するが部分的にヘラケズリを施す。口縁部は外面はヨコナデ、内面は横方向のハケで仕上げる。口径は22.2cm、体部最大径は26.2cmである。

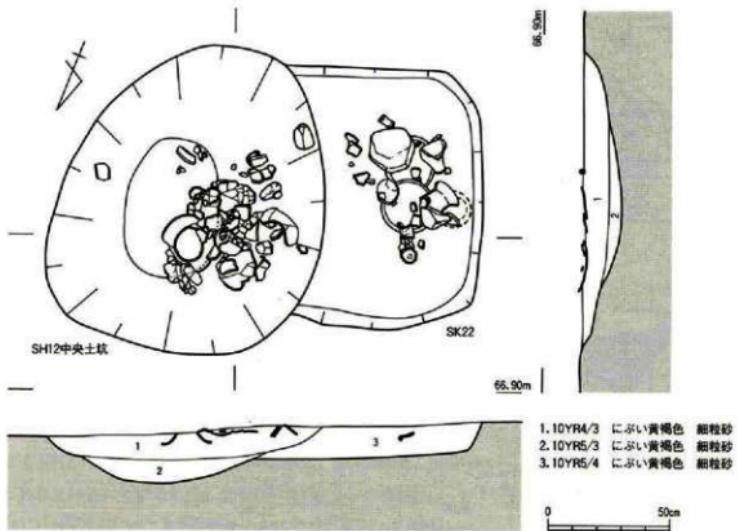
**石器** (第51図・写真図版11) S32は水滴状石斧で、側縁を両面から敲打により整形した線状の痕跡をとどめる。科学分析によりごく微量のベンガラが付着している可能性が指摘された。石材は花崗斑岩で、長さ9.5cm、幅8.4cm、厚さ4.1cm、重量は401.1gである。



第24図 SH11中央土坑



第25図 SH11中央土坑出土土器



第26図 SH12中央土坑・SK22

## SH12

**主柱穴** 8本を検出した。環状に並ぶが間隔や底面のレベルにはばらつきがある。全部で9本に復元され、1本が未検出であると推定される。

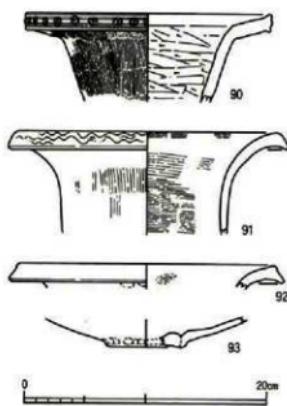
**中央土坑** 長軸1.3m、短軸1.1mの浅くなだらかに傾斜する皿状の断面を呈す。

なお、隣接する土坑SK22を切るが、埋土も中央土坑とさほどかわらず、浅くなだらかな底面をなすことから、SH12よりさらに前段階の住居跡に属する中央土坑であった可能性がある。

**出土遺物** 柱穴や中央土坑から弥生土器が出土している。

**土器** (第27図・写真図版8) 90は直線的に開く頭部から稜を残して屈曲して伸びる口縁部を形成する。端部には凹線を巡らせ、竹管文と刺突文を組み合わせる。頭部外面は縦方向のハケ、内面は板状工具による横方向のナデで仕上げる。91と92は外反して開く頭部から、端部を外下方へ拡張させる口縁部になる。91は外面は縦方向、内面は横方向のハケで仕上げ、口縁端部には粗い波状文を施す。口径は21.3cmである。93は径6.6cmの底部で、大きく張る胴部へと続く。

**石器** (第49図・写真図版10) S18は柱穴埋土から



第27図 SH12出土土器

出土した花崗斑岩製の暗色含有物を用いた砥石である。側面に三面の底面を形成し、図正面側が最もよく使用されている。下半分を欠損するが、現長で9.8cm、幅6.7cm、厚さ7.1cm、重さ644.5gを測る。

#### SH13 (第28図・写真図版5)

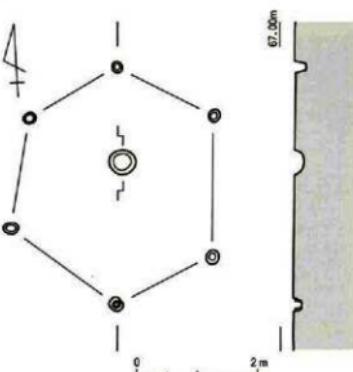
検出状況・屋内施設 B地区の西で検出された。

すでに床面が削平されており、主柱穴および中央土坑のみ確認できた。

主柱穴 6本を検出した。底部のレベルはみな標高66.6m前後とほぼ一定であり、中央土坑の底面ともほぼ同レベルである。

中央土坑 現況で長軸44cm、短軸40cmの長軸方向を東西にもつ楕円形を呈す。検出面から底面までの深さは15cmである。埋土は炭を含む灰で満たされていた。

出土遺物 柱穴や中央土坑から弥生土器の小片が出土しているが、図示することはできなかった。



第28図 SH13

## 2 堀立柱建物跡

B、C、Dの3地区から、計7棟の堀立柱建物跡を検出した。各造構の時期に関しては、SB01～SB03では、柱穴から出土した土器により平安時代から鎌倉時代にかけての帰属が明確であるが、SB04に至っては出土遺物が皆無であり時期は不明である。一方SB05～SB07では、各々の柱穴からわずかに弥生土器の小片が出土したほか、SB06柱穴から水滴状石杵が出土したのみであるために、これらが弥生後期に属する可能性を提示するに留めておく。

#### SB01 (第29図・写真図版6)

検出状況 B地区の東側に位置する。堀立柱建物跡のはば全体の範囲を検出できたが、柱穴1本分が調査区外(鉄塔部分)にあたり未検出である。

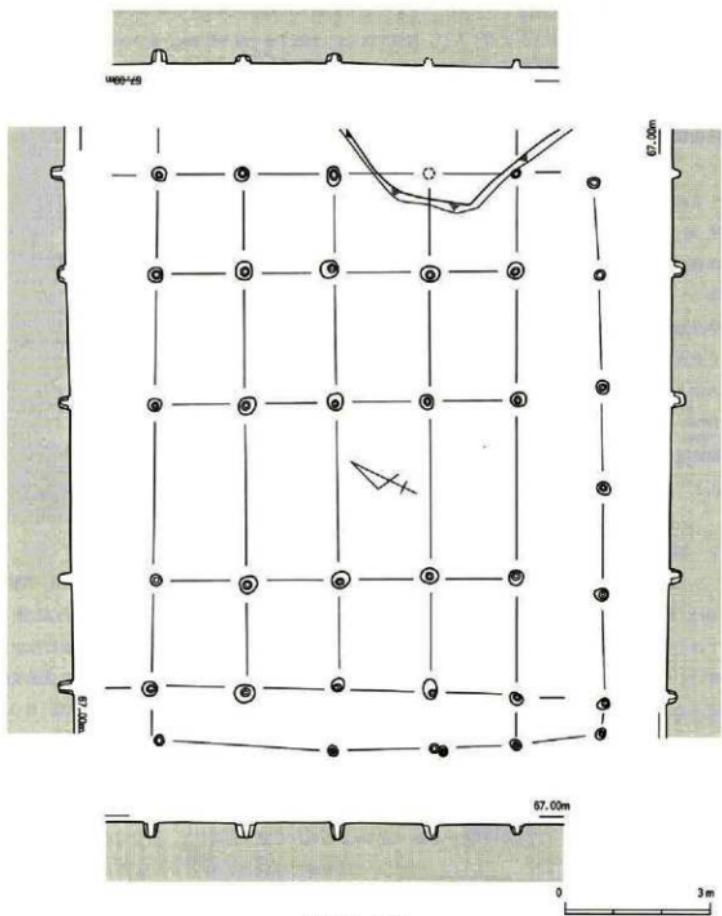
形態・規模 梁行4間(7.5m)×桁行4間(10.5m)の純柱の堀立柱建物で、桁行は座標北から65°東を指向している。

柱間距離は、梁行方向はほぼ均一で1.8～1.95mであるのに対し、桁行方向は、東から2m、2.65m、3.6m、2.3mと両端が狭く中央がかなり広めである。柱穴掘り方は直径30～55cmで、直径15～20cmの柱痕が確認された。柱穴底面のレベルは標高66.4～66.6mの間に収束するが、梁行最東列が66.4～66.5mと全体的に低い傾向があり、その他は概ね66.5～66.6mである。

なお、梁行方向の西側および桁行方向の南側に各方向の柱間距離に近似した形で柱穴列が認められた。柱穴の規模は梁行方向掘り方で直径20～25cm、桁行方向掘り方で直径35cmと两者に差異が認められる。柱穴底部のレベルは66.3～66.7mとばらつきはあるが、概ね堀立柱建物本体と同様のレベルである。これらは底ないしは軒先に縁側が設けられた痕跡と考えられる。

#### 出土遺物

土器 (第31図・写真図版9) 94と95は、SB01の同一の柱穴から出土した瓦器碗である。94は体部が

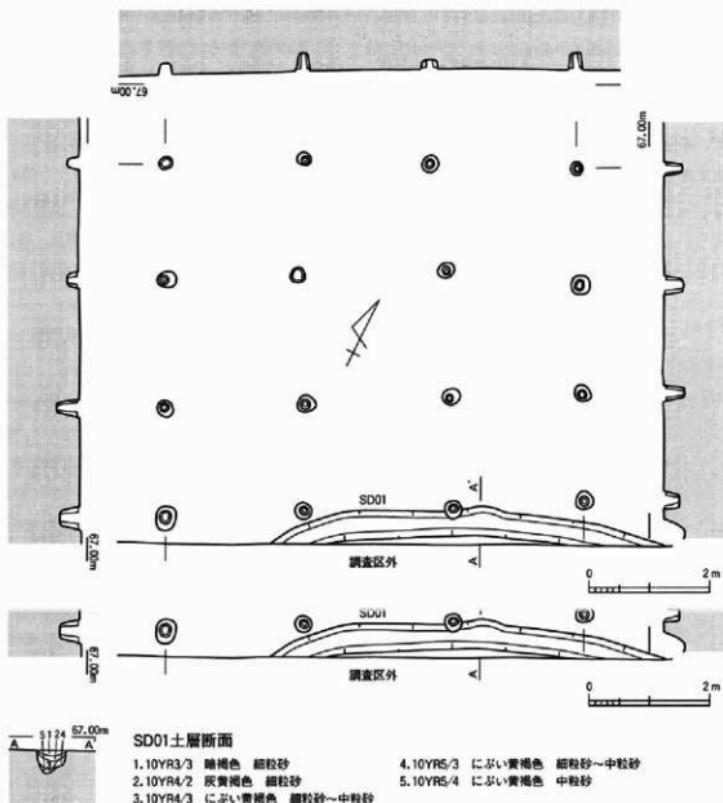


第29図 SB01

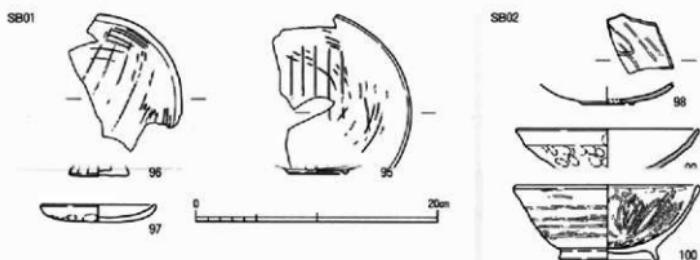
内縁気味に開き、口縁部を1段ヨコナデを行う。外面には指頭圧痕が顕著に残存し、内面は格子状の暗文を施す。口径は13.4cm、器高は4.5cmである。高台は断面三角形で、径は3.4cm。95もほぼ同じ技法と調整で形成されている。口径は14.8cm、器高は4.9cm、底径は5.0cm。96は土師器托である。SB01の柱穴から出土した土器であるが、先の碗と共に伴したものではない。平底で径は4.9cm。97の土師器皿も、異なる柱穴から出土した。底部はナデで調整し、口径は9.2cmである。

#### SB02 (第30図・写真図版6)

検出状況 B地区の東側に位置する。検出した範囲のすぐ東側に調査区壁が存在する。



第30図 SB02・SD01

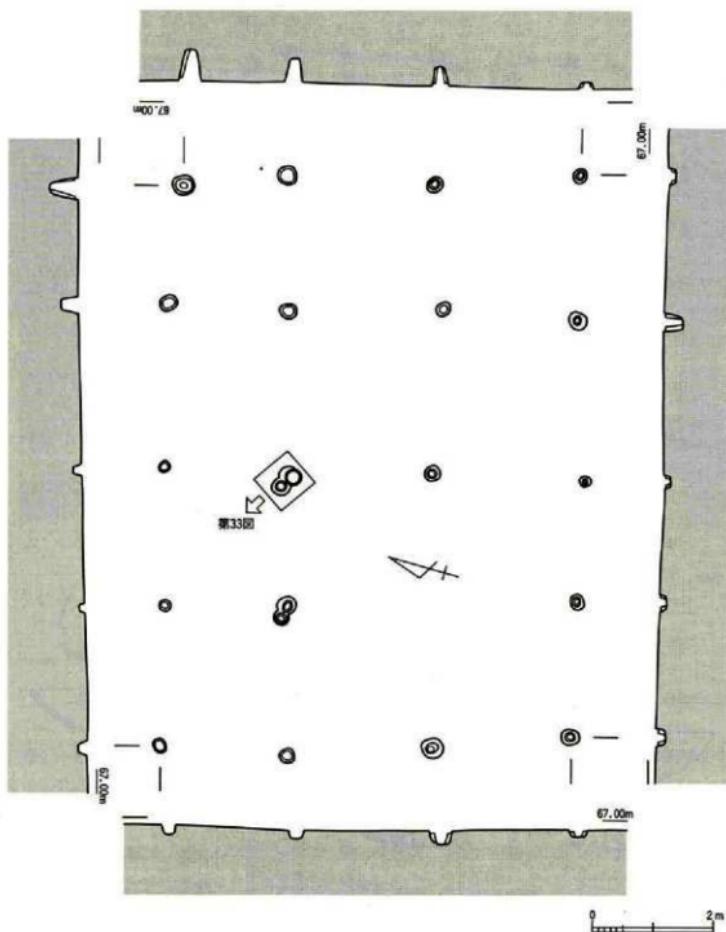


第31図 SB01～SB03出土土器

**形態・規模** 検出した範囲では梁行3間(5.8m)×桁行3間(6.9m)の總柱の掘立柱建物であり、桁行方向がさらに南側の調査区外に伸びる可能性を残す。桁行は座標北から27°西を指向している。

柱間距離は、梁行方向は1.8~2.0mで、桁行方向は2.2~2.5mと近い数値であるが、東から2本目の梁行が他の梁行方向と比べてやや傾くために若干ばらつきを見せている。柱穴掘り方は直径20~40cmで、直径15~20cmの柱痕が確認された。柱穴底部のレベルは、標高66.4~66.7mの間に収まる。

#### 出土遺物



第32図 SB03

**土器（第31図）** 98はSB02に復元される柱穴から出土した瓦器碗である。内面には暗文が認められ、高台は磨滅している。99もSB02の柱穴から出土した土器であるが、98と共に伴したものではない。体部が内縁気味に開き、口縁部を1段ヨコナデを行う。外面には指頭圧痕を残し、内面の暗文は磨滅のため不明。口径は14.9cmである。

#### SB03（第32図・写真図版6）

**検出状況** B地区の中央付近に位置する。全体を検出することができた。

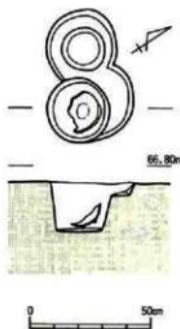
**形態・規模** 梁行3間（6.8m）×桁行4間（9.4m）の總柱の掘立柱建物である。桁行は座標北から75°東を指向している。

柱間距離は、梁行方向は南側2間が2.4mずつであるが北側が狭く2.0m、桁行方向は東から2.2m、2.7m、2.2m、2.4mとばらつきがある。柱穴掘り方は直径15~35cmであるが、直径約15cmの柱痕が確認されたものもある。柱穴底面のレベルは標高66.2~66.7mの間に収束するが、西側の梁行2列が最も高く、北東側が最も低い傾向があり、旧地形の傾斜に影響したと考えられる。

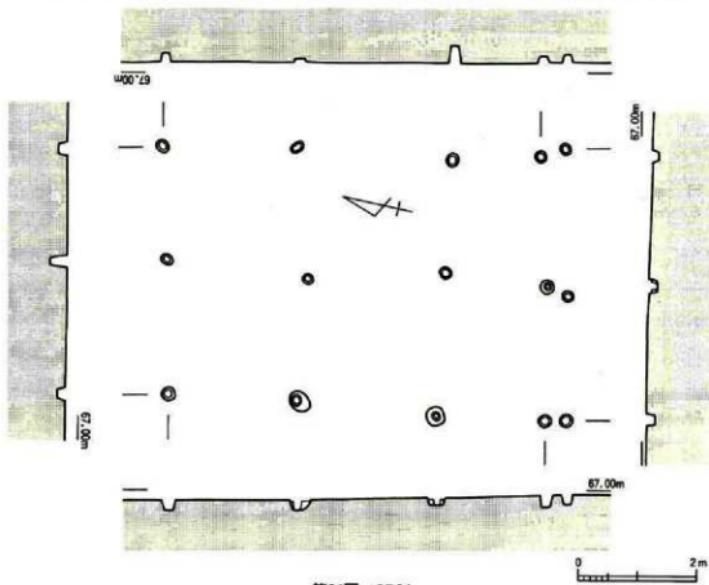
#### 出土遺物

**土器（第31図・写真図版9）** 100はSB03に復元される柱穴から出土した黒色土器碗である。比較的深い体部はわずかに内縁しつつ開き、口縁端部

は肥厚し外傾する面をなす。平底に設ける高台は比較的高く、外縁して伸びる。外面はほぼ等間隔で横



第33図 SB03柱穴  
土器出土状況



第34図 SB04

方向のヘラミガキ、内面は見込みから口縁まで直線と雑なラセンを組み合わせたヘラミガキを施す。器表面全体に黒化処理を行い、口径は15.0cm、器高は6.3cmである。

#### SB04 (第34図・写真図版6)

検出状況 B地区の西側に位置する。掘立柱建物跡のほぼ全体の範囲を検出できた。

形態・規模 梁行2間(4.4m)×桁行3間(6.8m)の総柱の掘立柱建物で、桁行は座標北から10°西を指向している。ただし、南側の梁行2本分の柱間距離はわずか40cmであり、同時期に存在したとは考えにくい。建て替えの可能性を考えたい。

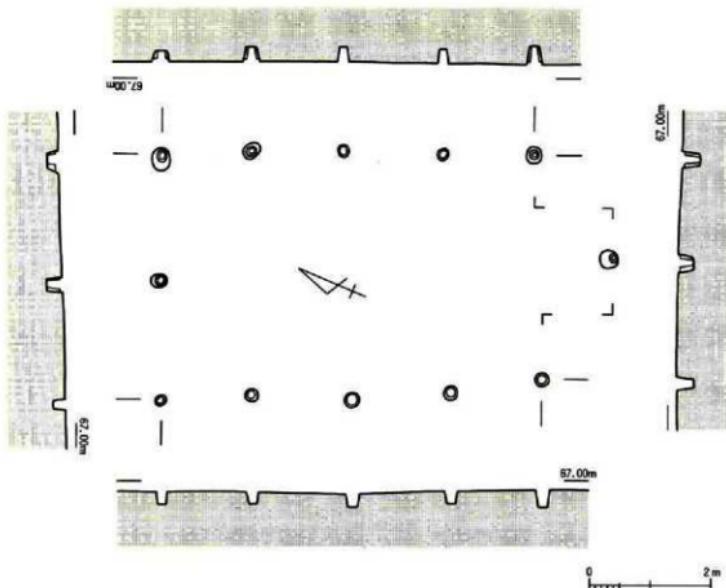
柱間距離は、梁行方向は西から1.9m、2.4mと差異があり、桁行方向は東から2.2m、2.5m、1.7m(南側の梁行列で2.1m)と両端が狭く中央がかなり広めである。柱穴掘り方は直径15~30cmで、直径11~15cmの柱痕が確認された。柱穴底面のレベルは標高66.5~66.8mの間に収束するが、南側が高く北側に向かって低くなる傾向があり、旧地形の傾斜に影響したと考えられる。

出土遺物 遺物は出土していない。

#### SB05 (第35図)

検出状況 B地区の中央付近に位置する。床面積の大部分がSB03の検出範囲と重複するものの、全体の範囲を検出した。

形態・規模 梁行2間(4.0m)×桁行4間(6.3m)の側柱の掘立柱建物で、桁行は座標北から26°東を



第35図 SB05

指向している。ただし、南側の梁行には中間に柱は存在せず、さらに1.2m南東に柱穴が認められる。この柱穴と北側の梁行の中間の柱穴は東西の両桁行延長線上のほぼ中間に位置し、ここでは両者を結ぶ線を主軸と判断する。

柱間距離は、梁行方向は北側では2.0mあるが南側では1.8mと南側に向かって梁行の幅が短くなる。桁行方向は平均約1.6mである。柱穴掘り方は直径15~30cmで、直径11~15cmの柱痕が確認された。柱穴底面のレベルは概ね標高66.5~66.6mの間に収束し、深さの均一性が看取される。

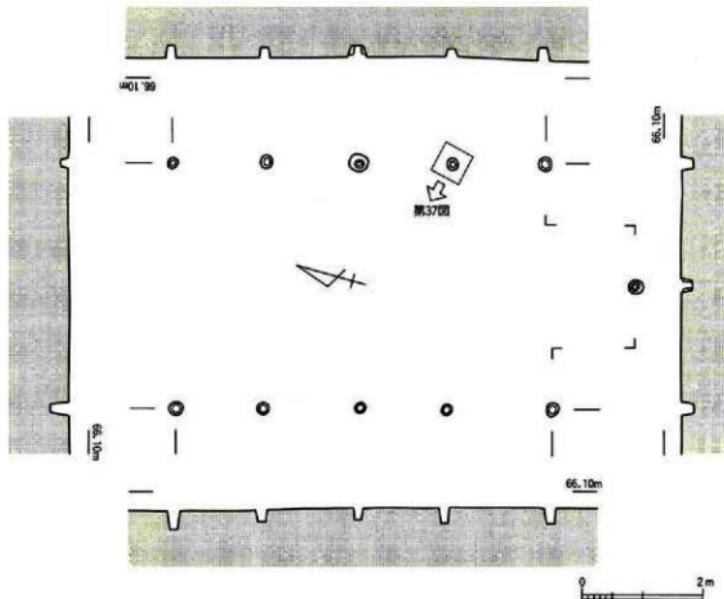
出土遺物 遺物は出土していない。

#### SB06 (第36図・写真図版6)

検出状況 C地区の西側、SH08のすぐ南に位置する。

形態・規模 梁行2間(4.0m)×桁行4間(6.2m)の倒柱の掘立柱建物で、桁行は座標北から15°西を指向している。各梁行の中間に柱は存在しないが、他の2例(SB05・SB07)の状況から梁行2間と数え、北側の中間にと南側1.6mに存在する柱穴を結ぶ線が両桁行のまさに中間をとることから主軸と判断する。

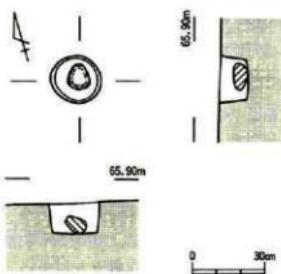
柱間距離は、梁行方向は2.1m、桁行方向は平均で約1.5mである。柱穴掘り方は直径18~30cmで、直径12cm程度の柱痕が確認されたものもある。柱穴底面のレベルは概ね標高66.6~66.7mの間に収束し、深さの均一性がうかがえる。



第36図 SB06

**出土遺物** 柱穴から弥生土器小片が出土したほか、柱穴底部から水滴状石杵1点が出土した。

**石器** (第51図・写真図版11) S30は安山岩質の石材を二等辺三角形に近い形状に加工した水滴状石杵である。先に報告したほかの水滴状石杵2点とは異なり、上端付近の握部側が厚く、下端のすり面に向かって次第に薄くなる。すり面は中央付近では平坦気味であり、全体的に緩やかなカーブを描く。擦痕は非常に目が細かく、すり面形成後の明確な使用的痕跡は認められない。上端にも緩慢なカーブを描く磨面が認められ、また両斜側面にも端面を形成する。斜側面の端面には両面側から敲打が行われたことを示す痕跡として、水平方向の筋状のくぼみが顕著に残存している。科学分析を実施したが、赤色顔料の付着は認められなかった。長さ9.2cm、幅8.5cm、厚さ5.3cm、重さ526.1gを測る。

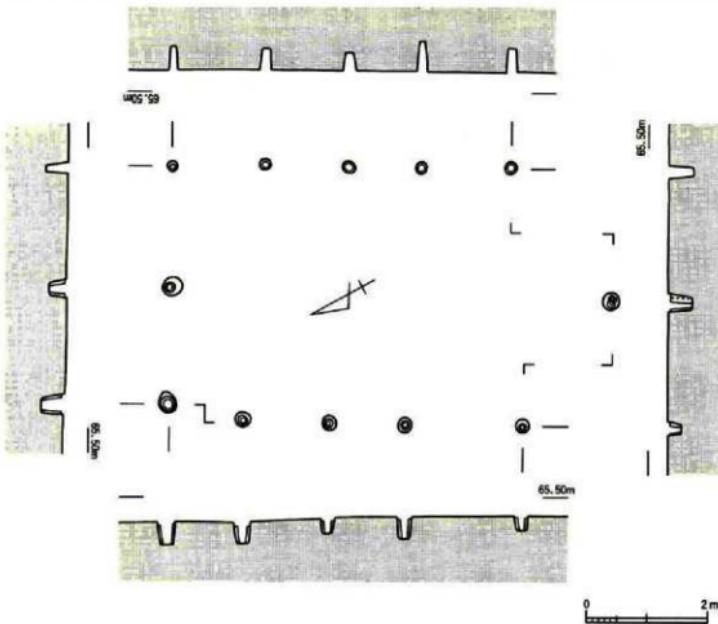


第37図 SB06柱穴石杵出土状況

#### SB07 (第38図・写真図版6)

**検出状況** D地区の南側に位置する。掘立柱建物跡のほぼ全体の範囲を検出できた。

**形態・規模** 梁行2間(4.2m)×桁行4間(5.9m)の側柱の掘立柱建物で、桁行は座標北から29°東を



第38図 SB07

指向している。ただし、南側の梁行には中间に柱は存在せず、そこから1.6m南東の主軸上に柱穴が認められる。この柱穴には一つの掘り方の中に柱痕の明確な切り合いが認められ、少なくともこの柱が2度にわたって立てられたことがわかる。

柱間距離は、梁行方向は2.1m、桁行方向は平均で約1.5mである。柱穴掘り方は直径16~33cmで、直径11~13cmの柱痕が確認されたものを含む。また柱穴底面のレベルは概ね標高64.8m前後であり、規模・深さとともに均一性が看取される。

出土遺物 弥生土器の小片が出土したが、図化に耐える個体はない。

### 3 土坑

土坑は全部で22基を検出した。遺物が皆無であるか土器小片を出土するものが多く、時期の限定には困難をきわめた。その中で主要な土坑5基を報告する。

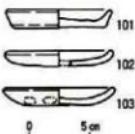
SK01 (第39図)

検出状況 B地区南側に位置する。SH10検出範囲内にあり、4本主柱穴のうちの1本の上部を切る。またSB02の西側梁行の中央部分に接する位置である。

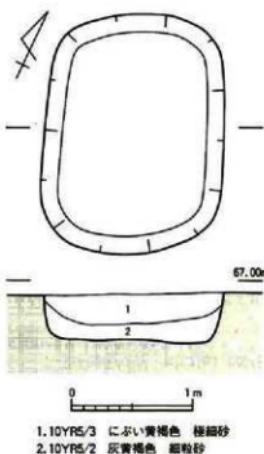
形態・規模 平面は南北に長軸方向をとる、やや平行四辺形気味の隅丸長方形をなす。規模は南北方向で194cm、東西方向で150cmあり、検出面から底面までの深さは25cmである。壁の立ち上がりは急であり、底面は平坦である。埋土は2層から構成されている。

出土遺物

土器 (第40図) 3点ともに土師器小皿である。101は平底で回転糸切りで切断し、板状の痕跡をとどめる。底部と体部は境が明瞭で、口径は8.4cm、器高は1.5cm。102と103は手捏ね整形の小皿である。いずれも底部と体部は境が不明瞭である。それぞれ口径は8.4cmと8.7cmである。



第39図 SK01出土土器



1. 10YR5/3 にぶい黄褐色 楊細砂

2. 10YR5/2 灰青褐色 粗粒砂

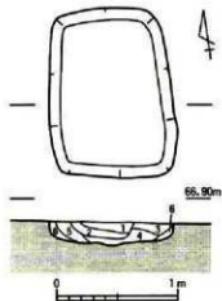
第40図 SK01

SK02 (第41図)

検出状況 B地区中央付近に位置する。SB03東側梁行列中に位置するが、切り合い関係はない。

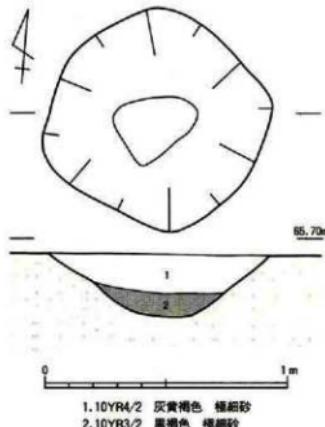
形態・規模 平面は長方形をなす。規模は南北方向で136cm、東西方向で102cmあり、検出面からの深さ18cmである。壁の立ち上がりは急であり、底面は平坦である。埋土は6層に分かれ、4層や5層は約半分が炭で構成され、2層と6層はほとんど焼土であり、底面および壁面にいたる立ち上がり全体が赤褐色を呈し、焼成を受けている。

出土遺物 土器の小片が出土したが、図化に耐える個体はない。



- 1.10YR3/4 單褐色 細粒砂  
2.10YR5/8 黄褐色 粘質細粒砂  
3.10YR6/6 明黃褐色 細粒砂  
4.10YR4/4 周色 粘質細粒砂  
5.10YR4/6 周色 植物砂  
6.10YR4/4 周色 粘質細粒砂

第41図 SK02



- 1.10YR4/2 灰黄褐色 細粒砂  
2.10YR3/2 黑褐色 植物砂

第42図 SK03

#### SK03（第42図）

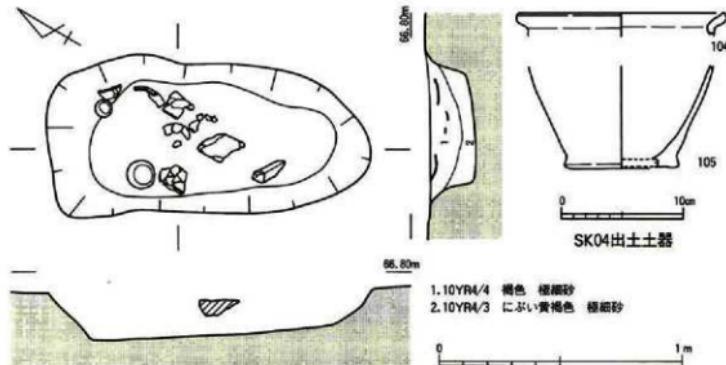
検出状況 C地区東側に位置し、SH08の東側にあたる。他遺構との切り合い関係はない。

形態・規模 平面は83cm×85cmの正方形に近い形状で、検出面からの深さは25cmである。横断面は中央に向かって緩やかに傾斜するすり鉢状をなす。埋土は2層からなるが、最下層は特に炭をよく含む粘質土である。これらの状況から、この土坑が本来堅穴住居跡の中央土坑であった可能性が高く、床面および土坑の上部がすでに削平された結果と考えられる。

出土遺物 弥生土器の小片が出土したが、図示に耐える個体は存在しなかった。

#### SK04（第43図・写真図版6）

検出状況 B地区の中央北側に位置する。SH12の検出範囲内北東側にあたり、主柱穴の上部を切る。



第43図 SK04・SK04出土土器

**形態・規模** 平面は長さ134cm×最大幅64cmの長い楕円形に近い形状で、検出面からの深さは20cmを測る。埋土は2層からなるが、土器はすべて1層からの出土である。

**出土遺物** 弥生土器が1層から出土した。2点を図示した。

**土器（第43図）** 104は「く」字形に外反する壺の口頭部である。端部はわずかに肥厚し、上方につまみ上げるように収束する。調整は不明。口径は16.7cmである。105は径が9.3cmと比較的大きな底部である。平底から体部が直線的に開く。調整は不明。

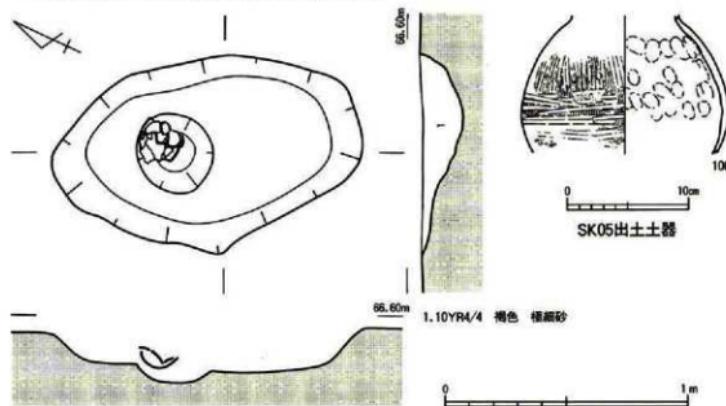
#### SK05（第44図）

**検出状況** B地区の中央東側に位置し、SD04に接する。他造構との切り合いは認められない。

**形態・規模** 平面は長さ127cm×最大幅79cmの楕円形に近い形状で、検出面からの深さは22cmを測る。埋土は1層からなるが、中央よりやや北西側に直径35cmの掘り込みがあり、土器はその箇所から出土している。

**出土遺物** 弥生土器が1層から出土した。1点を図示した。

**土器（第44図・写真図版9）** 106は球形を呈する壺の体部上半である。外面は縦方向のハケメの後に縦方向のヘラミガキ、さらに下半に横方向のヘラミガキを施す。内面は磨滅が進行しているが、ユビオサエの痕跡が認められる。体部最大径は17.0cmである。



第44図 SK05・SK05出土土器

#### 4 溝状造構

全部で5条を検出した。出土した遺物の状況および切り合い関係から、弥生時代後期に帰属するものと判断される。

#### SD01

**検出状況** B地区の東側に位置する。SB02の柱穴に切られる。

**形態・規模** 検出できたのは弧を描く全体の一部分であり、東西の大部分は調査区外に続いているものと思われる。検出した部分は、南北方向から東西方向に向かって次第に緩やかに屈曲していく部分のよ

うである。最大幅は48cmで、検出面からの深さは西側で32cm、東側で28cmを測る。溝底部の標高からみても、検出範囲の西側より東側のはうが8cm程度低く、旧地形に沿って東から西へ傾斜している。

#### 出土遺物

土器（第46図） 4点図示した。107は屈曲した口頭部が水平に開き、さらに屈曲して口縁部は上外方へ伸びる。口径は14.8cm。108は「く」字形に外反する妻の口頭部である。端部はわずかに肥厚し、上下に拡張される。口縁端部は凹面となる。頭部内面は横方向のヘラケズリを行い、口径は16.0cm。109は内彎する体部から腰をつくり外反する口縁部の高杯である。外面は横方向のヘラミガキが認められ、口縁端部はヨコナデで丸く收める。口径は22.8cmである。110は外面をタタキ、内面を板状工具でナデて仕上げた底部である。

石器（第49図・写真図版10） S9は翼状剥片である。図右側が表面にあたり、表面から裏面方向に打面調整の痕跡をとどめる。長さ1.7cm、幅3.5cm、厚さ0.8cm、重さ3.9g。S17は紅塵石片岩で、両面に擦痕や磨耗が認められ、よく磨耗した部分をトーンで図示した。下端では刃部は形成されないものの、裏面側は次第に厚みを減らし、先端付近は非常によく磨耗している。左右両端に抉りのように加工ないしは磨耗した痕跡がある。長さ6.4cm、幅3.2cm、厚さ0.7cm、重さ26.6g。

#### SD02～SD05（第45図）

検出状況 B地区の西側に重複しながら密集する。SD03はSD02およびSD04に切られ、さらにSD02はSD05に切られる。仮にSD04とSD05がつながり本来1条の溝であったとすれば、古いほうからSD03→SD02→SD04・SD05の変遷が考えられる。

#### SD02

形態・規模 南北方向から東西方向に、さらに再び南北方向に屈曲しながら「かすがい」形に伸びる溝である。長さ14.1m、最大幅83cmで、検出面からの深さは7～11cmを測る。溝底部の標高では検出範囲の南西側より北東側のはうが42cm程度低く、旧地形に沿って傾斜している。埋土は3層で構成される。

出土遺物 埋土各層から一定量の弥生土器の出土が認められた。

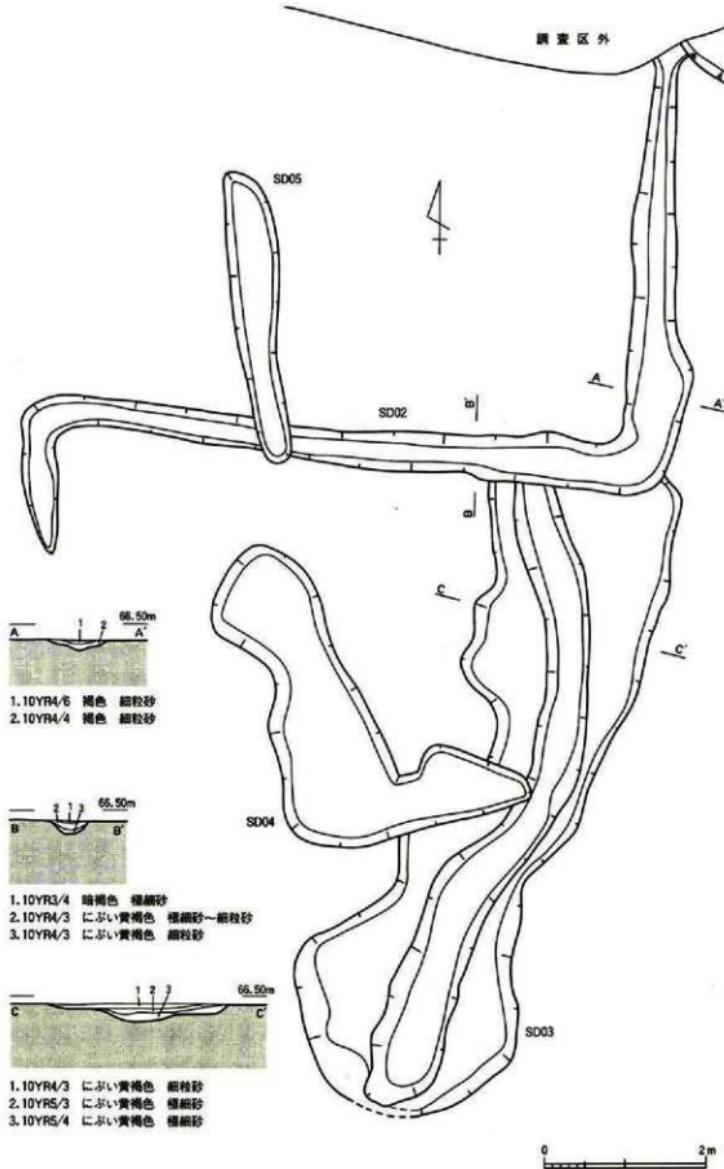
土器（第46図） 111は立ち上がった後大きく外反する口頭部の壺である。口縁端部は肥厚し、丸く收める。内外面ともに磨滅のため詳細は不明である。口径は15.4cm。

#### SD03

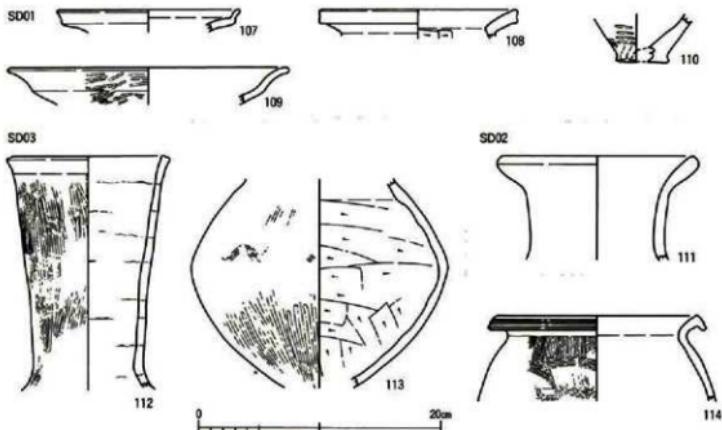
形態・規模 南北方向に伸びる幅広の溝で、さらに北側に伸びていたのが削平されたものと推測される。断面形は浅い二段掘り状で、検出面からの深さは一段目の平坦面で6～11cmを測る。二段目最深部で15～18cmを測る。検出範囲内の底面のレベルは北から南に向かって傾斜し、その差は22cmを測る。埋土は3層に分かれるが1層にほとんどの遺物と10～20cm程度の標が含まれていた。

#### 出土遺物

土器（第46図・写真図版9） 3点図示した。112は長く緩やかに直線的に伸びる直口壺の口頭部である。口縁部はわずかに外反し、端部はヨコナデで凹面で仕上げる。頭部外面は縱方向のヘラミガキ、内面は縦方向のナデが認められ、粘土紐の継ぎ目が顕著に残る。口径は12.4cm、頭部基部径は9.0cmである。113は体部最大径を中位にもつ壺である。中央で比較的強く屈曲し、ここに波状文がわずかに認められる。外面下半は縦方向のヘラミガキ、内面上半は横方向のヘラケズリ、下半は縦方向のヘラケズリ



第45図 SD02～SD05



第46図 SD01～SD03出土土器

で調整する。114は緩やかに「く」字形に外反する壺口頭部である。口縁端部は下方に長く拡張され、端面に凹線を施す。体部外面最上位は縦方向、以下は横方向のハケで調整する。

**石器（第49図・写真図版10）** S1は検出面から出土した打製石鎌。形態から縄文時代前期頃の所産であろうか。長さ1.4cm、幅1.7cm、厚さ0.3cm、重さ0.58g。S15はやはり検出面で出土した凝灰質泥岩製の砥石。正面側に底面が2面形成され、両面ともよく使用されている。各面に底面の長軸方向と平行に擦痕が認められるが、非常に目の細かいものとともに、やや粗めの擦痕が目立つ。接する稜の角度が鈍角となることから、本来は断面が多角形になる柱状の砥石であったと考えられる。裏面の剥離面にも平滑な部分には研磨が及び、剥離後も砥石として再利用されていたことがわかる。

#### SD04

**形態・規模** 東西方向から南北方向にL字状に屈曲する幅広の溝である。長さ約5.6mの範囲を検出したが、SD05に接する可能性があり、さらに北側に伸びていたのが削平されたものと推測される。断面形は浅い逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは2～8cmを測る。検出範囲内での底面の標高は一定である。埋土は1層で構成される。

**出土遺物** 遺物は出土していない。

#### SD05

**形態・規模** 南北方向に伸びる溝で、長さ3.6mの範囲を検出した。本来南北に伸びていたのが削平されたものと推測される。断面形は浅い逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは5～10cmを測る。検出範囲内での底面のレベルは北から南に向かって傾斜し、その差は9cmを測る。埋土は1層で構成される。

**出土遺物** 弥生土器の小片がわずかに出土したが、図示に耐える個体は存在しない。

## 5 その他の遺構

その他、夥しい数の柱穴を検出した。削平の激しい当遺跡では、これらの柱穴の中に当然本来住居跡や掘立柱建物に属するものが含まれることが推測されるため、主要なものを報告する。

P01 SB01検出範囲内の北東側付近に位置する柱穴である。南北に柱穴が5個並ぶうちの南から2番目にあたる。この柱穴列の間隔は平均1.7mで、SB05～SB07の桁行列に似た状況である。

### 出土遺物

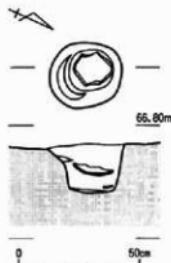
土器（第48図・写真図版9） 119は屈曲してほぼ水平に伸びる口縁の壺である。体部外面は縦方向のハケで調整する。口径は12.9cmで、体部最大径を上回る。120は「く」字形に外反する壺である。口縁端部は肥厚し、端面は丸い。体部外面は横方向のタタキの後に縦方向のハケの痕跡をとどめる。内面は体部は横と斜め方向のヘラケズリ、口縁部は横方向のハケで調整する。口径は13.5cmで、体部最大径を上回っている。

P02（第47図） P01のはば真西2.4mのところに存在する柱穴である。直徑15cmで、図示したとおり、柱痕から掘り方が広がる変換点をもつ高さの部位で壺底部（118）が出土した。

### 出土遺物

土器（第48図・写真図版9） 116は立ち上がって大きく外反する壺の口頭部である。口縁端部は欠損する。内面はユビオサエの後ヨコナデを施す。

118は上げ底気味の底部である。外面は縦方向のヘラミガキ。

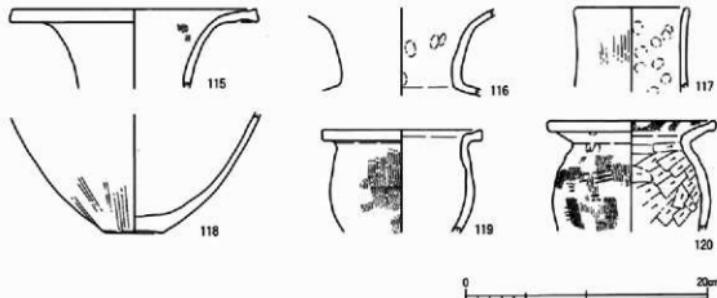


第47図 P02

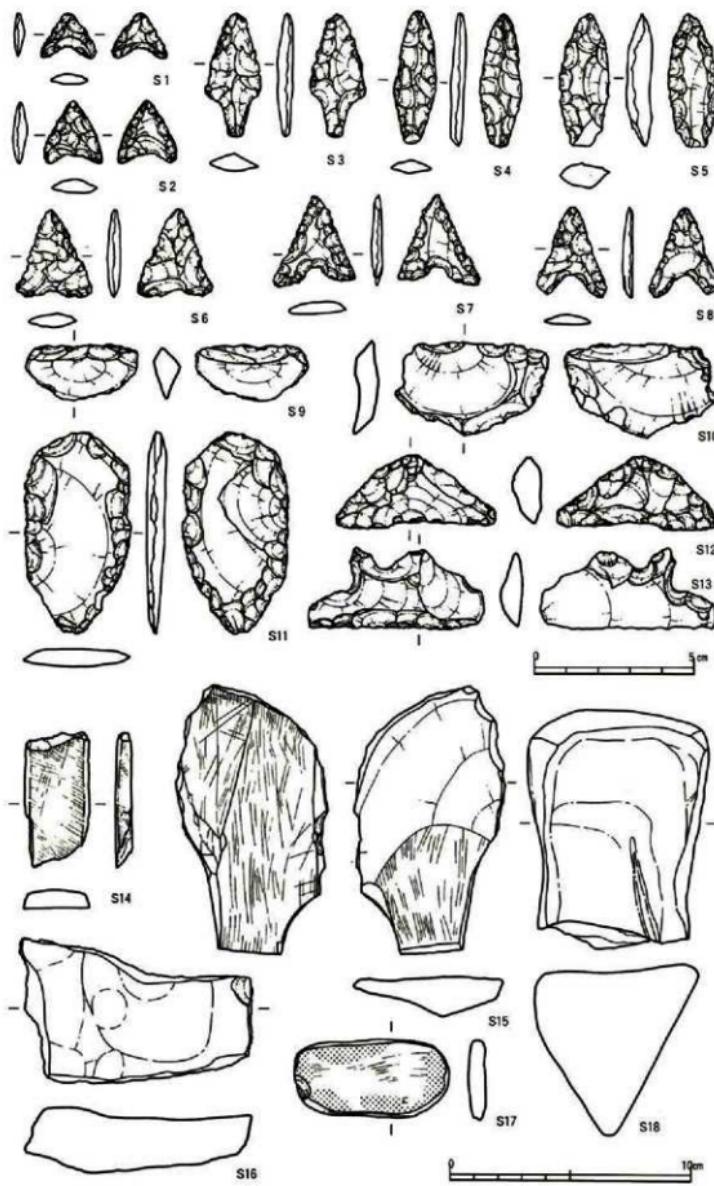
その他、柱穴から出土した土器と石器の主要なものを図化した。

土器（第48図・写真図版9） 115は大きく外反する壺の口頭部である。口縁端部はわずかに肥厚する。口径は19.7cm。117はほぼ直立て伸びる直口壺の口縁である。外面はわずかに縦方向のヘラミガキが認められ、内面はユビオサエ。口径は9.0cmである。

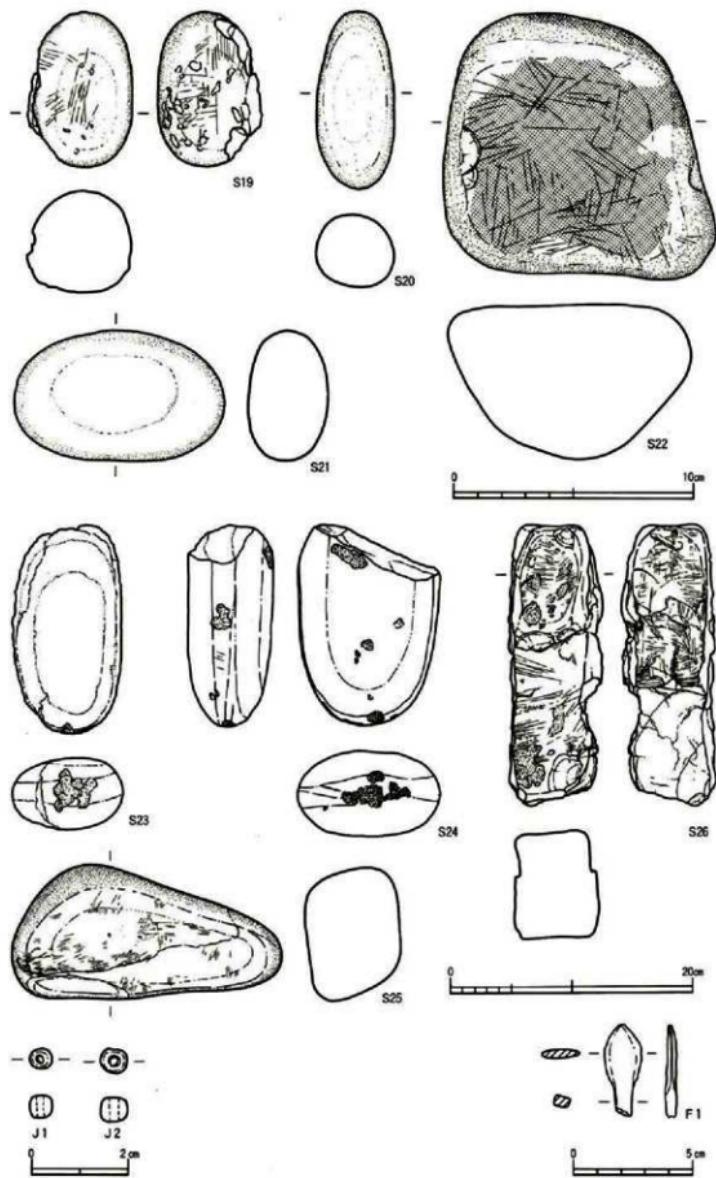
石器（第50図・写真図版10） S21は投弾か、斑れい岩製で250.3gである。S23は敲打具とみられる円錐で、疊の先端につぶれ状の痕跡が認められる。長さ16.9cm、幅8.9cm、重さ1385g。



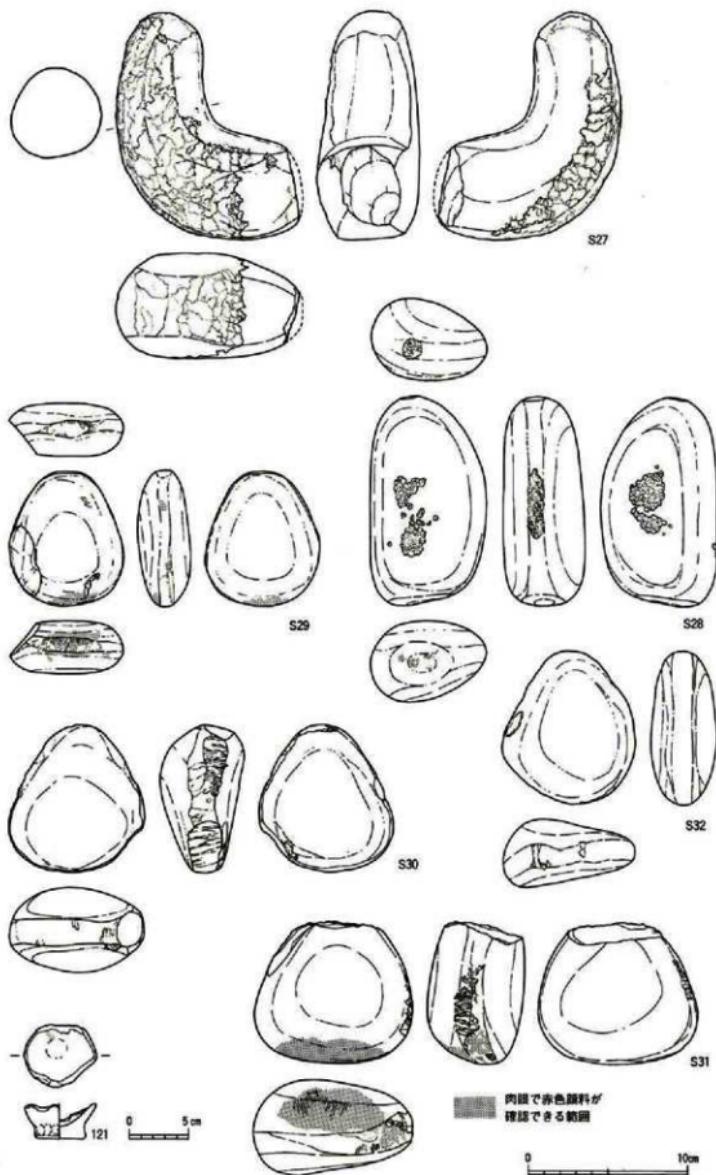
第48図 柱穴出土土器



第49図 A~D地区出土石器①



第50図 A～D地区出土石器②・鐵器・玉類



第51図 石杵類・朱付着土器

### 第3節 E地区の調査

E地区はA～D地区の500m東にある。大照寺の全面に広がる南東向き扇状地據近くにあたり、調査地は標高50mを測る。この調査地区は字名は網掛であるが、北に接する字上人ヶ市に遺跡の本体が存在するようである。ただし、今のところ字上人ヶ市では中世の集落の存在は明らかであるが、弥生時代後期の明確な造構は確認されていない。いずれにしても、将来は戎ノ前遺跡とは別の遺跡として取り扱うことになる可能性が高い。

確認調査では、中世、弥生時代後期の遺物包含層が確認され、若干の中世土器片と多くの弥生時代後期の土器片が出土している。

今回の調査では、自然流路と溝のみの検出で、集落跡は、すぐ近辺に存在するものと推察される。



第52図 E地区の設定

#### 1 自然流路・溝（第53図・写真図版13）

弥生時代後期の自然流路および平安時代の溝を検出した。

まず、花崗岩のバイラン土を地山層として、地形に沿って蛇行しながら西から東に向かって弥生時代の自然流路（SD02）が形成され、北から南に向かって直線的にSD03がSD02に取り付く。この弥生時代後期の自然流路が埋没して後、平安時代の溝（SD01）がつくられるまで空白の時期がある。

##### SD01

形態・規模 幅1.5～2.0m、深さ約40cm、検出長16mの溝である。溝底部は平底で、ほぼ均等な溝幅を保持して南西から北東に向かって直線的に築かれていることから、人工的な溝と考えられる。

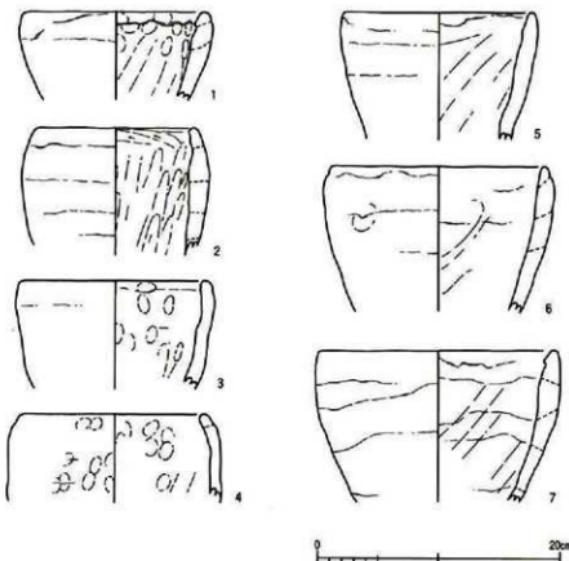
出土遺物 溝の南西端から2～4mほどの間に大量の炭と共に多量の粗製厚手の製塩土器と、鉄滓数点が溝底から投棄された状態で2m四方程度の範囲にまとまって出土している。溝内の遺物はこの一括遺物のみで、他からはほとんど出土していない。また、石器と鉄器も出土している。

土器（第54・55図・写真図版14） 1から7は、粗製厚手の製塩土器である。直線的に聞く頸部から内彎気味の口縁部に統くが、底部は存在しない。内面は縱方向の強いナデを行い、部分的にオサエの痕跡もとどめる。口縁部は横方向のナデで調整し、1や7のように内面が面をして、段をもつものもある。外面は弱いナデを施し、粗面で仕上げる。また、外表には粘土紐接合痕が残る。口径は13～18cm前後とばらつきがある。いずれも胎土には1～3mm大の砂粒を多く含んでおり、器壁は1.0～1.9cmと比較的厚い。色調は、1、2、5、6が黄褐色系、3、4、7が黄灰色から褐灰色を呈する。焼成はいずれも良好であるが、二次的な被熱を受けた痕跡は認められない。

8は踏ん張る高台を貼り付けた壺の底部である。平底から緩やかに屈曲して直線的に聞く体部が続



第53図 E地区造溝平面図

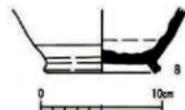


第54図 SD01出土製塙土器

く。体部外面下端はハラケズリを行い、そのほかはナードで調整する。

石器（第59図） S4は検出面より上層の出土であり、後世にSD01を削平した際に混入したものと考えられる。ややいびつな楕円形状をなし、斑れい岩製である。長さ12.1cm、幅9.0cm、厚さ8.2cmを測り、重量1383gである。

鉄器（第59図） F1、F2とともに刀子である。F1は溝南端からの出土で、先端をわずかに欠損する。刃部は4.1cm残存するが、先端部はもとより棟部も刃先も欠損する。残存する最大厚さ0.5cmを測る。F2もS4と同じく検出面より上層からの出土。茎部ないし刃部とともに大半を欠損する。刃部は2.5cm残存し、棟部は直線的で幅は1.3cmである。羽の断面は鋭角な三角形を呈し、その幅は1.8cmを測る。

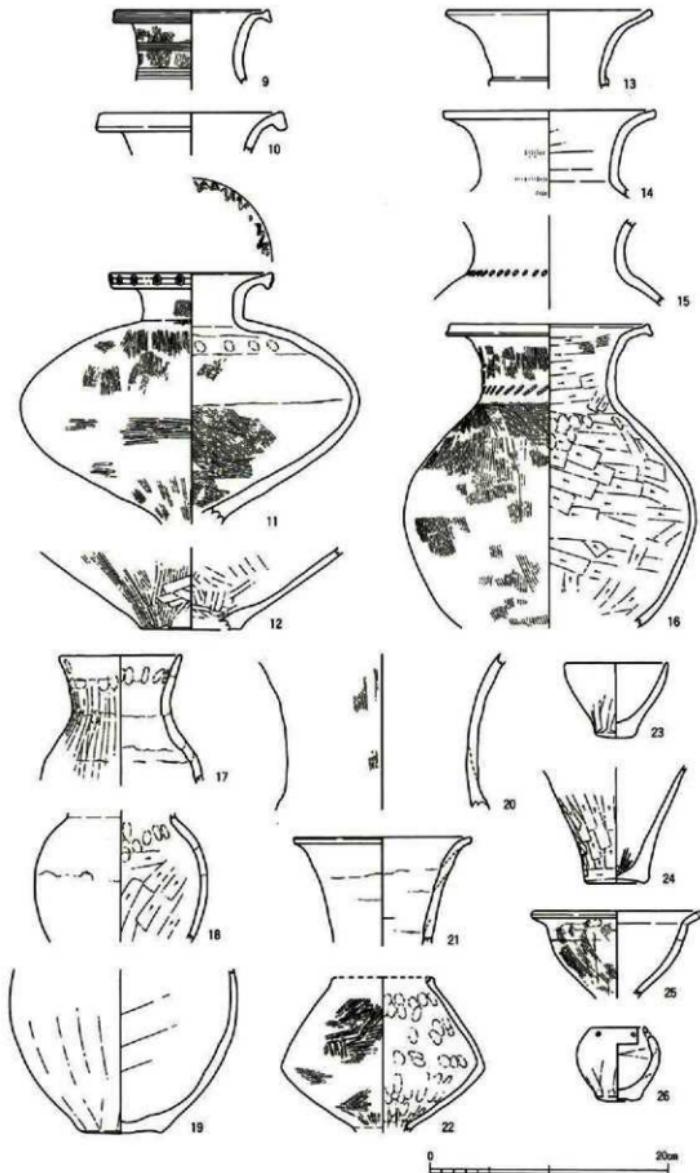


第55図 SD01出土須恵器

## SD02

**形態・規模** 最大幅6m、深さ1.2m、検出長10mの自然流路である。蛇行する溝の底には、急激な流れによって堆積したと思われる灰色粗砂疊層（3層）が50cmの厚さで堆積しており、その上には基本的に明褐色シルト質砂（2層）が60cmほどの厚さで堆積し、流路全体が埋没する。なお、流路全体を覆う暗灰褐色土上面（1層）から噴砂の跡が検出されていることから、弥生時代後期から平安時代の間に大規模な地震のあったことが推察される。

**出土遺物** 溝の2層目の中層から下層にかけて、大量の弥生時代後期の土器が投棄された状態で出土している。完形および完形に近い土器、大量の土器片の出土状況から、近辺に住居跡が存することは明らかである。また、石器も出土している。

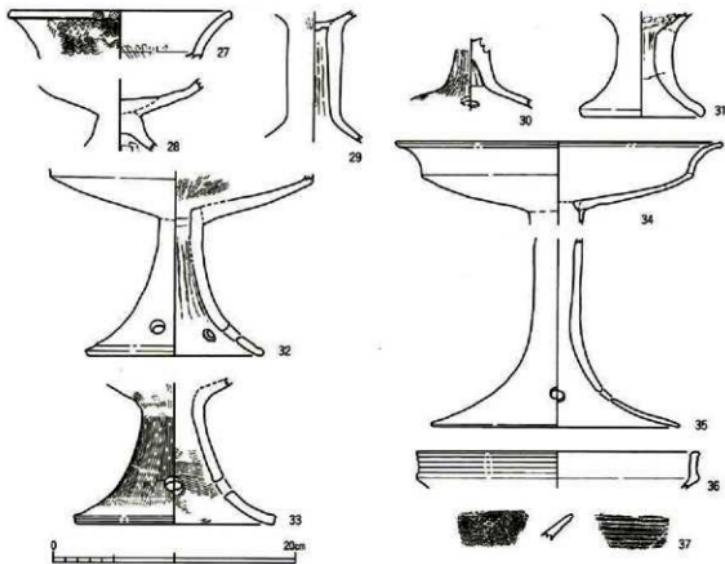


第56図 SD02出土土器①

土器（第56・57・58図・写真図版14・15・16）9と10は壺の口頭部である。9は直線的に開く頭部から口縁部が水平に伸び、端部を上下に拡張させて面をなし、そこに弱い凹線を施す。頭部外面は縱方向のハケの後、2箇所に直線文を巡らせる。口径は12.7cmである。10は口縁端部を下方に大きく肥厚し垂下させる。調整は不明で、口径は14.8cmである。扁平で大きく張った体部をもつ11は、ほぼ直立する頭部から外反して開く口縁部が続く。その端部を上下に拡張させ、外端面に浅い凹線の上に円形浮文を配置し、竹管文でおさえる。体部外面は縱方向のハケの後、下半はヘラミガキ、内面はハケで調整する。口径は13.4cm、体部最大径は28.3cmである。12は大型壺の底部。調整には、板状工具によるナデとヘラミガキを多用する。13と14は外反して開く壺の口頭部である。13は、頭部と体部の変換点に突帯を巡らせる。口径はそれぞれ16.6cmと17.5cmである。15は頭部下端に烈点文を刺突する。磨滅が進行し、調整は不明。16は底部を欠損するが、倒卵形の体部と外反して開く口頭部の壺である。外面はハケで仕上げ、頭部下端には刺突文を施す。内面は下半は縦、上半は横のヘラケズリを行う。口径は16.4cm、体部最大径は24.4cmである。17は口頭部が単純に開く。外面にはヘラナデが認められるが、総じて仕上げは雑である。18は壺の体部である。内面は斜方向のヘラケズリと指オサエが認められるが、外面は不明。19は体部下半と底部である。磨滅が進行し、調整は不明である。20は口縁端部を欠損するが、大きく開く頭部である。磨滅が著しいが、外面には縦方向のハケ調整が認められる。21は長く外反して伸びる口頭部である。口径は14.8cm。22は脚付無頭壺か。体部は重心が低く、強く屈曲して、最大径は17.0cmを測る。外面は不整方向のヘラミガキ、内面は指オサエの痕跡が顕著であり、下端にはシボリ痕が認められる。23から26は鉢である。23はほぼ完存しており、口径は8.4cm、器高は6.2cmである。24は外反しつつ伸びる体部となる。わずかに上げ底で、外面はヘラケズリ、内面はナデで調整する。25は内側する体部から口縁部が屈曲して短く開く。口縁端部はヨコナデで丸く收める。外面は斜方向のハケ、内面は板状工具によるナデが認められる。口径は13.8cm。26は球形の体部を形成し、7.0cmの最大径はほぼ中位にある。口縁の下に2箇所の穿孔が認められる。口径は4.5cm、器高は6.1cmを測る。

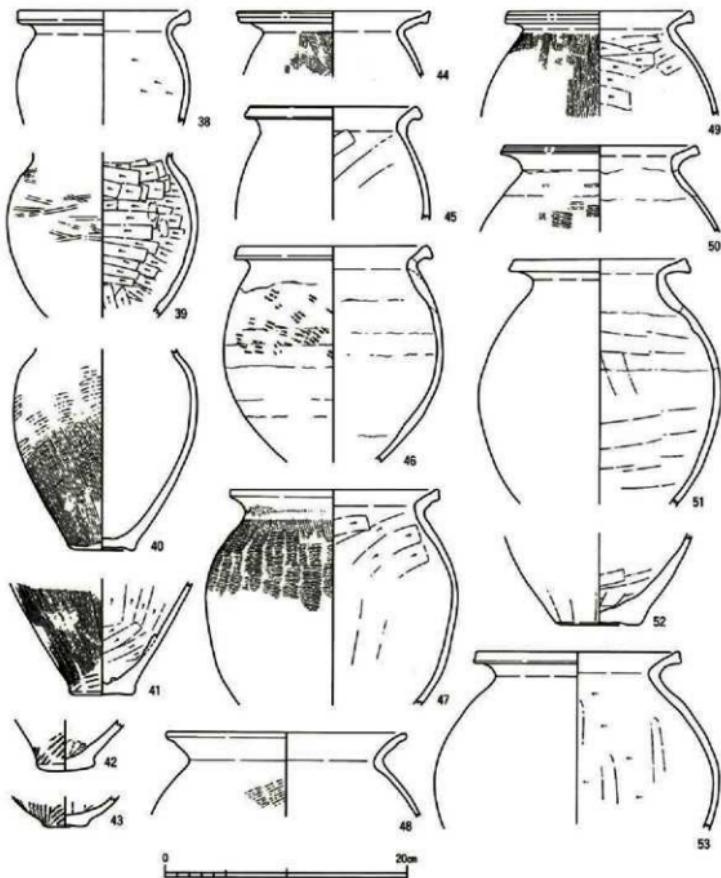
第57図の27は器台の受部である。口縁部は外反して開き、外面は2段の波状文、端面は円形浮文の竹管文を加えて装飾している。口径は17.8cm。以下37までは高杯である。29は円筒状の脚柱部と屈曲して開く脚の一部である。内面はシボリ痕が認められる。30は「ハ」字状に開く脚柱部から屈曲して脚部にいたる。外面はハケの後部分的にヘラミガキを加え、円孔を設ける。31は外彎して単純に開く脚部。全体をヨコナデで調整し、底径は10.3cmである。32は皿状坏部と脚部である。脚部は縦やかに開き、下方に6箇所の円孔を設け、脚端部外面はヨコナデで浅い凹線状を呈する。同じく33も縦やかに開く脚部であるが、内外面ともに縦方向のハケ調整が顕著で、外面は部分的にヘラミガキを行う。穿孔は4箇所にわたり、底径は16.6cmである。34は浅い皿状坏部から口縁部が外反して開く高杯である。口縁端部を強いヨコナデによって凹線状の痕跡をとどめる。口径は26.5cmである。35は中空で円筒状に長い脚柱部から大きく開く脚部で、4箇所に円孔を穿っている。36はほぼ垂直に立ち上がる口縁部で、外面に浅い凹線を巡らせて加飾している。同じく37も口縁部であるが、口径を計測できないほどの細片である。外面は平行沈線、内面は2段の波状文で飾っている。

第58図の38から53は甌である。38は「く」字形に外反する口頭部と張りのない体部上半である。口縁端部は肥厚し、上方に伸びる。39は径15.6cmの体部であり、内面の横方向ヘラケズリが顕著である。同じく40は15.0cmの最大径が上位にあり、外面はタタキの後ハケで仕上げる。41から43は底部である。41は外面はタタキの後ハケ、内面はヘラケズリで仕上げる。42はわずかに突出し、43とともに外面にはタ



第57図 SD02出土土器②

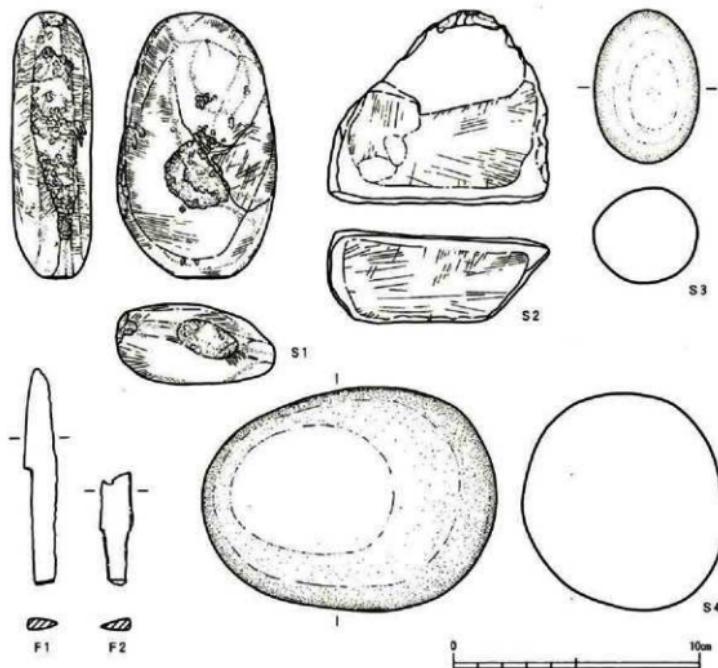
タキの調整が認められる。44から51も「く」字形に外反する口頭部の臺であるが、その屈曲は甘く、内面に明確な棱をつくり出さない。44は口縁端部が上方につまみ上げられ、凹状の面をなしている。外面は縦方向のハケで調整し、口径は15.7cm。45と46は口頭部全体が肥厚し、端部はわずかに垂下する。45は口径13.6cmで、調整は不明である。46は磨滅が進むが、外面はタタキと部分的なナデ、内面は板状工具によるナデで仕上げる。粘土紐接合痕が顕著に残っており、口径は15.3cmである。47も口頭部全体が肥厚し、端部は面をなしている。外面は横方向のタタキと、屈曲部は縦方向のハケ、内面はヘラケズリを行う。外面は二次的な被熱による剥離があり、内面は炭化物の付着が認められる。口径は16.9cm、胴部最大径は20.8cmである。48は長い口頭部をヨコナデで仕上げ、端部は丸く收める。外面に斜方向のタタキがわずかに認められる。口径は19.5cmである。49は口縁端部が肥厚し、拡張された端面にはヨコナデによる四線状の凹凸がみられる。外面は縦方向のハケ、内面は横方向のヘラケズリで器壁を薄く仕上げている。口径は14.7cmである。50は口頭部全体が肥厚し、端部は面をなして浅い凹線が巡らされる。磨滅が進行しているが、外面は横方向のタタキ、内面は屈曲部周辺はナデ、その下位はヘラケズリを行って、特に器底を薄く仕上げている。口径は15.6cmである。51は口縁端部が肥厚し、幅の広い面を形成している。外面は磨滅のため調整は不明であるが、口頭部は内外面ともにヨコナデ、屈曲部の下位はナデ、体部内面はヘラケズリもしくは板状工具によるナデを行い、器壁を薄く仕上げる。52は平底の底部である。内面は板状工具によるナデを行い、底径は7.2cmである。53の口縁端部は51に近似する。外面は磨滅のため調整は不明であるが、口頭部はヨコナデ、体部内面はヘラケズリを施している。また、



第58図 SD02出土土器③

口縁端部と体部下半の内外面には、部分的に炭化物が付着している。口径は16.4cm、体部最大径は23.5cmである。

石器（第59図・写真図版16）S1は溝肩付近から出土した。全体を細かい単位の敲打により整形され、表裏両面のはか、上下端部に面をもつ。側面は細かい敲打によって整形され、帯状に曲面をつくり出している。正面側（表面側）中央付近には、敲打により断面皿状の浅いくぼみ状痕跡を形成する。安山岩質の石材で、長さ10.8cm、幅6.5cm、厚さ3.3cm、重さ355.5gを測る。S2は埋土中から出土した花崗岩中に含まれる安山岩質黒色含有物を用いた石材の砥石で、上半部を大きく欠損する。図示した2面が砥面として残存し、特に正面側がよく使用されている。現在の重量は280.5gである。



第59図 E地区出土石器・鉄器

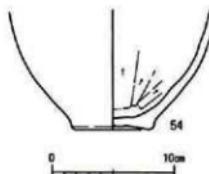
### SD03

**形態・規模** 北側から南に向かってSD02に取り付くように形成された溝である。最大幅1.5m、深さ70cm、検出長約3mを測り、SD02の2層目にあたる明褐色シルト質砂によって埋没している。SD02と併存していたようである。人工的な溝の可能性もある。

**出土遺物** 弥生時代の土器と石器が出土している。

**土器** (第60図) 54は壺の体部下半である。底部はわずかに上げ底となる。内面には部分的にヘラケズリが認められる。

**石器** (第59図・写真版16) S3は埋土中から出土した。投擲であろうか。特に磨面などの使用した痕跡は認められない。壊れい岩製で、長さ6.1cm、幅4.2cm、厚さ3.8cm、重さ151g。



第60図 SD03出土土器

### 2 その他の遺構

遺物の出土はないが、SD01と平行する溝状のくぼみが、SD01の2m程北側に、西壁に接して出ている。SD01と同時期のものと思われる。また、時期不明だが、調査区南端近くで、くぼみ東西に走り、溝の東側で南へと曲る幅50cm程の細い溝が1条検出されている。

## 第4章 まとめ

最後に、二ツ石戎ノ前遺跡の弥生時代の住居跡の構成と、出土した赤色顔料関連資料を概観し、そして西日本における赤色顔料消費遺跡としての本遺跡の位相とそこから派生する問題について触れ、今後の展望を提示する。

### 第1節 住居跡の構成と二ツ石戎ノ前集落

本遺跡は、淡路島中央の先山山地の東に延びる低位段丘に営まれた、弥生時代後期前半の集落遺跡である。眺望は比較的良好とはいえない、周辺は生産基盤となる沖積地には恵まれていない。このように、弥生時代中期末から後期初頭にかけて、丘陵や山間部に突如として集落が展開する様相は、淡路では特異なことではない（波毛・浦上1996）。特に津名郡を中心とする北淡路はその傾向が顕著で、中期の遺跡数14箇所に対し、後期の遺跡数は142箇所と実に10倍以上に激増することが知られている（伊藤2000）。洲本市域においてもほぼ同様の傾向が認められ、本遺跡もその類例を増加させたことになる。

さて、遺跡の中心の時期となる弥生時代後期前半には、13軒の堅穴住居跡と3棟の掘立柱建物が存在していた可能性が高い。しかしながら、住居跡から出土した土器を検討しても、型式差から住居跡の時間的前後関係を抽出することはいささかの困難を伴う。ここでは住居跡の規模や構造から、集落の営まれ方について考えてみたい。

二ツ石戎ノ前遺跡の住居跡は、規模と柱穴数から以下の3つのサイズに分かれる。

- ① Sサイズ…直径6～7m程度で主柱穴4本ないし6本で構成される小型サイズ
- ② Mサイズ…直径7～9mで主柱穴を6～8本で構成される中型サイズ
- ③ Lサイズ…直径9.2m以上で主柱穴8～9本で構成される大型サイズ

Mサイズの住居跡の中

第1表 堅穴住居跡一覧

(\*は復元)

住居跡	直径(m)	サイズ	主柱穴	中央土坑	備考
SH01a	6.5	S	6	浅・皿	床面から鉄錆
SH01b	8.2	M	8	浅・すり鉢	
SH02	9.3	L	9	浅・すり鉢	L字状石件
SH03	*9.0	M	7	浅・すり鉢	
SH04	*8.1	M	8	深・円筒	
SH05	*9.0	M	8	(浅・皿?)	
SH06	8.2	M	4+7	深・円筒	水滴状石杵・朱付着土器
SH07	9.2	L	8	深・円筒	
SH08a	7.0	S	6	浅・すり鉢	屋内溝
SH08b	7.7	M	4+6	浅・すり鉢	張り出し・水滴状石杵・棒状石杵
SH09	*10.0	L?	—	?	
SH10	*9.0	M	4+7	深・円筒	
SH11	*8.6	M	7	深・円筒	中央土坑からベンガラ付着石件
SH12	*10.0	L	9	浅・皿	
SH13	*6.5	S	6	浅・すり鉢	

置が大幅に偏っているSH11も、本来Sサイズの4本主柱穴の住居跡が存在し拡張された可能性がある。なお、同時並存した住居跡は3～6軒程度が考えられるが、第2章第1節で触れたとおり段丘面が北側へ伸びる場合、集落全体ではさらに多くの住居跡が同時に並存していたと見込まれる。

各サイズの住居跡に付設された中央土坑の深さや形状について観察すると、Sサイズの住居跡やMサイズに拡張された住居跡の一部には、断面が浅い皿状ないしはすり鉢状を呈すものが認められる。一方、

MサイズやLサイズの中央土坑には深さ70cmのSH06中央土坑に代表されるように主柱穴よりも深いものがみられ、中央部分が円筒形状をなし非常に深い点が特徴的である。後期中葉の篠山市内場山遺跡1号住居跡中央土坑で深さが73cmに至っているのをはじめ、三田市川除・藤ノ木遺跡や大阪府和泉市觀音寺山遺跡の調査成果から、後期前半から後期中葉にかけて中央土坑が深さ60~70cmに達するものが出現するなど、次第に深くなっていく傾向が確認できる。

これまで中期から後期にかけての集落構造に関しては、都出比呂志氏によって岡山県山陽町用木山遺跡の状況から、丘陵斜面に作り出したテラスごとの大型住居1軒を核とする普通規模の住居3~4軒というまとまりの存在が指摘されている(都出1989)。また、岡山県津山市域の中期から後期にかけての集落に関して、同一丘陵上におけるブロックごとの堅穴住居跡の倉庫を含めた組み合わせが分析されている(中山2002)。そこでは全体的には床面積の狭い2・4本主柱穴の住居跡(A類)が8割、6・7本の主柱穴をもつ中間の面積の住居跡(B類)や極端に面積の大きい多柱構造住居跡(C類)が残りの2割と中・後期を通して数量的に安定しているとしながらも、最終的にはB・C類を中心としたA類数棟で構成される序列型と、C類住居が並び建つ並立型の二種類に収斂するとしている。

ほぼ同時期の近隣の集落をみると、洲本市大森谷遺跡ではA類のみで構成され、同じく中津原遺跡ではA類からC類まで存在し多様な構成をみせる。二ツ石戎ノ前集落では、当初B類やC類で構成される状態から、一度A類主体へと変化するが、それらが拡張され再びB類のみで構成される。同時期に存在する住居跡の規模に均質性がみられ、主柱穴や中央土坑が安定した構造をもつに至っている。

二ツ石戎ノ前集落の立地は緩慢な低位段丘であり、他の狭い丘陵上や尾根筋上に立地する山間地集落とは区別される。さらに集落を構成する住居跡の様態が近隣の他集落と比べて突出していることは、以下に述べる石杵をはじめとする赤色顔料関連遺物の卓越した保有量との関連でも興味深い事実である。

## 第2節 赤色顔料関連資料について

まず、「石杵」という名称を用いることが妥当か議論があるが、ここでは便宜的に石杵の名称を用い、形態から「L字状石杵」、「水滴状石杵」、「棒状石杵」とした。将来的にはそれぞれの石器の型式を定義付け、考古資料としての明確な位置づけを果たしたいと考える。

さて、本遺跡で出土した赤色顔料関連資料は、石杵はL字状石杵1点、水滴状石杵4点、棒状石杵1点、この他朱付着土器1点が出土している。以下、各資料について要點を述べていきたい。

まずL字状石杵に関しては、滋賀県伝鶴鳴山古墳例の報告の中で初めて用語が用いられ(白井1988)、本田光子氏がこれを受けて継承し(本田1990)定着した感がある。本調査出土例では、ハンドル部が小さく丸くここんとした形態だが明確なすり面をもち、微量の水銀朱の付着が確認された。屈曲部前面の付着の状況と全体の表面積約半分に及ぶ風化を考慮すれば、本来より広範囲に付着していた可能性がある。ハンドル部の状況とすり面の擦痕の方向から考えると、狭小なハンドル部を両手でしっかりと握りし、両腕による前後運動がなされたに違いない。

次に水滴状石杵に関しては、辰砂採取遺跡以外で出土する内面朱付着土器に伴うことが多い一群の石杵を、すり面が発達している特徴から広義のL字状石杵と認め、この中に「(狭義の)L字状」と「水滴状」の石杵があると分類された(大久保1998)。従って本報告では、特に「水滴状石杵」と呼称した。4点ともに側辺部に両面側からの敲打による筋状ないしは縦状のくぼみが特徴的に認められ、三角形の形

状が意識されて整形されたことが明らかである。同時に下端のすり面と場合によっては上部の端面も意図的に作り出され、自然礫の状況からは大きく改変されている。すり面があいまいに形成されたものもあるが、4点中3点からベンガラの付着が確認されている。

そして棒状石杵は自然礫の形状から大きく逸脱しないものの、すり面が設けられ、細部もわずかながら加工されている。注意したいのが、すり面の中心がくぼみ、側面にも敲打痕が密集し皿状のくぼみ痕跡を形成していることである。それは一見、赤色顔料を精製する以前の行為に関連するかのようであるが、側面のくぼみ痕跡から赤色顔料は検出されなかった。そこで、二つの可能性を示したい。一つは棒状石杵が本来赤色顔料微粉化にいたる精製過程用のものでありながら、あたかも粉碎作業等を行ったかのように生産に関わった「痕跡」を無理やり作り出した可能性である。もうひとつは縄文の凹石のように、本来ドングリなど木の実を潰すために利用された石の痕跡が残ったまま、赤色顔料精製用の石杵に転用された可能性である。なお、後期後半の和歌山市府中Ⅳ遺跡出土例にもこのような敲打痕跡が認められ、形態も外埠する側辺と内側する側辺を併せ持ち、本遺跡出土例の形状とよく似ている。

さて、二ツ石戎ノ前遺跡では、L字状石杵と水滴状石杵が共伴して出土した。これまで両者の相間は、いずれも「L字状石杵」の範疇に含めつつ、後者が発展して前者へと変化する考え方（大久保1998）や後者を前者の祖型とする考え方（石井2002）がある。しかし、二ツ石戎ノ前遺跡以外にも大阪府高槻市古曾部・芝谷遺跡（宮崎1996）などのように両者が後期以降も共存する遺跡があることや、徳島市庄遺跡のように水滴状石杵が後期後半にまで残存し、かつそれが東部瀬戸内地方においては主体を占めていることを鑑みたとき、両者の相間は先にみた単純な一系統の型式組列だけでは十分な理解は得られない。むしろ、水滴状石杵がL字状石杵の祖型となる石器であるとしても、両者の分布を時系列で追ったとき（石井2002）、後者は基本的には阿波を中心とする東部瀬戸内に收敛する状況を示しているのに対し、前者のL字状石杵は北部九州から瀬戸内北岸、畿内、東海まで帶状に拡散していることは示唆的である。すなわちこの二つ形態の石杵の分布状況は、地域性を明示している証左とみてよいであろう。そう考えることが許されるならば、畿内と東部瀬戸内の結節点となる淡路の二ツ石戎ノ前遺跡から両者が共存した意義が深まることになる。このことについては、後で触れることになる。

ところで、先山徹氏による石材鑑定の結果、L字状石杵が砂岩を、水滴状石杵がディサイトや花崗斑岩、花崗岩中の暗色含有物を、棒状石杵がディサイトを素材としていることが明らかになった。このうち砂岩は和泉層群中に、花崗岩中の暗色含有物は遺跡周辺に分布する洲本花崗閃緑岩中に含まれる。一方、花崗斑岩は遺跡の立地する大阪層群の周辺に点在している。ディサイトに至っては島内で産出する可能性は捨てきれないまでも極めて低いとの教示を得た。なお、ディサイトや花崗斑岩といった安山岩系統の石材は、サヌカイト同様香川県東部や奈良県東部に多く産出するようである。整理すると、L字状石杵と水滴状石杵1点は洲本市域周辺での素材獲得が考えられるが、水滴状石杵3点と棒状石杵では、島内で入手した可能性とより広範な地域における素材調達の可能性の両者を考慮する必要がある。

次にSH06から出土した朱付着土器であるが、いわゆる「内面朱付着土器」の定義（本田1994）には含まれられない土器片である。この土器は、本来完形であった鉢または甕が水銀朱を貯蔵・運搬・加工するための専用器として使用されたものではない。科学分析の結果、土器片の内面のみならず、外面や断面、底部にまで水銀朱が付着していることが明らかになった。すなわち、土器が偶発的に水銀朱の貯蔵器に混入した可能性を考慮の外におけば、破砕した底部を小さなカップのように使用し、水銀朱を取り分けるように使用する機能が想定されよう。

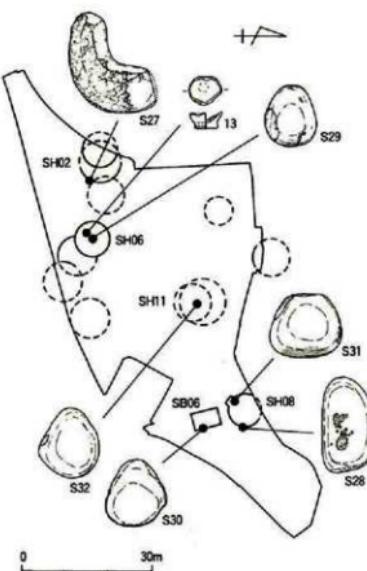
### 第3節　まとめと展望

述べてきたように、二ツ石戎ノ前遺跡を特徴づける考古資料は、豊富な赤色顔料関連遺物である。ここでは遺跡における在り方とその意義や背景について考えてみたい。

今回の調査は、淡路における赤色顔料関連遺物の具体例としては初例となった。さらに、内訳はSH02-L字状1点、SH06-水滴状1点、朱付着土器1点、SH08-水滴状1点、棒状1点、SB06-水滴状1点と数量にも恵まれた。また住居跡の埋土から出土した朱付着土器を除いて、石杵は周壁溝、中央土坑、柱穴の遺構からの出土であり、プライマリーナ原位置を保持した石器も多い。遺跡は後世に大きく削平を被っている箇所もあるが、床面がかろうじて残存した5軒の堅穴住居跡(SH01、02、06、07、08)のうち3軒までが赤色顔料関連遺物を保有していた点は、特筆されてよからう。すなわち、集落を構成する住居跡の過半数に、赤色顔料関連遺物が接觸されていたことになる。このことは、赤色顔料が住居跡単位で活発に消費されていたことを如実に物語る事実に他ならず、その背景には赤色顔料の精製直前の原料としての辰砂がある程度豊富に流通していた社会基盤を想定してもよいのである。

さて、科学分析によって同定された赤色顔料のうち、一段と鮮やかに発色するのは水銀朱である。この水銀朱の原料である辰砂は、国内では北海道と、本州、四国、九州の中央構造線に沿った地域に水銀鉱床として分布している。淡路では、第2図のとおり鷲羽山地の南に紀ノ川と吉野川を結ぶ中央構造線が連なってはいるものの、現在までに水銀鉱床はまったく発見されていない。なお、三原郡南淡町には「丹生神社」をはじめ、水銀朱またはベンガラの存在をうかがわせる地名も残るが、確実な証拠にはなり得ていないのが実情である。

そこで、辰砂の供給先を国内に限定するならば、徳島県阿南市若杉山遺跡(岡山1997)が最有力候補であることは贅言を要しない。確かに、若杉山遺跡の発掘調査から弥生時代における辰砂の生産と流通の実体が解明された意義は大きい。ところが、近年の消費地遺跡の状況は弥生時代中期末から後期にかけて西日本各地で水銀朱の需要が増大したことを物語っており(大久保1998、北條1998b)、若杉山産辰砂だけでは供給がまかなえなかつた可能性も想定されている。本書の付章に本田・志賀両氏が詳述しているのでそちらに譲るが、現在では若杉山産以外の国産辰砂や中国産の辰砂の流通も射程に捉える時期にさしかかったようと思われる。



第61図 赤色顔料関連資料の分布状況

ここで、若杉山遺跡での辰砂の生産が本格化する後期後半以前に中国産の辰砂が流通していたと想定した場合、その主要なルートの一つは北部九州と畿内を結ぶ瀬戸内海北岸ベルト地帯と考えて大過なかろう。それは中期後半から後期初頭にかけて中国系文物が列島内に流通する重要なルートでもあり（寺沢1985）、また先にみたL字状石杵の分布範囲と重複することになる。

このように推認したとき、本遺跡からL字状石杵が出土することは、辰砂とその精製儀礼や消費行為が明石海峡を越えてルートから南下したことの意味することになる。かくして、海峡の北に位置してL字状石杵を保有する加古川市瀬ノ口遺跡、神戸市玉津田中遺跡、同伯母野山遺跡はもとより、河内・和泉に点在する石杵出土遺跡などを総合して、朱の環大阪湾ネットワークを獲得したかのような様相を示している。一方、同時に出土した水滴状石杵は分布の状況から考えて東瀬戸内の影響を現していることも事実であり、複雑で重層的な様相が交錯している。

いずれにしても、原料の辰砂が日本産であるかもしくは中国産であるかの答えは、考古学研究者による精緻な発掘調査から獲得される微細な資料の蓄積と、文化財科学者による分析精度の適合と絞り込みによる成果に委ねられている、と言って過言ではなかろう。

ところで、分析の結果、本遺跡出土の赤色顔料は、L字状石杵には水銀朱、水滴状石杵と棒状石杵にはベンガラが付着していたことが判明した。この事実は、赤色顔料の相違が石杵の器種を規制しているようにも見える。しかし、L字状石杵と水滴状石杵が共存した先述の古曾部・芝谷遺跡では、科学分析は行われていないが水滴状石杵に水銀朱が認められるという。また一般的にも、水滴状石杵に付着する赤色顔料は水銀朱であることが検証されており、L字状石杵と同じく基本的には朱銀朱精製専用具とみてよいようである。

付章で詳しく述べられるように、確かにこうした水銀朱専用の石杵からベンガラが検出される例外的な事実（本田・成瀬1995など）は存在するようである。しかし、二ツ石戎ノ前遺跡では赤色顔料の精製に関わる石器のうちL字状石杵にのみ水銀朱が検出された、という事実こそが重要と考えられる。つまり、本遺跡においてはL字状石杵が水銀朱を精製する専用具であり、多数の水滴状石杵と棒状石杵は水銀朱を補完するベンガラの専用具に充てたのであれば、水銀朱とL字状石杵に付与された象徴性と相対的な優位性を看取ることが可能となる。水滴状石杵と棒状石杵の一部に、淡路では產出しない可能性の高い石材が用いられていることも、実に示唆的である。

次に、二ツ石戎ノ前遺跡と中川原銅鐸について触れておきたい。両者が地理的に至近の距離にあることは、第2章すでに述べたとおりであり、有機的な関連は否定できない。さてこの中川原銅鐸は、最古段階の銅鐸としてつとに著名である。そして、近年の研究成果によれば、最古段階から中段階のいわゆる「聞く」銅鐸の一群は、弥生時代中期末から後期初頭にかけて一齊に埋納された可能性が指摘されている（福永1998）。そうであるならば、二ツ石戎ノ前集落が活動を開始した時期と中川原銅鐸が埋納された時期には、時間の接点を見いだすことが可能となる。つまり、二ツ石戎ノ前集落では中川原銅鐸を用いた祭祀を行い、そして最終的には近接する丘陵に銅鐸を埋納した可能性が浮上するのである。

問題は、銅鐸と朱の相関である。資料の蓄積が進んでいる徳島県の研究成果（北條1998a・1998b）は、水銀朱消費遺跡とそれが塗布された銅鐸の本質に内迫している。こうした事例に注目し、同様の問題意識をもっていたところ、幸いにも中川原銅鐸を直接観察する機会を得た。その際、鐸身の上半部と紐の一部に赤褐色の微細な粒子が付着していることが確認できた。しかし、これが塗布された赤色顔料であるか、赤色顔料であるならばそれは水銀朱かベンガラか、もしくは青銅の錆化に伴う化学変化の所産で

あるか。疑問点は多いが、残念ながら結論を引き出すことはできなかった。将来、中川原鋼鐸の科学分析を含めた総合調査が実施されることを切望したい。その結果いかんによっては、新たな二ツ石戎ノ前遺跡の実像が提示できるであろうと期待している。

最後に、赤色顔料に関連する石器について、いくつかの予測と課題を提示しておきたい。二ツ石戎ノ前遺跡での豊富な赤色顔料関連遺物の発見を契機として、淡路の他の遺跡での類例を検索する作業を開始した。さらに、報告された既存の縄石器のうち形態が水滴状石件に近似するものや、対象をさらに拡大して叩き石・敲石・磨石と報告された石器も含めて調査を行っている。

その結果、石片とは認識されてはいないものの、敲石・磨石と報告された石器の表面に赤色顔料が付着している事実を確認した。の中には発色の度合いから、水銀朱と考えてよいものも存在する。この調査は現在も継続中ではあるが、淡路における後期からの集落の激増にあわせて、同種の石器も出土数を増加させていること(種定1996)を考えたとき、赤色顔料が付着している石器の再発見もさらに増えると予測している。さらに、台石や砥石と報告された石器が、石臼の可能性があることも視野に入れている。今後は、淡路の赤色顔料関連遺物出土地が、現在の二ツ石戎ノ前遺跡という一つの点の存在から、将来は複数遺跡から構成される面的な存在に拡張する可能性は、きわめて高い。

また、対岸の播磨地方をみても、近年水銀朱の精製に関連する把手付広片口鉢の類例が増加している(深江2002)。先にみてきたU字状石件の分布と、そこから導かれる水銀朱の流通の多さを裏付ける証左が、さらに追加されたことになろう。

そうであるならば、現在行っている淡路の石器資料の調査は、瀬戸内北岸および環大阪湾に拡大して継続しなければならない。弥生時代後期以降、調理具と一緒にされるいわゆる叩き石・敲石・磨石や、台石・砥石などの出土例が高地性集落を中心として増加する傾向にある。淡路地方と同様に、こうした石器の一部でも赤色顔料に関連する遺物であることが確認され、そして将来その産地同定が可能になれば、弥生社会の実像はより鮮明になるものと考えるからに他ならない。

#### (引用・参考文献)

- 石井智大 2002「弥生時代における赤色顔料使用の様相」第82回京都弥生談話会レジュメ  
伊藤宏幸 2000「淡路島の弥生遺跡—北淡路を中心に」第107回考古学研究会関西例会発表資料  
大久保徹也 1998「弥生時代の内面朱付土器」『考古学ジャーナル』No.438 ニュー・サイエンス社  
岡山真知子 1997「辰砂生産遺跡の調査—徳島県阿南市若杉山遺跡—」徳島県立博物館  
白井順子 1988「石杵の新資料」『近賀考古学論叢』第4号  
武已和弘(編) 1999『大阪府和泉市親雲寺山遺跡発掘調査報告書』同志社大学歴史資料館  
梅津定洋介 1996『丹波・播磨・淡路の石器「農耕開始期の石器組成」』国立歴史民俗博物館資料調査報告書7  
都出北呂志 1989「日本農耕社会の成立過程」岩波書店  
寺沢薫 1985「弥生時代船形製品の東方流入」『考古学と移住・移動』同志社大学考古学シリーズⅡ  
中川涉(編) 1993『内場山城跡』兵庫県文化財調査報告第126号 兵庫県教育委員会  
中山敏紀 2002「堅穴住居の分類と機能」『年報津山弥生の里』第9号 津山弥生の里文化財センター  
波毛康宏・浦上雅之 1996「淡路國 宮生文化」「兵庫縣の考古學」吉川弘文館  
深江英憲 2002「年ノ神遺跡・大二遺跡出土の把手付広片口鉢と兵庫県下の新資料」  
『年ノ神遺跡』兵庫県文化財調査報告第235番 兵庫県教育委員会  
福永伸哉 1998「鋼鐸から銅鏡へ」「古代国家はこうして生まれた」角川書店  
北條芳隆 1995「徳島県における弥生の朱」『考古学ジャーナル』No.394 ニュー・サイエンス社  
北條芳隆 1998「神仙思想と朱と僕人—弥生時代から古墳時代へー」『考古学ジャーナル』No.438 ニュー・サイエンス社  
北條芳隆 1998b「阿波の鋼鐸と朱」「川と人間—吉野川流域史」第4巻 深水社  
本田光子 1990「石杵考」「古代」第90号 早稲田大学考古学会  
本田光子 1994「内面朱付土器」「庄内式土器研究」『庄内式土器研究』Ⅵ 庄内式土器研究会  
本田光子 1995「内面朱付土器」第3章 庄内式土器の石器と土器に付した赤色顔料について」  
『足守川加茂A遺跡 足守川加茂B遺跡 足守川矢部南向遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94  
宮崎康雄 1996「古曾部・芝谷遺跡—高地性系落遺跡の調査—」高槻市文化財調査報告書 第20冊 高槻市教育委員会

# 付 章 ニツ石戎ノ前遺跡出土の赤色顔料とその関連遺物

別府大学 本田光子・志賀智史

## 1. はじめに

兵庫県洲本市ニツ石戎ノ前遺跡出土の赤色顔料とその関連遺物について調査する機会を得たので、その方法と結果を報告し若干の考察を行いたい。

現在までの知見によれば、出土赤色顔料は酸化第二鉄 ( $Fe_2O_3$ ) を主成分とするベンガラと赤色の硫化水銀 ( $HgS$ ) を主成分とする朱の二種が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては、四酸化三鉛 ( $Pb_3O_4$ ) を主成分とする鉛丹がある。これら3種類の赤色顔料を念頭において分析調査を実施した。

## 2. 試 料

試料は土器1点、石器6点の合計7点で、全て弥生時代後期前半に属する。石器には、肉眼では赤色物の付着が確認できない試料も含まれていた。これらの石器には、はっきりと赤色物の付着が確認できる試料と石器形態が類似していたものもあるので、肉眼では確認できなくとも赤色物が付着している可能性を考慮して十分観察を行った。

## 3. 方 法

①実体顕微鏡観察 6~40倍の倍率で直接に遺物を観察する。赤色物がある場合は、その付着状態や付着部位等を調べる。また、光学顕微鏡および電子顕微鏡用の試料を作成するために針先につく程度の赤色部分をサンプリングする。赤色顔料の三者はそれぞれ特徴をもった形状を有しているので、材質や状態などについては、この段階と次の生物顕微鏡による観察では経験的に見極めがつく。

②生物顕微鏡観察 50~400倍の倍率でサンプリングした赤色物を観察する。透過光および反射光で粒子の状態、形状、粒度等を精査する。特にベンガラの場合は粒子が $1\ \mu m$ 以下と非常に小さいので粒子形態の把握には次の電子顕微鏡による観察が必須である。

③電子顕微鏡観察 20~50,000倍の倍率でサンプリングした赤色物を観察する。 $1\ \mu m$ 以下の粒子の形状を観察する。この顕微鏡での観察は白黒での観察のみとなるので、確実に赤色部分を観察できるよう、試料の作成には十分な注意を要する。

④螢光X線分析 赤色物の主成分元素の同定が目的である。赤色の由来となる元素として、朱はHgが、ベンガラはFeが検出される。ただし、土壤や石器、土器にはもともと鉄分 (Fe) が含まれているので、これのみによる朱かベンガラかの判別は危険である。今回は、試料に付着する赤色物が微量ないしは測定しづらい部分に残っており、通常の大型試料台螢光X線分析装置により石器、土器をそのままの状態で測定することは困難であった。そこで、フィリップス社製走査型電子顕微鏡XL-20による観察時に、付属のEDAX社製エネルギー分散型螢光X線分析装置を用いて赤色物の粒子自体の測定を行った。

以上の作業工程をふまえた上で、提供を受けた試料に含まれる「赤色にみえるもの」が、考古学的に意味のある赤色物つまり「赤色顔料」であるか否かを判断した。また、肉眼では赤色物が認められなかつた試料についても同様に調査を行い、「赤色顔料」の有無を調査した。

#### 4. 結 果

分析結果とそれに基づく赤色顔料の種類を第2表に示す。

試料3を除く6点の試料にはすべて赤色顔料が認められた。試料1、5は朱、試料2、4、6、7はベンガラであった。試料3には赤色顔料は認められなかった。

試料1はL字状石杵であり、石器表面は下端の磨面から屈曲部外縁のハンドル部分にかけて風化を受け、荒れている。肉眼では赤色顔料の付着はまったく確認できない。実体顕微鏡下では、朱は磨面では3ヶ所に認められたにすぎず、ほとんどが屈曲部の内側から側面にかけて認められた。朱の残存状況は、石器表面の細かな凹みの奥に張り付くように残っている(写真1、2)。石器の風化を考慮するならば、磨面以外の全体に肉眼では見えない程度の微量の朱が付着していたと考えられる。朱の粒子は直径約5μm以下のものを中心としている(写真3)。

ベンガラの付着した試料のうち、肉眼で赤色顔料の付着が確認できるものは試料2、4のみであり、試料6、7では実体顕微鏡下においてのみ赤色顔料の付着が認められた。しかも試料7には10ヶ所程度に残るのみであった。ベンガラの残存状況は、石器表面の細かな凹みに認められる(写真4、6、14、15)。ベンガラは生物顕微鏡下では粒子が凝集している状態が観察でき(写真5)、その粒子は電子顕微鏡によって4点ともすべて同様な鱗片状の外観を呈する粒子であることがわかった(第63図)。

試料5は内面朱付着土器(本田1994)である。内面(写真7)には部分的ではあるが直径約7μm以下の粒子で構成される朱が認められる。大粒のものでは約90μmのものも認められる(写真13)。断面(写真9)や外面(写真10)、底部(写真11)では土器胎土の砂粒の抜けた部分やクラックに、内側から染み出してきたような朱の痕跡が確認できる。この朱には大粒のものではなく、直径約1μm以下の粒子を中心構成されている。

第2表 試料一覧と分析結果

試料No.	種別(器種)	出土遺構	出土箇所	顕微鏡観察	蛍光X線分析	赤色顔料の種類	備考
1	L字状石杵	SH02	副壁溝底部	朱	Hg	朱	
2	水滴状石杵	SH06	中央土坑埋土	ベンガラ	Fe	ベンガラ	
3	水滴状石杵	SB06	柱穴底部	確認できず	—	なし	微量の赤色・緑色スプレーも付着
4	水滴状石杵	SH08b	副壁溝底部	ベンガラ	Fe	ベンガラ	
5	土器(堀底部)	SH06	住居跡理土	朱	Hg	朱	内面朱付着土器
6	棒状石杵	SH08b	副壁溝	ベンガラ	Fe	ベンガラ	微量の赤色スプレーも付着
7	水滴状石杵	SH11	中央土坑埋土	ベンガラ	Fe	ベンガラ	

#### 5. 考 察

##### L字状石杵について

ニツ石戎ノ前遺跡から出土したL字状石杵の形態的特徴は、梢円形を呈する磨面を有し、その磨面は短軸方向に平坦で、長軸方向に緩く弧状を呈することにある。この特徴は他の地域で認められるL字状石杵の特徴と一致している。一般に、この磨面には長軸方向に平行する擦痕が認められる場合が多い。このような磨面をもつL字状石杵ではあるが、石臼と共に伴した例はない。

当遺跡のL字状石杵における朱の付着状況は、磨面にはほとんど認められないが、磨面以外、主としてハンドル部分を中心に、小さな凹みの奥に張り付くように認められる。しかもその朱は肉眼ではみえ

ないほど微少・微量であり、実体顕微鏡下においてのみ確認できる。このような朱の残り方は他の遺跡出土品の多くにも認められる。重要な点は、磨面以外の部分には、朱が容易に認められる点であろう。

現在、私たちが石杵で朱を磨り潰した場合、いくらその石杵を洗っても、肉眼で朱がみえなくなるまで洗い落とすことは不可能に近い。実体顕微鏡での探索を逃れるとなると、なおさらである。一方、石杵に残された朱が多種多様な埋蔵環境のなか、約2,000年という埋没期間にどのような挙動をとったのかは不明な部分も多い。しかし、ハンドル部分には朱が認められるにもかかわらず、磨面には朱がほとんど残存していないというように、部位によって残り方に差が認められることから、使用停止時と現在の朱の残存状態に大きな変化はなかったと思われる。とすれば、磨面には朱が残っていないということが、最も重要な意味をもつことになる。すなわち、朱を擦った（ここではあえて「精製」の用語は用いない）石杵から、「意図的に朱を除去する行為」が読みとれるのである。

この「意図的に朱を除去する行為」はハンドル部分よりも磨面に特に入念に行われている。このことは肉眼ではみえない朱が、実体顕微鏡下ではハンドル部分に確認でき、磨面には実体顕微鏡下でもほとんど認められないことからも明らかであろう。このように考えれば、先にあげた磨面の諸特徴は朱を擦る行為の結果ではなく、擦ってついた朱を除去した際の痕跡と解釈できる。

「意図的に朱を除去する行為」は、当然新たな「朱を付着させる行為」と表裏一体の関係にあることが予想される。しかも、その行為は単なる朱の「精製」ではなく、白い磨面を赤く染める行為自体が目的であったと思われる。これらの行為がどのような思想的背景をもって出現したかは、なお検討の余地があるが、今回の調査はこれまで単なる朱精製の道具と考えられていたL字状石杵の用途に対して、再考を迫るものである。

筆者らの一人本田は、赤色顔料に関わる石杵について調査を継続しているが、今回の調査により、L字状石杵の機能についての長年の疑問に對して整合性のある一つの解釈を導き出すことができた。上記の観察およびそれに基づく考察は主として志賀による所が大きいことを付記する。

#### 朱の産地について

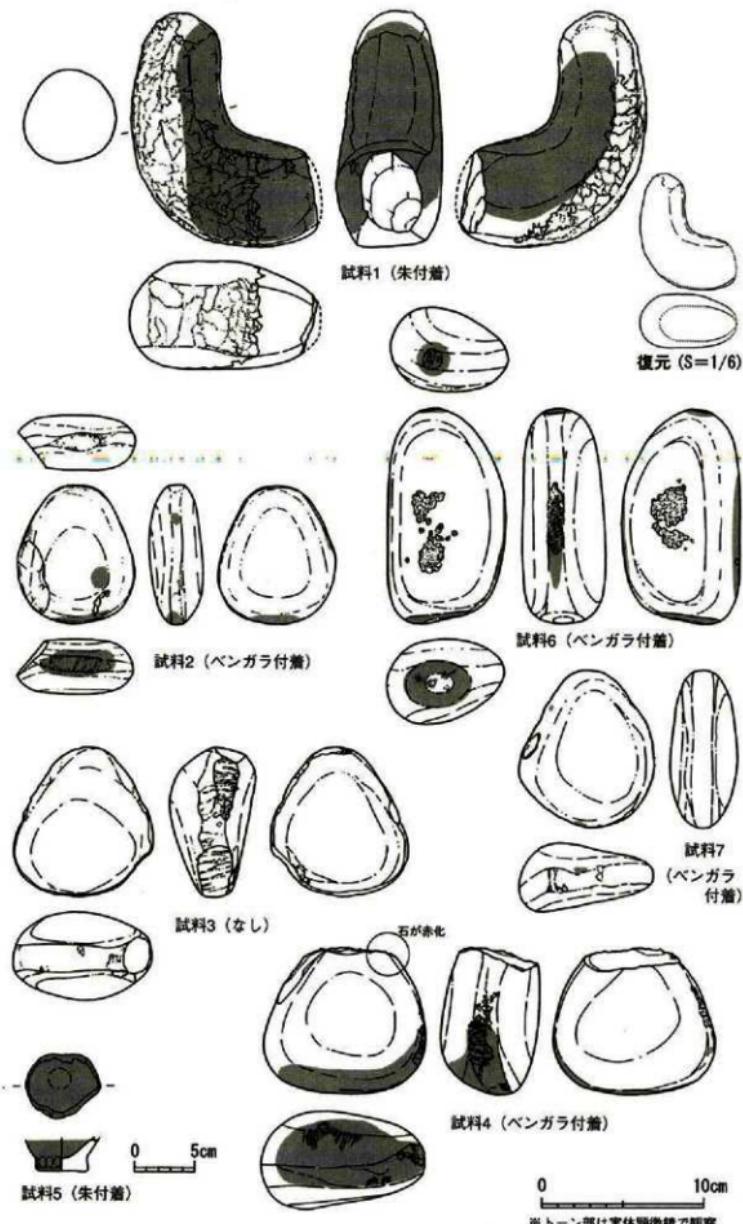
試料1のL字状石杵と試料5の内面朱付着土器に付着する赤色顔料は朱であった。弥生時代後期の朱の産地と言えば、当遺跡の南方約70kmに位置する徳島県若杉山遺跡がある。しかし、二ツ石戎ノ前遺跡出土の朱が若杉山遺跡からもたらされたかどうかは現状では不明である。明確な答えは、硫黄同位体比の測定による朱、辰砂の産地推定（南他2002）が考古学資料へ確実に適応されるまで待つかない。

淡路島に位置する二ツ石戎ノ前遺跡で、水滴状石杵が出土したことから、朱の若杉山一元論に拍車がかかるような解釈は慎みたい。むしろこれを機会に、考古学的には、赤色顔料のなかでも朱と深い関わりをもつL字状石杵の分布図が依然として畿内と瀬戸内、北部九州にほぼ限られること、さらに近年北部九州での中国産かと思われる辰砂鉱石の貯蔵遺構が発見されていること等を考慮して、從来から言わされている朱の若杉山一元論は改めて検討しなければならないと考える。

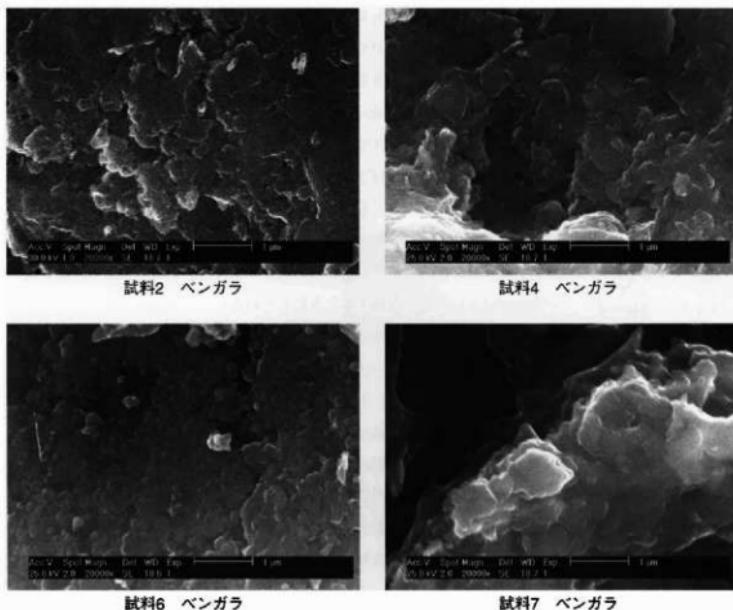
また、後述のように、二ツ石戎ノ前遺跡の水滴状石杵には朱は残存せず、ベンガラだけが付着しているという事実がもつ意味も十分に検討しなければならない。水滴状石杵の初現を弥生時代前期の大坂府龜井遺跡出土の石杵と考え、徳島県名東遺跡のそれが中後期の住居跡出土であることに鑑みれば、本例が後期前半の住居跡出土であることはなおのこと重要な意味をもつことになるであろう。

#### ベンガラについて

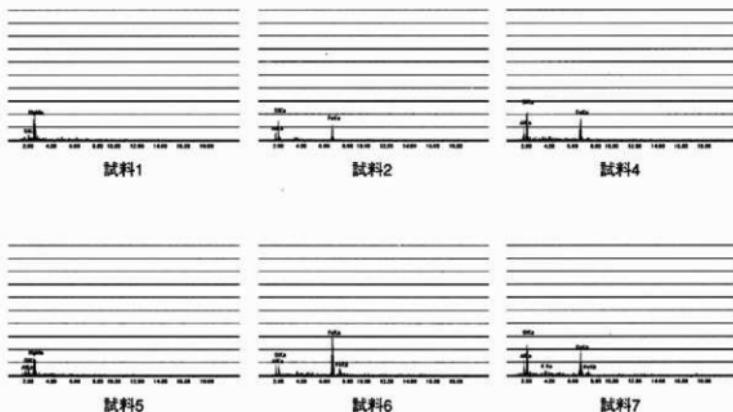
出土ベンガラは、その原料や製法からみると極めて多様性に富むと考えられる。その原料が、「赤色



第62図 各試料における赤色顔料の付着箇所



第63図 電子顕微鏡写真



第64図 蛍光X線分析スペクトル

の由来が酸化第二鉄にあるもの」は、鉱物系と生物系に分かれる。前者は赤鉄鉱や褐鉄鉱を原料とするもので、後者は鉄細菌の死骸を原料とするものである。これ以外に「赤色の由来が酸化第二鉄にないもの」は広義のベンガラとしているが、結晶構造として酸化第二鉄をもたないもので、非晶質の褐鉄鉱に赤色の由来があるかとも考えられているが、いわゆる赤土や赤色岩と呼ばれるものを原料としているものである。生物系のものとしては、鉄細菌の鞘を焼いて作ったパイプ状の粒子をもつものが著名ではあるが、その他の粒子形状からの分類はまだ行われていない。

出土ベンガラの外観からの分類作業は始まったばかりであること、さらに今回の分析調査では、X線回折分析による結晶構造の同定を行っていないこともあり、本例のような鱗片状の粒子をもつベンガラが何を原産としたものかは今後の課題としておきたい。

ここでは、4点の石忤に付着残存していたベンガラがすべて同一の原材料・製法による可能性が高いこと、生物系パイプ状ベンガラではないことを指摘することにとどめる。

#### 朱専用の石忤にベンガラが残存していることについて

L字状石忤や水滴状石忤が、考古学的遺物としての赤色顔料のうち、特に朱に関わる遺物であることは、現在までの調査例から確かなことであろう。しかしながら、これらの遺物にベンガラが付着した例が近年増加している。そもそも、石忤は表面採集品など、出土状況や埋蔵時期が不明なものが多い上、赤色顔料の種類についての調査が十分でなく、実態が明らかになっていないものも多い。

一般的に言って、弥生時代を通して瀬戸内と畿内では、ベンガラはあくまでも土器の装飾に用いられるだけの塗料であり、決して特別な赤色顔料ではなかった。にもかかわらず、近年、滋賀県五村遺跡出土L字状石忤には朱とベンガラの両者が付着しており、岡山県足守川遺跡から出土した4点のL字状石忤のうち1点に、朱ではなくベンガラが付着しているという事実が明らかになってきた。

九州の場合はどうか。熊本県方保田東原遺跡は県北の菊池川流域の大拠点集落であるが、朱が付着したL字状石忤数点と内面朱付着土器片多数が出土している。それに次ぐ規模の近接した集落である石川遺跡では、ベンガラが付着したL字状石忤1点と、朱が使われた内面朱付着土器片数点および朱のかわりにベンガラで模した内面朱付着土器片数点が出土した。ここでは、朱の代用品としてベンガラの使用が歴然としている。

今回、調査の機会を戴きました兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所および同委員会種定淳介氏と上田健太郎氏に深く感謝いたします。

#### (引用・参考文献)

- 本田光子 1990 「石忤考」『古代』第90号 早稲田大学考古学会  
本田光子 1994 「内面朱付着土器」「庄内式土器研究」Ⅳ 庄内式土器研究会  
本田光子 1997 「比恵遺跡57次調査出土の辰砂について」「比恵遺跡群(24)」福岡市教育委員会  
佐々木勝 1997 「(5) 五村遺跡出土の石忤について」「五村遺跡」滋賀県虎郡町教育委員会・奈良大学考古学研究室  
中原幹彦 2000 「石川遺跡出土の内面朱付着土器について」肥後考古学第218回例会発表資料  
山田隆一 2001 「L字状石忤について」「八王子遺跡」財团法人愛知県教育サービスセンター・愛知県理文センター  
南 武志、今津箇生、今井 克、高橋和也、豊 邑秋、本田光子 2002 「イオウ同位体比より見た朱の产地推定」  
『日本文化財科学会第19回大会発表要旨集』日本文化財科学会

# 写 真 図 版

写真図版1



A~D地区全景  
(空中写真)



A~C地区全景  
(北東から)



SH01(南東から)

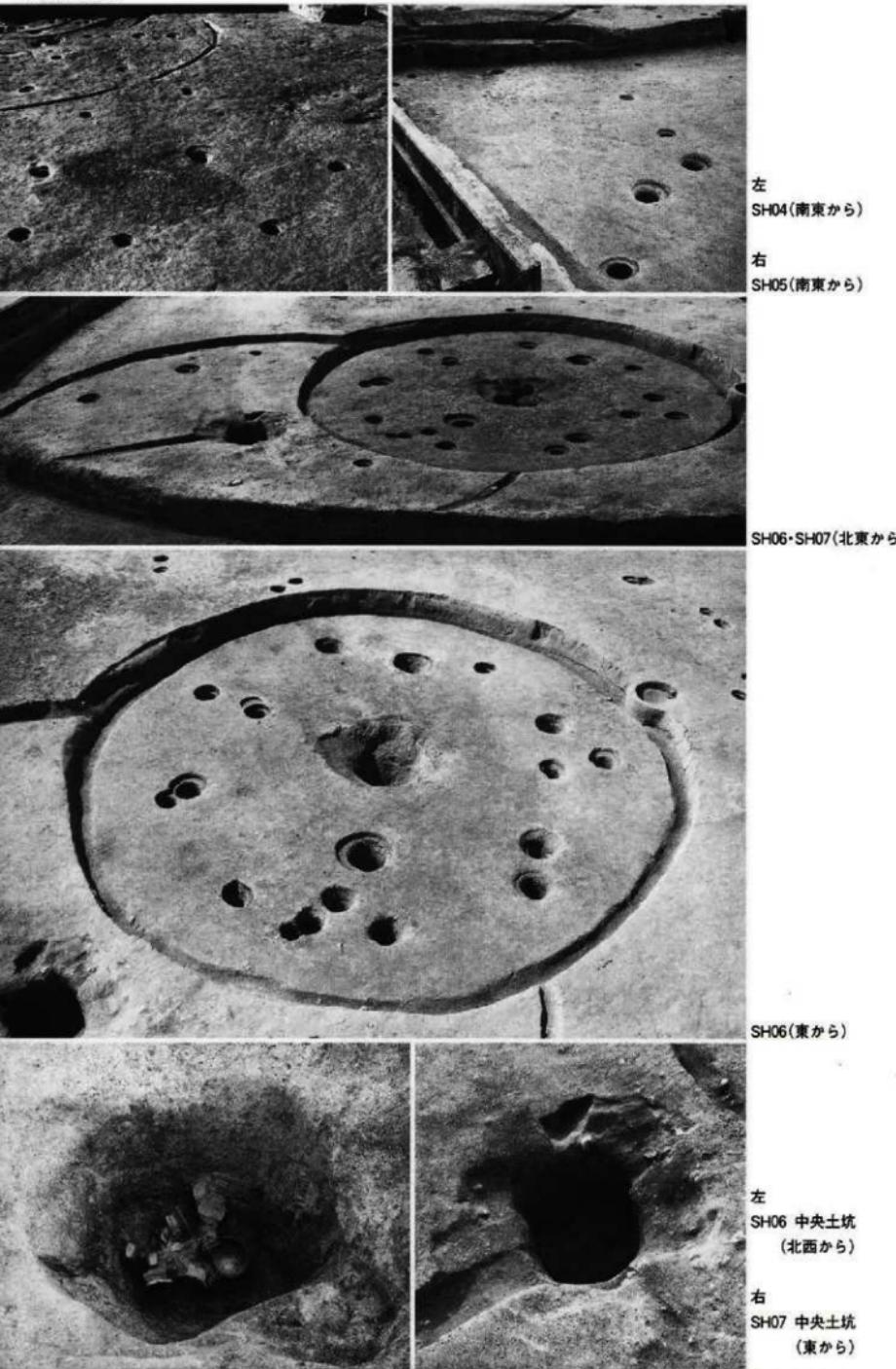


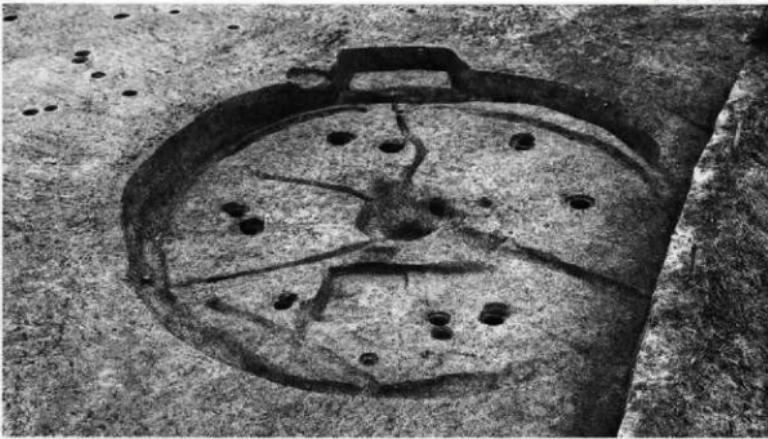
SH01～SH03(南東から)



L字状石杵出土状況  
(南から)

# 写真図版3





写真図版5



SH10(西から)

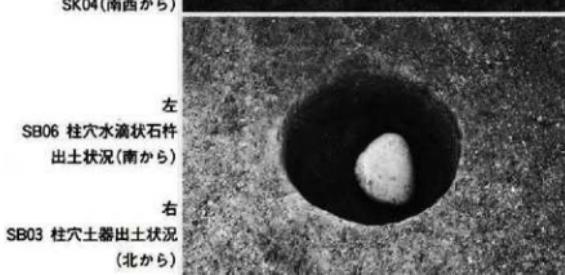
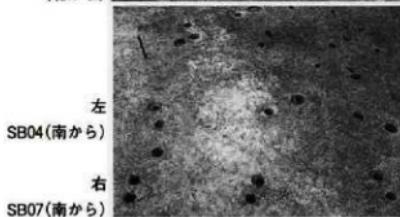
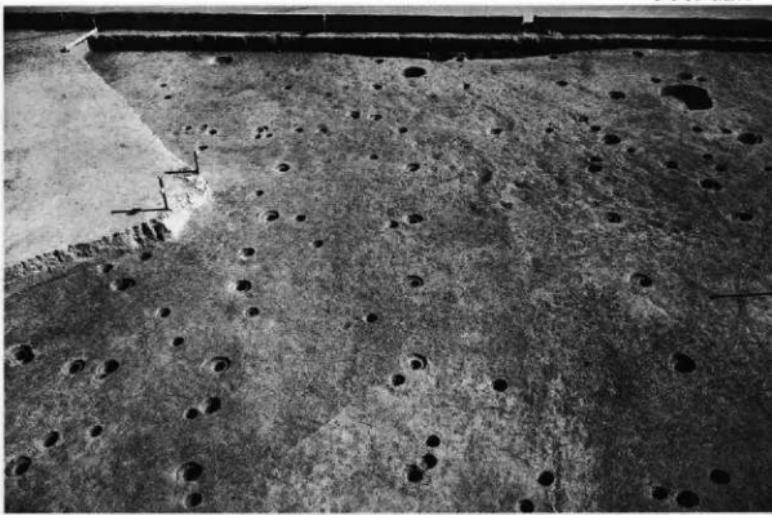


SH11-SH12(南から)



左  
SH11 中央土坑  
(東から)

右  
SH13(東から)

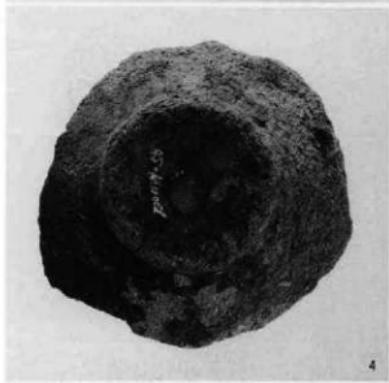




3



18



4



19



13



54



16



55

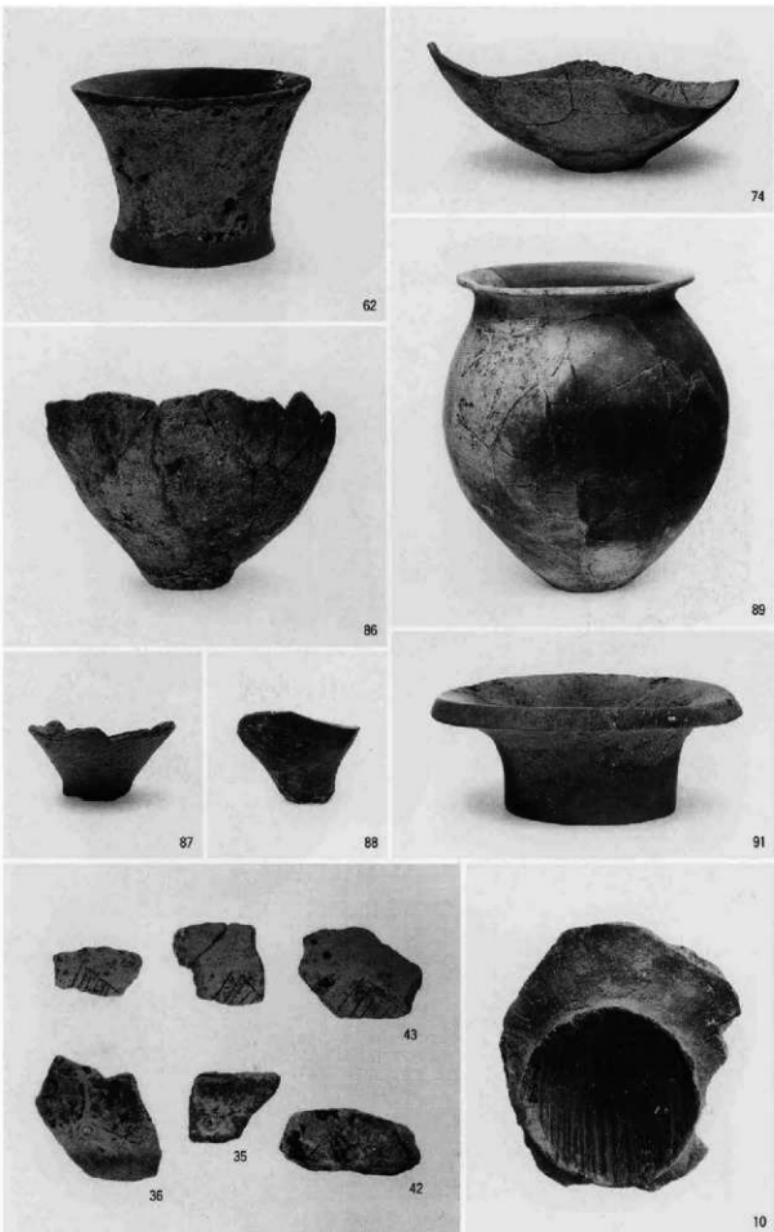
住居跡出土土器①

SH01a 出土土器(3) SH02 出土土器(4)

SH06 出土土器(13-16)

SH07 出土土器(18-19)

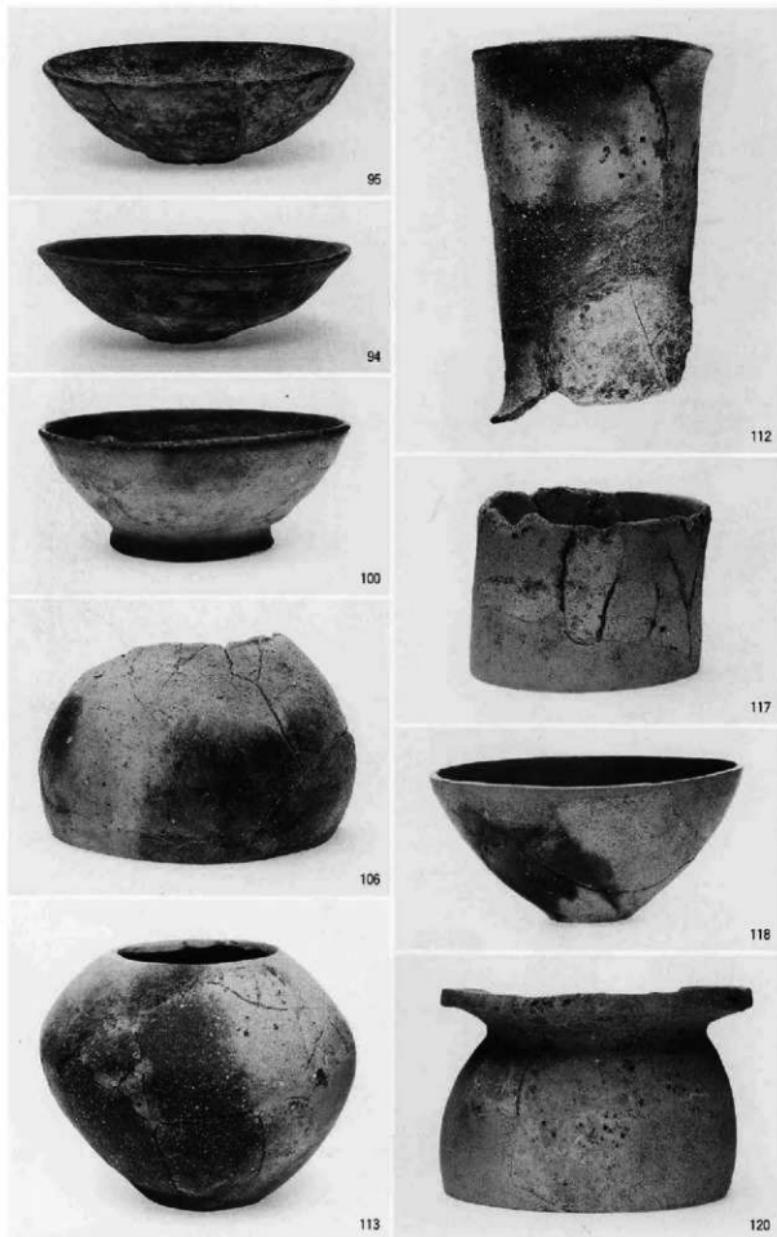
SH08 出土土器(54-55)



住居跡出土土器②

SH10 出土土器(62) SH11 出土土器(74・86~89) SH12 出土土器(91)

左下 SH08 出土加飾土器 右下 SH06 出土底部压痕土器



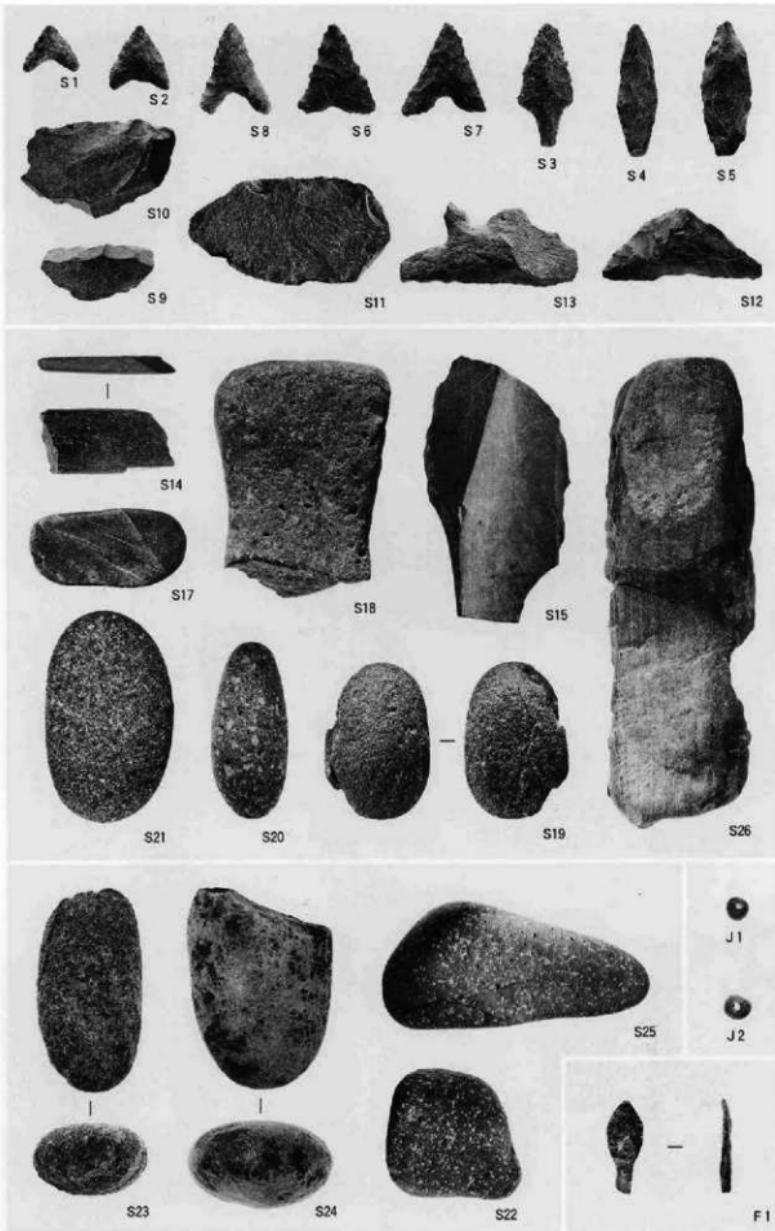
掘立柱建物・溝・土坑・柱穴出土土器

SB01 出土土器(94・95) SB03 出土土器(100)

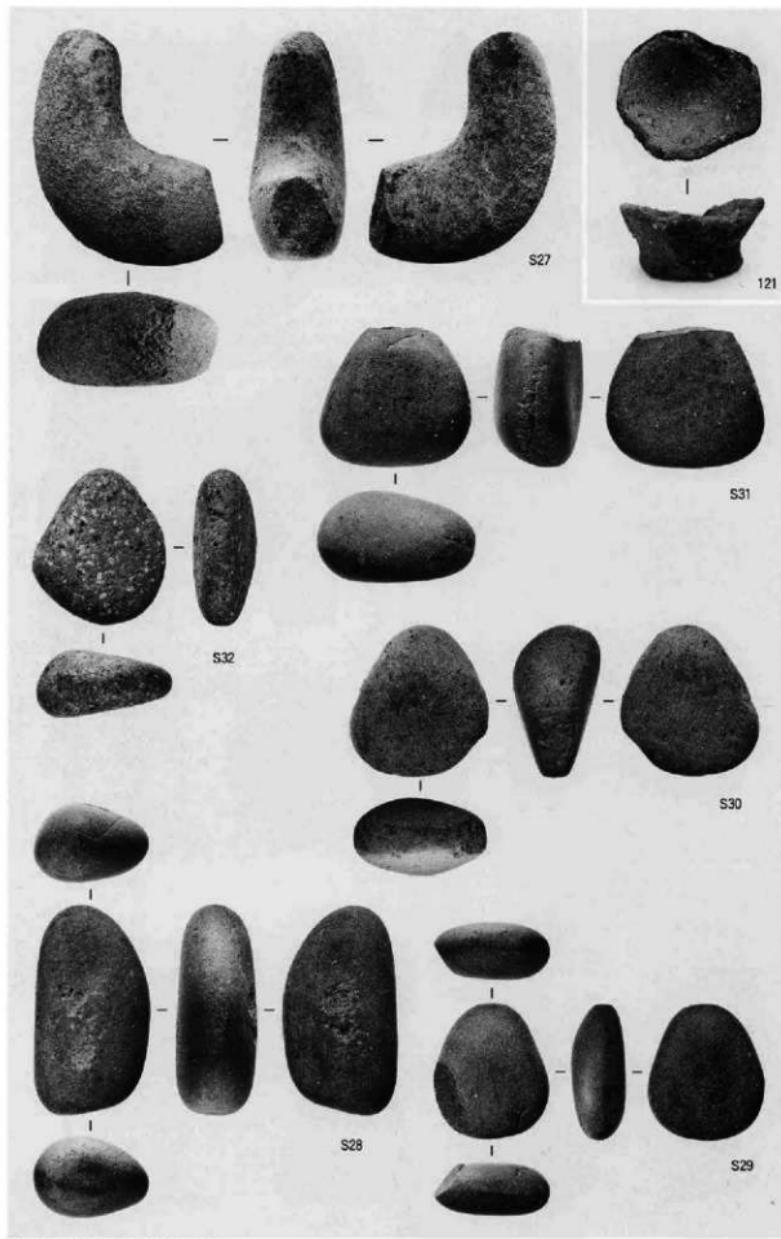
SK05 出土土器(106)

SD03 出土土器(112・113)

柱穴出土土器(117・118・120)



出土石器・ガラス玉・鉄器



出土石杵類・朱付着土器

SH02 出土L字状石杵(S27) SH06 出土水滴状石杵(S29)・朱付着土器(121)

SH08 出土棒状石杵(S28)・水滴状石杵(S31) SB06 出土水滴状石杵(S30) SH11 出土砾(S32)



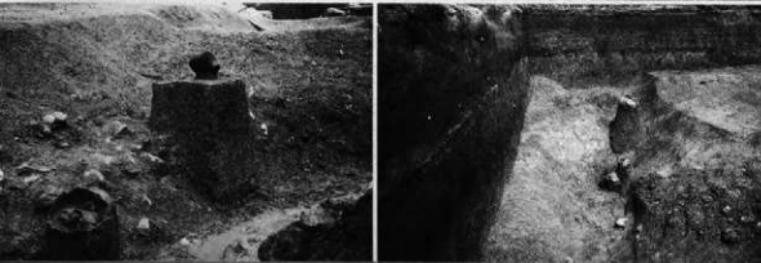
写真図版13



SD01(北東から)

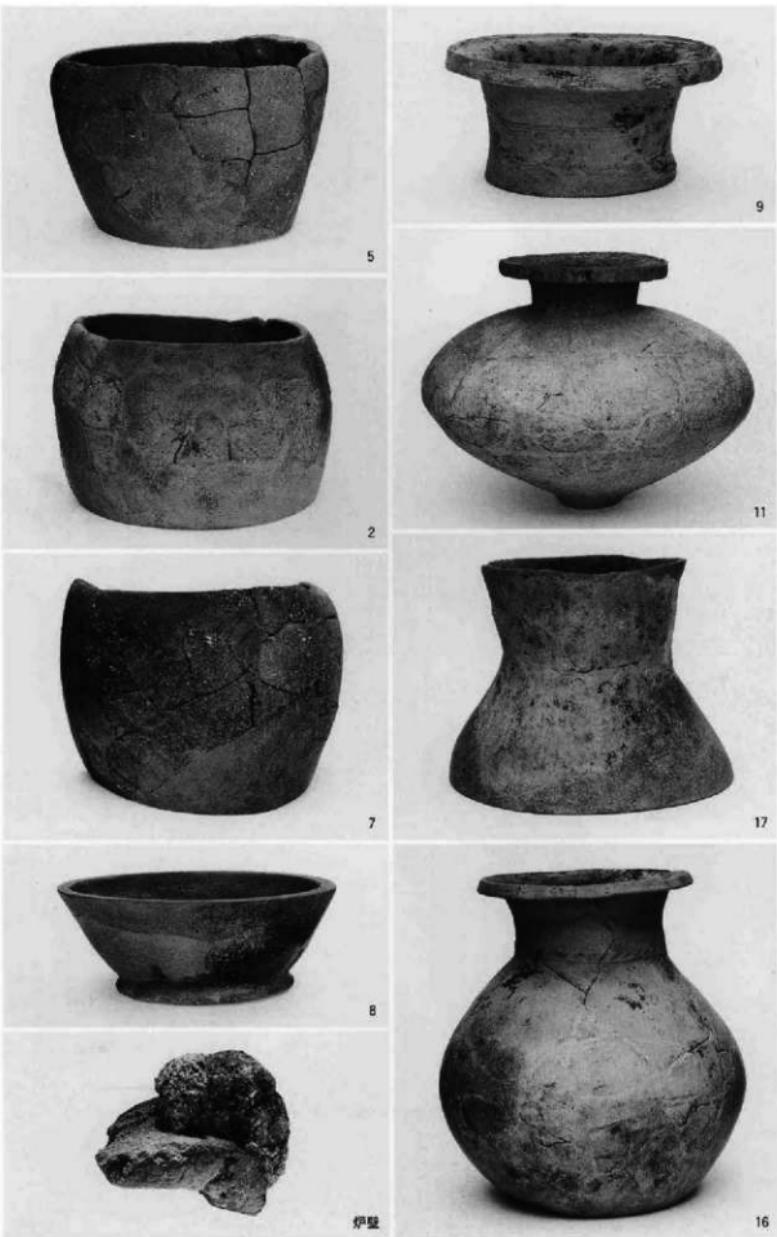


SD02・SD03  
(北から)



左  
SD02(西から)

右  
SD03(南から)



満出土土器①

SD01 出土土器(2-5-7-8・炉壁)

SD02 出土土器(9-11-16-17)



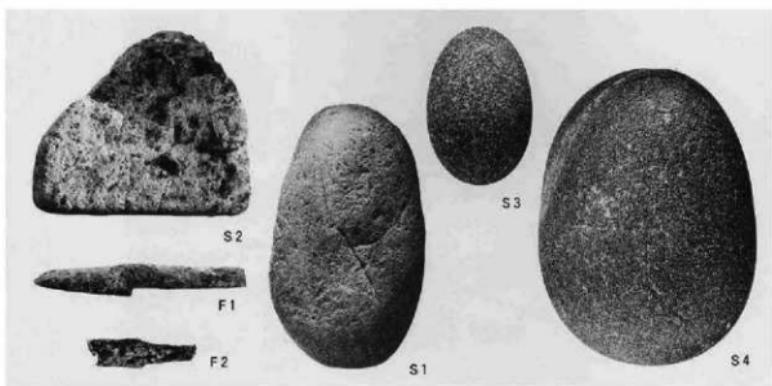
溝出土土器②

SD02 出土土器(23・24・26・27・31～35)



溝出土土器③

SD02 出土土器(40・47・50・51)



出土石器・鉄器

# 写真図版17



左  
中学校生徒遭跡見学会風景



右  
小学校児童遭跡見学会風景①



現地説明会風景

報告書抄録

ふりがな	ふたついしえびすのまえいせき							
書名	ニツ石戎ノ前遺跡							
副書名	ニツ石地区興當ほ堀整備事業（担い手育成型）に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	洲本市文化財調査報告 兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	洲本市文化財調査報告 第9冊 兵庫県文化財調査報告 第260冊							
編著者名	浦上雅史・種定淳介・上田健太郎・本田光子・志賀智史							
編集機関	洲本市教育委員会 兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒656-8686 兵庫県洲本市本町3丁目4番10号 〒652-0032 兵庫県神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号							
発行年月日	西暦2003(平成15)年3月14日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
ふたついし えびすのまえ ニツ石戎ノ前 遺跡A～D地区	兵庫県洲本市 中川原町ニツ 石字戎ノ前 字蔭	28205	2001149 2001199	34度22分58秒	134度51分50秒	2001.12.10 ～ 2002.03.22	2,911m <sup>2</sup>	興當ほ堀整備 に伴う調査
ふたついし えびすのまえ ニツ石戎ノ前 遺跡E地区	兵庫県洲本市 中川原町ニツ 石字納綴	28205		34度23分01秒	134度52分10秒	2002.02.12 ～ 2002.03.22	243m <sup>2</sup>	興當ほ堀整備 に伴う調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
ニツ石戎ノ前 遺跡A～D地区	集落	旧石器時代 縄文時代 弥生時代後期 平安～鎌倉時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 溝、土坑、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、 黑色土器、瓦器、石器、 鉄器、玉類	水銀朱をはじめとする赤 色顔料の消費に間連する とみられる。石杵・朱付 着土器などを検出。			
ニツ石戎ノ前 遺跡E地区	集落	弥生時代後期 平安時代	自然流路、溝	弥生土器、須恵器、製塙 土器、石器、鉄器				

洲本市文化財調査報告 第9冊  
兵庫県文化財調査報告 第260冊

## 二ツ石戎ノ前遺跡

—二ツ石地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書—

2003(平成15)年3月14日発行

編集 洲本市教育委員会  
〒656-8686 兵庫県洲本市本町3丁目4番10号  
TEL 0799-22-3321 / FAX 0799-26-1510  
兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所  
〒652-0032 兵庫県神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号  
TEL 078-531-7011 / FAX 078-531-7014

発行 洲本市教育委員会  
兵庫県教育委員会  
〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号  
TEL 078-362-3784 / FAX 078-362-3927

印刷 船場印刷株式会社  
〒670-0994 姫路市定元町4-2  
TEL 0792-96-3535 / FAX 0792-97-3155

